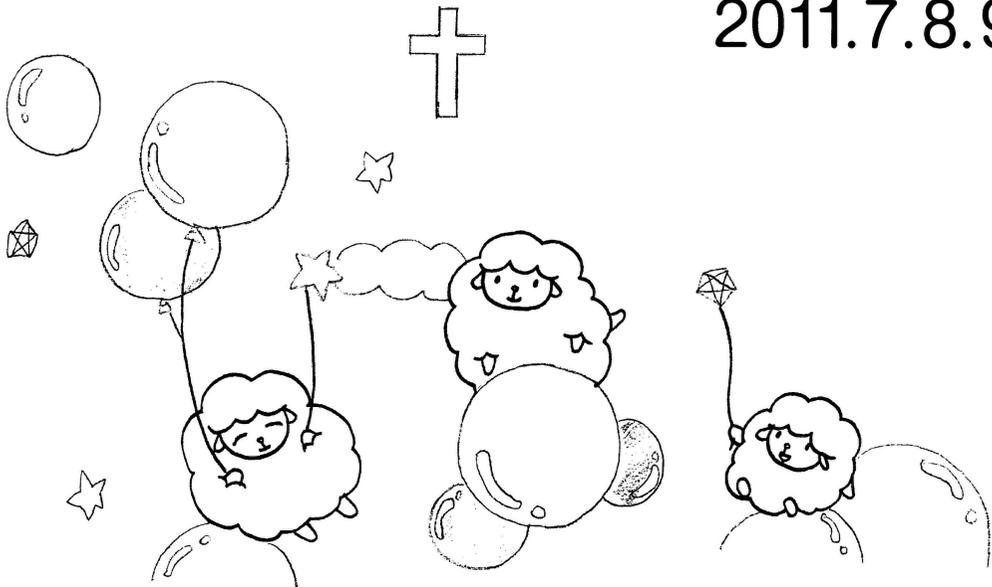


教会学校教案誌

2011.7.8.9月号



あなたがたが信じて祈り求めるものなら、
何でも与えられます。 マタイ21章22節



No.42

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

2011年度カリキュラム (2011年7～9月分)

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
7月3日	ダビデの召命	サムエル上16章	サムエル上16:7
	主は目に映ることをご覧になるのではない。見えないものに目を注ごう		
7月10日	ダビデとゴリアト	サムエル上17章	サムエル上17:47
	ダビデはただ主なる神に依り頼んで勝利した。主に依り頼む心をはぐくもう		
7月17日	ダビデとヨナタン	サムエル上20章	サムエル上20:42
	友情、信仰のきずなに結ばれた友だちが与えられることを求めよう		
7月24日	ダビデへの契約	サムエル下7章	サムエル下7:11, 12
	主は神殿建築を願うダビデを祝福し、契約を結ばれた。契約の真実を喜ぼう		
7月31日 (平和主日)	平和があるように	詩編122編	詩編122:8
	平和の土台はキリストにある。与えられた神の平和を人々と分かちあおう		
8月7日	逃げ出したヨナ	ヨナ1章	詩編139:7
	神の御心である救いの恵みは世界に及ぶ。主なる神の御心に喜んで従おう		
8月14日	魚の腹の中のヨナ	ヨナ2章	ヨナ2:10後半
	ヨナの祈り。不従順な者を赦し、立ち上がらせてくださる神をほめたたえよう		
8月21日	ニネベで宣べ伝えるヨナ	ヨナ3章	ローマ9:15
	主なる神は悔い改めを喜ばれる。罪人を赦してくださる神をほめたたえよう		
8月28日	とうごまの木とヨナ	ヨナ4章	マタイ18:14
	すべての人を愛して惜しむ神の愛を知って、悔い改めの愛に生きよう		
9月4日	ソロモンの知恵	列王上3:4-15	箴言9:10
	真実の知恵は神のもの。善と悪を判断する知恵、聞き分ける心を祈り求めよう		
9月11日	ソロモンの偶像礼拝	列王上11:1-13	列王上11:6
	神からの知恵を捨て、偶像礼拝を行ったソロモン。神の怒りを心に刻もう		
9月18日	バアルと対決するエリヤ	列王上18:16-45	列王上17:1後半
	バアルとたたかうエリヤ。主こそまことの神であることを知るう		
9月25日	バビロン捕囚	歴代下36:11-23	ローマ11:22前半
	愛する民をうたねばならない神の痛み。歴史を支配しておられる神を畏れよう		

も く じ

2011年4・5・6月カリキュラム

まえがき	岩崎 謙	4
巻頭説教	大西良嗣	5
日曜学校・教会学校訪問		
まきば幼稚園の紹介	藤澤徳治	9
講演「大好きなイエスさまを物語る」		
～児童説教の作成とケーススタディ～	二宮 創	13
教案誌会計報告		17
自由募金のお願い		18

聖書研究・説教展開例・分級展開例

7月 3日	20
7月10日	27
7月17日	34
7月24日	41
7月31日	48
8月 7日	55
8月14日	62
8月21日	69
8月28日	76
9月 4日	83
9月11日	90
9月18日	97
9月25日	104

2011年7・8・9月カリキュラム	111
2011年度年間カリキュラム	112
執筆者よりひとこと・あとがき	114

まえがき

岩崎 謙（神港教会牧師）

〈聖書学校のお話から考える説教の基本〉

聖書学校のお話は、子どもへの語りかけです。分かり易く、届く言葉で語らねばなりません。しかし、それは、難しいことを噛み砕いて語るという言葉の作業で完結するものではありません。語りたいことを分かり易く話します。つまり、語りたくないことがない、どのように言葉を整えても何も伝わりません。

このなかで、まず、聖書を読むことが土台となります。個人的に語りたくないことではなく、聖書から示された語りたくないことです。次に、神様からの委託があります。神様のメッセージを神様から託されて子どもに届けるという使命感です。そして、それを、いやいやではなく、義務でもなく、まさに、自分が語りたくないこととして語らねばなりません。聖書を読んで、神様が子どもに伝えるように託して下さったという確信をもって、かつ、話したいという熱い思いから紡がれる言葉です。

その際、子どもに届けるメッセージですが、そのメッセージは必ず自分に必要な語りかけです。自分が感激し、自分が悔い改めに導かれ、自分が励まされたメッセージです。このような自分の御言葉体験が、説教準備において、決定的な重要性を担っています。自分は学ぶことが何もなかったが、子どもには必要であろうというような姿勢は、本当に御言葉に触れたなら、あり得ないはずです。もちろん、子どもと大人は違うのですが、語る者が御言葉に捕らえられており、新たに養われたことのみが、子どもに伝わっていきます。

そのうえで、どう届けるかという課題と向き合います。リジョイスの編集会議を月一回行っています。そこでは、「いのちのパン」の校正も行います。最近、小学校教師を定年された婦人が助言者として加わって下さいました。自分が知っていると思っていた言葉が、子どもには難しかったり、子どもが知っている、その言葉では聖書の意味内容を伝えられなかったり、その方の助言から教えられることが多くあります。また、リジョイス編集会議に若い人にも加わってもらったのですが、こちらが問題として熱く語りたくないことが、若い人には全くの関心外であることにも気付かされました。

子どもが何を考え、何に悩み、何を問題としているかを知らないと、語れないこととなります。その意味では、聖書学校の先生方に自信をもっていただいてもよいかと存じます。どんなに立派な教材があっても、子どもと共にいる教師が目の前の子どものために語り直す作業なしに、そのまま使われることはあり得ません。聖書の語りかけを自分で聞いたなら、教材から離れて自由に語ることも許されています。

4月となり、聖書学校も新しい歩みを始めています。先生方のために、お祈りください。また、ここで語ってきた子どもへの説教は、まさに説教の基本であり、大人への説教にすべて当てはまります。とくに、東日本大震災後は、人びとの感性に変化が生じています。この現状を直視して、ここで通用する言葉を祈り求めねばなりません。（教育機関紙委員会委員長）

「主の神殿の山に向かう大河の中で」

～ミカ書4章1～8節による説教～

大西良嗣（滋賀摂理伝道所宣教教師）

終わりの日に

主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち

どの峰よりも高くそびえる。

もろもろの民は大河のようにそこに向かい

多くの国々が来て言う。

「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。

主はわたしたちに道を示される。

わたしたちはその道を歩もう」と。

主の教えはシオンから

御言葉はエルサレムから出る。

主は多くの民の争いを裁き

はるか遠くまでも、強い国々を戒められる。

彼らは剣を打ち直して鋤とし

槍を打ち直して鎌とする。

国は国に向かって剣を上げず

もはや戦うことを学ばない。

人はそれぞれ自分のぶどうの木の下

いちじくの木の下に座り

脅かすものは何もないと

万軍の主の口が語られた。

どの民もおのおの、自分の神の名によって歩む。

我々は、とこしえに

我らの神、主の御名によって歩む。

その日が来れば、と主は言われる。

わたしは足の萎えた者を集め

追いやられた者を呼び寄せらる。

わたしは彼らを災いに遭わせた。

しかし、わたしは足の萎えた者を

残りの民としていたわり

遠く連れ去られた者を強い国とする。

シオンの山で、今よりとこしえに

主が彼らの上に王となられる。
羊の群れを見張る塔よ、娘シオンの砦よ
かつてあった主権が、娘エルサレムの王権が
お前のもとに再び返って来る。

(ミカ書 4章1～8節)

【序】

ここで告げられている「終わりの日」の様子は、映像に直すならば、どれほど素晴らしく、印象深いものであろうかと思わされます。映画を作ったならば、素晴らしい映像美が期待できるだろうと思います。

【1】

主の神殿の山が、どの峰よりも高くそびえています。ヒマラヤのような山脈が目に見えます。その中でも、ぬきんでて高い山が、主の神殿のある山です。

実際のエルサレムは、それほど高い山ではありません。しかし、ここで言われている山々は、世界の国々で祭られる神々を礼拝する場所を象徴しています。主は、それらの神々をはるかに超えて、まことに力のある方です。「山々の頭として」そびえる様子は、主こそが、全世界を造り、治められる神であられることをよく表しています。

そこに、大河が流れていきます。上空から見ると、乾いた荒れ野を流れる大きな川の流れのように見えるのでしょうか。

普通、川の水は、上から下に流れるわけですが、この川は違います。下から上へ、主の神殿に向かって流れています。

カメラが近づくと、そこに流れているのは水ではなくて、「もろもろの民」であることが分かります。「あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、数えきれないほどの大群衆」です。この表現は、黙示録7章の言葉ですが、黙示録では、この大群衆が「白い衣を身に着けて、手になつめやしの枝を」持って

います。ミカ書の「もろもろの民」も、同じような様子であるのかもしれませんが。そうだとすると、彼らが形作っている大河は、白い衣によって、太陽の光をはじき返す、輝かしい流れとなっていることでしょう。

水のざわめきのように聞こえていた音は、近づいてみると、「もろもろの民」「多くの国々」の民が語っている言葉であることが分かります。彼らが語る言葉はこうです。

「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。
主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう。」

彼らは、目的なく行列をなしているのではありません。「主の山」に向かっています。「ヤコブ」つまり、主の民イスラエルの家、エルサレムの神殿に向かっています。そこに向かう目的は、主が示される「道」を聞き、その「道を歩もう」ということです。

その「道」が、2節の終わり2行で言い換えられます。主の道とは、「主の教え」であり、「御言葉」です。彼らは、主の御言葉に聞くために、主の神殿へと向かっているのです。

ここで突然、カメラは鍛冶屋の風景を映し出します。もはや必要なくなった剣や槍を、ごうごうと音を立てる高温の炉で熱して、打ち直し、鋤や鎌を作ります。武器をつぶして、農機具を作っていきます。主の教えに国々が従う時、もはや武器は必要なくなります。

全世界の支配者であり、裁く権限を持つ方が、「はるか遠くまでも」地の果てに至るまでの国々を裁かれます。それによって、主の御言葉のとおり、主の正義が実現されることとなります。

それは、もはや武器を必要としない、究極の平和です。もはや「戦い」を学ぶ必要さえなくなります。

4節には、その平和のゆえに、ぶどうや、いちじくといった収穫を、脅かされることなく楽しむことができる様子が記されています。

[2]

6節は、再び、「その日が来れば」と言って、「その日」終わりの日のことを語り始めます。

この箇所では興味深いのは、「足の萎えた者」が集められるということです。

レビ記21章にこのように記されています。

「アロンに告げなさい。あなたの子孫の中で、障害のある者は、代々にわたって、神に食物をささげる務めをしてはならない。だれでも、障害のある者、すなわち、目や足の不自由な者、鼻に欠陥のある者、手足の不釣合の者、手足の折れた者、背中にこぶのある者、目が弱く欠陥のある者、できものや疥癬のある者、睾丸のつぶれた者など、祭司アロンの子孫の中で、以上の障害のある者はだれでも、主に燃やしてささげる献げ者の務めをしてはならない。……ただし、彼には障害があるから、垂れ幕の前に進み出たり、祭壇に近づいたりして、わたしの聖所を汚してはならない。わたしが、それらを聖別した主だからである。」

レビ記においては、障害がある者は、祭司として、礼拝をつかさどることが許されていませんでした。障害のある者が、主の幕屋の垂れ幕や、主の祭壇に近づくと、「聖所が汚れる」と、主は言われていたわけです。

ところが、今日の箇所では、そのような「障害のある者」「足の萎えた者」をわざわざ「集める」と書いてあるのです。

しかも、7節には、「足の萎えた者を残りの民としていたわる」と書かれています。そのような特別な取り計らいを受けて、「遠く追いやられていた者」と共に、「強い国」主に仕える

民の国、主の王国の民とされるのです。「主が彼らの上に王となられ」ます。

[3]

新約聖書を持つ、私たちクリスチャンは、ここに記された「終わりの日」の出来事が、イエス・キリストが世に来られることによって実現したことを知っています。

「足の萎えた者」など、障害を持つ者、病の者は、イエス様の特別な「いたわり」を受けて、癒しを与えられました。彼らは、そのような癒しを体験することを通して、特別な「いたわり」をもって、イエス様という王の民となるように招かれました。

イエス様は、ご自身こそが「道」であられると語られました。また、ヨハネ福音書は、イエス様を「言」であると、語っています。

イエス・キリストのことを、使徒たちが宣べ伝え、ユダヤ人ばかりでなく、ギリシャ人も、そして「もろもろの民」「多くの国々」が、道であり、言であられるイエス様のことを聞くようになりました。

「主の山に登り」、主が示される道（イエス・キリスト）を知り、キリストに結ばれた歩みをなし、主の教え、主の御言葉、キリストの福音を聞く者たちが、世界中から、大河のように主のもとに押し寄せる時代に、今や至っています。

「終わりの日」は、イエス様によって、すでに始められました。世界宣教の進展を見るならば、「終わりの日」の完成に向けて、主が確実に働いていらっしゃることを理解することができます。

100年前、ラテン・アメリカの福音主義クリスチャンの数は10万人に満たなかったそうです。現在は、1億5000万人以上の福音主義クリスチャンがラテン・アメリカにいます。

100年前、アフリカにいる福音主義クリスチャンの数は、160万人程度でした。現在、1

億7500万人以上の福音主義クリスチャンがいます。

100年前、アジアと太平洋地域にいた福音主義クリスチャンは、約400万人でした。現在、2億人以上の福音主義クリスチャンが、アジアと太平洋地域にいます。

全世界で、6億5000万人以上の福音主義クリスチャンが、イエス・キリストを礼拝しています。その内、80%以上が、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカにいます。もはや、キリスト教は、ヨーロッパの宗教ではなくなりました。文字通り「もろもろの民」「多くの国々」の民によって、キリストの福音が聞かれています。

【結】

日本のクリスチャン、日曜学校の教師たちは、自分たちの目の前にあることだけを見ていると危険です。主の御言葉のリアリティーを感じることができません。日曜学校がふるわない実情だけを見ると、改革派教会はもうダメなのではないかとか、ほそぼそと死に行く教会の延命策として伝道をしているかのように感じてしまいます。

主が「終わりの日」の完成に向けて、着実にご計画を実行されていることを見失ってはなりません。私たちは、確実に、「主の神殿の山」に向かう大河の中にいます。どの峰よりも高くそびえる「主の山」へと向かう大河「あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、数えきれないほどの大群衆」の一員として、進んでいます。

イエス様が再び来られる時には、「終わりの日」が確実に完成します。私たちは、イエス様

の民として、イエス様と共に、その完成に向けて歩んでいます。しかも、全世界の主の民と共に、キリストにおいて一つにされて、完成に向けて歩んでいます。

日曜学校の教師であるということは、「もろもろの民」の大河の中から、高くそびえる「主の山」を指差すようなことです。そのような働きへと召された幸いを感謝しましょう。あそこに主がおられる、そこに向かおうと、身を乗り出して主を指し示す、そのような働き人でありたいと願います。

【祈り】

主よ、

私たちを、あなたの山に向かう者として、その大河の中に加えてくださり、ありがとうございます。イエス様が、ここに記されたような、素晴らしい「終わりの日」に向けて、着実にご計画を進めてくださっていることをも感謝いたします。

日曜学校の教師たちは、特にイエス・キリストを指し示すことに召された者たちです。どうぞ、私たちの目を開き、霊の視野を広げて、あなたの力強い御業を仰ぎ見させてください。あなたの力強いご計画の中にあることに励ましを受け、それぞれに与えられた務めに、喜んで力を発揮することができるように、憂いを取り払ってください。

再び来て「終わりの日」を完成してくださる主イエス・キリストのお名前前で祈ります。アーメン。

(この説教は神学校チャペルで行ったものを教案誌のために直したものです。)



まきば幼稚園の紹介

～まきば幼稚園の目指すもの～

藤澤徳治（まきば幼稚園理事長・園長）

1. 幼稚園の成立ちと経緯

四日市の軽便鉄道赤堀駅の低いプラットフォームの目の前に、白亜の瀟洒な教会が見えていたのが1960年頃でした。

牧師諏訪武臣先生が山から解体して運んで建てた教会堂を更に、ここ松本へ、市街地から5キロ程離れた郊外へ越したのは、それなりの理由があったのです。深い意図はわかりませんが、これからは幼児教育が重要視される、幼子をイエスさまの元へ導こう、というお考えもあったに相違ありません。

駅前の4、5軒の家の周りは、当時は蛙が鳴き騒ぐ田んぼがあり、春は菜の花が咲き乱れる畑が山裾まで広がっていました。そのような中、地域の方々の要望もあって信者の子供と地域の子ども14、5人を集めて親族の方を園長に据え幼稚園が始まりました。1963年10月のことです。周辺にはそれらしい施設もなく、子どもたちは増えていきました。

狭くなると教室を継ぎ足して受入ました。創設のご無理があって病を得られた諏訪先生は、暫くの療養ののち、那加教会へ転任されました。1965年無牧の教会へ津島教会と兼牧で岩崎洋司牧師が来られ園長も兼任。その後齊藤為吉牧師が上野緑ヶ丘教会と兼牧、園長兼任。1970年頃は園児100名を越すようになっていました。しかし、無認可のため県の指導もあって1971年、齊藤園長の決断で学校法人化をしましたが、これは大変なことだったのが後で判明いたします（廃園すれば国へ帰属する）。

その頃、周辺にマンモス園が設立され、園児が毎年10名ずつ減って全園児数も25名となっ



赤堀の教会堂



現在の幼稚園園舎

ています。

中根汎信牧師（園長）の英断で一斉保育から自由保育へ、聖和女子大学（当時）出身のS先生を呼び寄せ、他園にない保育をいたしました。自由保育の取入れによって、父母たちにもその保育の好きが徐々に認められ園児数も増加しつつありました。中根汎信牧師（園長）から金田幸男牧師（園長）へ移り変わる頃でした。

今のまきば幼稚園の礎は、この時築かれたのです。

教会建物は100年余を経て老朽化がひどくなり危険が問われるようになりました。この時、教会／園舎を改築する話がでてきましたが、資金も充分あったわけではありません。教会／幼稚園の建設を巡って教会内部が揺れ動き、大変な試練を受けることとなります。その時、筆者が事務長として出向し、何とか教会／幼稚園を建てようという気運が盛上って参りました。金田牧師の大勇断で県や市の援助も受け、各教会の寄付／園債も仰ぎ、二階を教会（幼稚園遊戯室）一階を園舎、事務室に設計されました。新園舎は収容定員80名として出発しましたが、創設30周年（1994年）に3歳児用の別棟を建て定員105名となります。横の畑を購入して1993年園庭を広げ、金田先生が関西へ転任されたのを機会に牧師／理事長／園長を一人で兼務することの重責を考え各理事が分担することになりました。丁度、K学院を退職された熊崎千尋理事を園長に、筆者が理事長を兼務する組織に変更いたしました。その後、女性園長の時に園児を収容しきれなくなり、又もっとよい環境を求める必要もあって2006年隣地を求め翌年木造の新園舎（300坪）を建てると共に収容定員は145名となります。20年経た旧園舎は名実ともに教会に帰り、宗教／学校法人の分離が確立いたしました。

このことは多くの信徒また卒園生、保護者の祈りと援助があったことを憶えねばなりません。与えられた数々は全て「主は備え給う」ことの表れでした。主は誉むべきかな。

2. まきば幼稚園園則

園則の第1章第1条には、次の文言が記されています。

「この幼稚園は聖書の教えに基づき清潔な宗教的環境の中で、心身の健全な発育をはかり、よい習慣をつけ、学校教育法第77条および第78条に従って幼児を保育し、人を愛し、真理を尊び誠実で善良な人格の基礎を築くことを目

的とする。」上記に基づいて私達はまきば幼稚園の保育の基本としていますが、自由保育という言葉は書いてありません。それ専門の教科書すらないので。

しかし、その特質は教師が子どもを指導指揮してやらせるのではなく、子ども自らが行動を起こして作業や遊びに取組む保育です。それだけに教師の見識と知恵が必要とされ環境設定に心を配らなければなりません。

月一回の教師会では長谷川潤牧師に聖書とキリスト教の理解と信仰へのお話をいただいています。教師も求道者の気持ちを共有して保育にあたるためです。また毎週月曜日、園児たちはイエス様のお話しを楽しみにしています。長谷川先生の笑顔と話術の賜物です。

教師は、子どもたちに自分からいろいろと遊びの企画や創造力、想像力をかき立ててゆく能力を発揮できるように、助言や子どもたち同志のコミュニケーションを計るようにしなければなりません。そのために教師会に於いて年間行事計画を立てる中で、主題に沿って何が必要か、どういう流れ、つながりを持ってゆくのかを図ることが非常に大切になります。教師会はいつも侃侃諤諤の議論が交わされ熱気が溢れています。それだけ保育への情熱、子どもを愛する思いが教師たちを満たしているのです。

3. 幼稚園の日々の保育

午前8:00、保育の前に朝礼をいたします。宗教主事である長谷川潤牧師から『リジョイス(Rejoice)』の〈いのちのパン〉より聖書を学び、その日の祈りを捧げます。一日は祈りをもって始めるのです。その後、手分して動物たちのエサやりと園庭等の清掃をいたします。

園児の登園は9:00～9:20の決まりです。送迎バスは2台ありますが、近所の子は自転車や徒歩で通園します。

保育の始まりは、園カバンの中から色々なものを取り出すことから始まります。自分のことは

自分ですのです。朝の集いがあるが神様に今日一日のお恵みとお守りを祈ります。合わせて世界中の子どもたちのために祈ります。部屋によっていろんな子どもさんびかが歌われます。又、昨日の出来事やお友達の消息を話し合います。病気で休んでいる子のために早く元気になるように祈ります。

9:45、朝の自由活動の時間です。昨日からのつづきの工作や大型積木のお家を建てる子、女の子はママゴト遊び、粘土、お絵かき等、思い思いの遊びを展開するのです。年齢差によって遊び方も変わってきます。先生から教えられた通りではなく教材屋さんからのものでもなく、自分がやりたいことを自分が考えて創作する。時に友達と力を合わせてする遊びや工作もあります。ティッシュの空き箱、牛乳パック、ペットボトル等々を利用しての創造力、表現力、協調性が養われるひとときです。お片付けをして、11:40～、昼食です。火・木・金はお家からのお弁当を、月曜日は自然工房のパン給食、水曜日はおにぎりとお汁、土曜日はお味噌汁、作ってくださるお母さんの顔が見えるお昼時です。食事が済んだあとは、絵本をみたり、お話を聞いたりして過ごします。

13:00、雨降り以外は、楽しい外遊びの時間です。2000年に作られた森と小川の中に浸ります。他の幼稚園にある大型遊具はありません。僅かに東屋（マキバハウス）の脇につけられた滑り台とジャングルジム、大鼓橋がある位です。子どもたちは様々な道具を用いて川遊びをします。樋、巧技台、板類、時に園庭は水でピタピタ。夏はそ中でどろんこ大会。心を開放し体を使って自由自在に遊ぶ子らを天の神様が見守られます。

周辺の木々も影を作ってくれたり、木登りを提供します。秋は枯葉、落葉の中であたたかく寝たりします。心も体も満足した子どもたちは、2:20、降園を迎えます。その前に終りの会で今日一日の恵みを感謝します。まきば幼稚園は取

立てて数字や国語を教えませんが、本を読むことや遊びの中でルールや人間関係の基本を学んでいきます。何よりもコミュニケーションを大切にしています。保育の場で、多くの時間を割いています。

幼稚園の年間行事計画の中で例年の定期的な行事（入園・卒園式・クリスマス等）は、最もふさわしい日を勘案して決められます。又、父母の会との連携も大切になっています。プレイデー（運動会）やバザー、講演会等は父母の会の協力なしでは行えません。

特にバザーは現在一大イベントで全園児のお母さん方が一致協力しての行事です。夏前から準備が始まり、秋の終り頃全家庭が参加します。色々な班を作って自主的に、又自由に参加します。特技のある方から教えられたり、また教えたりして、それは賑やかです。〈まきば〉ほど日常父母の方の出入りが盛んなところはないでしょう。ほとんど毎日、父母室（専用）が開いていますし、話し合う姿が見られます。「お母さんも楽しい幼稚園」はこうして育っていきました。

バザーは幼稚園が貧しいのを見て始められて40数年経ちますが年々盛んとなり、近隣の人を入れると1,000名程が来てくださいます。ほとんど父母の会の手作り品ですから人気があるのです。ゲームコーナーでは教師たちも手伝って子どもと一緒に遊びます。

数年前から鈴鹿連峰の麓の休耕田をお借りして子どもたちで米作りを始めています。種まき、田植え、稲刈り、脱穀、そして収穫したお米を土間の竈で炊いてみんなでいただきます。イモ掘りも土を耕し苗植えイモ掘りと用意されたものではなく、それらのプロセスを大切に子どもたちは汗を流すことの尊さ、収穫の喜びを味わうことを学びます。

4. 仲間とのつながり

幼稚園は一園一園はほとんど小さな群れです。私立は公立と違って、全部自前でやらねばなりません。国と市からの補助はありますが、小さな園は苦しい経営を強いられます。

団体として全国の私立幼稚園協会の下に県・市の組織があって各々がお互いに競い合い助け合っています。市、県の当局へ補助の交渉も続けます。そのための役員は順番にまわってきますので、その方にも力を注がねばなりません。

それとは別にキリスト教の保育連盟があって近い存在として神さまに連なる仲間があります。残念なことに20年程前から教会に属する幼稚園の休園・廃園は増え、現在およそ3/4に減少しました。原因は色々ありましようが以前ほど幼稚園経営は易しくない、ということです。

父母の方々の学歴、考え方が昔と異なり、情報社会の今日、四方にアンテナを張り、粗相の無いように運営し、しかも自らの立場を守り堅持していくことは容易ではありません。更に幼保一体化、認定こども園、こども園構想が重なって、この先の困難さを浮き彫りにしています。これから、幼保の再編成の時代が来るやも知れません。

5. おわりに

40数年を〈まきば幼稚園〉に関して思うことは、時代は変わっても、子どもは変わらないということです。各時代でまきば幼稚園のスローガンも変化しました。

「豊かに感じ／豊かに考え／豊かに労し／豊かに感謝することもに！」

このスローガンに長い間幼稚園は活かされてきました。

又、「いのちといのちの繋がりの中で生きる喜びを子ども達へ」。いま社会不安、学校崩壊の中で自ら命を絶つ子どもたちが多くいます。神様が創ってくださった尊い命を大切にするとともに、わたしたちは多くの命を戴いて生きています。その命に感謝して源である創造のみ業を思い、生かされている喜びをもっと子どもたちに伝えていく使命が私達にあります。

ロバート・フルガムは「人生に必要な知恵はすべて幼稚園（日曜学校）の砂場で学んだ」と言っています。

まきば幼稚園が園児たちを、神の恵みと憐れみを受けつつ、この言葉どおりの役目を目指し、果たすことを祈り求めています。

2014年に〈まきば〉は創設50年を迎えます。

(四日市教会会員)



「大好きなイエスさまを物語る」

～児童説教の作成とケーススタディ～

二宮 創（中部中会日曜学校委員）

序—説教の作法も演述も、説教者それぞれの説教観によって決まる。

(1) 説教作法を共に学ぶ。これが今回の研修課題である。講師の役目を与えられた時、すぐに思い浮かんだのは、説教者として訓練を受けていた頃の先輩からいただいた言葉だった。「説教は、説教者の持つ説教観によって、作り方も語り方も決まるものだ。」その言葉から伝わってきたのは、「お前はお前なりの説教観を磨き続けよ。説教とは何なのか、探求し続けよ。それが生涯かけての説教者の務めなのだ。」という後輩へのメッセージだった。それが私の座右の銘となっている。説教の作法も演述も、説教者それぞれの説教観によって決まる。そう考える者が、説教作法を共に学ぶとすれば、必然的にケーススタディー（事例研究）とならざるを得ない。

(2) 当委員会が実施したアンケート「礼拝と分級」の結果を拝見し、児童説教をするにあたって学びの必要を感じているCS教師が大勢いること、「子どもたち向けの説教の作り方」「子どもたちへの説教の語り方」について多くの関心が寄せられたことに、奉仕仲間の一人として励まされる。作り方と語り方を切り離さないで、両方を学ぼうとされる同僚たちに共感を覚える。説教を「作る」営みは「語り」に備えること、説教を「語る」営みは「作り」に支えられてなすこと。そして、これらの営みを決定づけるもの、大前提となるものがある。それは「聴く」営みに他ならない。今回はそこに焦点を絞って、ご一緒に学んでゆきたい。

(3) ここで一つ問題を提起したい。説教を作る営み・語る営みにおいて、「子供向け」「大人向け」の区別が起ってくる事実を否定しない。それでは、聴く営みにおいて、そのような区別はあるのだろうか。聖書にある神の言葉を聴くことにおいて、「子供向けの聴き方」「大人向けの聴き方」という区別は存在するのだろうか。あなたはどうか答えになるか。私はこう答えたい。聴く営みにおいて、子供向けと大人向けの区別が存在するとは考えない。これには、今回の講師の説教観が深く関わっている。「聖書から御言葉を聴く」とは、具体的にどんな営みなのか。その一つの事例を提示したいのである。結果的にそれは、一つの「説教観」を提示することになる。それをひとことで表わすなら、「説教とは預言である」「説教者は預言者である」ということに尽きる。（参考／ウ小教理23～24、88～90）（参照／エレ14:14、23:16～17）

I—説教者はまず、

「主が語られることを聴き取る」

このことに献身した預言者である。

1. サムエルが祭司見習として成長し、預言者へと献身してゆく姿に、自分を重ねよう。

(1) 神の言葉を聴く営みにおいては、大人も子供も区別はない。その具体例を、サムエルに見る。母ハンナは、第一子サムエルとともに、一生涯を主におささげした「ナジル人」であった（サム上1:11、15、0/民数6:1-8）。神の選びの器は、母なる教会に宿る前から、信徒として誕生した後も、献身者として召されている。な

ぜなら主イエスは、最後の晩餐でナヅル人の誓願（マルコ14:25）を立て、神の国の完成のために献身されたからである。この方に結ばれるキリストのしもべは皆、主の献身の御業に奉仕する器として召されている（礼拝指針63）。

(2) 乳離れした子は主にゆだねられ、幼児は大祭司に預けられ、少年は主のもとで成長した（サム上1:22, 28, 2:18, 21）。乳飲み子の信徒は、主の祈りを口づてに教えられ、使徒信条を心に刻み口ずさむよう諭され、十戒に照らして歩むよう促される。やがて乳離れした信徒は、母なる教会によって父なる神にゆだねられる。聖霊のとりなしに預けられて、主イエスに献身するための訓練を受ける。教会を維持し、活動に奉仕するよう励まされる（礼拝指針64、116）。

(3) 祭司見習の少年を、主は呼ばれた。祈りを教えられたサムエルは、主の語りかけを聞いた（サム上3:1-14）。信仰の常夜灯をともして、恵みの契約の傍らで寝起きする信徒の名を、主は呼んでくださる。聖霊のとりなしのもとにいる信徒のところへ、主は来てくださる。「主よ、どうぞお話しください、しもべは聴いております」と祈る信徒に、主は御言葉を語られ、御心をお示しになる。御言葉を聴き取る預言者へと、その信徒は召し出される（礼拝指針38、115）。

2. 説教者として献身する友よ。

預言者サムエルに倣って祈り、主の御言葉と御心を聴き取るう。

(1) 事例1として、太田教会牧師（日曜学校校長）の毎日の祈りを紹介する。説教奉仕のあるなしに関係なく、主が私の名を呼んでくださる所に、自分の身を置く。主が語りかけてくださる時を、主のために取り分けてささげる。その時と場において、主は奉仕を備えてくださり、説教者を整えてくださり、聴き取る務めを導いてくださる。

①朝の祈り—罪なき神の子が断罪された朝を覚

えつつ。「主よ、今日もみことばをお語りください。しもべは聴いています。父よ、今日もみことばをお示しください。こどもはそれに従います。神よ、今日なすべきことをお教えてください。わたしはそれを果たします。」

②午前9時の祈り—主イエスが架刑にされた時を覚えつつ。讃美歌21—63番（1～4節）「主の祈り—前半—」を歌い、大会の聖書日課の箇所を朗読して、黙想する。

③午後3時の祈り—キリストが贖罪死をとげた時を覚えつつ。讃美歌21—63番（5～9節）「主の祈り—後半—」を歌い、自作の通読日課の箇所を朗読して、黙想する。

(2) 事例2として、「説教奉仕に向けて主の言葉を聴き取る」プロセスを提示する。

①本文—説教のための聖書本文されている箇所を、五感を働かせて読む。口語訳（新改訳、新共同訳）を用い、前後の文脈を含め、読みながら聴き入る。説教者として、奉仕のために取り上げる聖書本文を、自分で区切って確定する。
*参考（教案誌の聖書箇所、聖書語句辞典、新改訳の梗概、新共同訳の小見出し）

②黙想Ⅰ—耳に残った言葉や、心に響いた言葉を、とにかく書き留め、繰り返し口ずさむ。なぜ耳に残ったのか。なぜ心に響いたのか。その理由を、静まって思い巡らす。主の「語りかけ」と感じたこと、示された「見通し」と思うものを心に留める。

③研究—聖書本文を自分なりに読む中で、疑問に思ったこと・確認したいことを調べる。主の「語りかけ」だと感じたことが、独りよがりになっていないかを確かめる。主の示された「見通し」と思うものを、聖書全体・教理全体に照らして考える。
*参考（教案誌の単元目標と聖書研究・教理研究、聖書辞典、聖書神学辞典）

④黙想Ⅱ—説教のために取り上げた聖書本文を通し、主はどんな御言葉を語り出されたか。主の語りかけ、主の示された見通しにおいて、どんな御心が啓示されているか。御言葉は誰に向

かって語られたのか。御心は何を成し遂げようとしているのか。

II—説教者はまた、

「主が示されたことを取り次ぐ」

そのことに精進する預言者である。

1. サムエルが献身者の訓練を受け入れ、預言者として精進する姿に、自分を重ねよう。

(1) サムエルは主のお告げを大祭司に伝えるのを恐れた。大祭司の家を裁く内容だったから(サム上3:15-16)。御言葉が説教者に向けられているなら、悔い改めと信仰の表明を新たにし、御心に服従しなければならない。御言葉が聴衆の誰かに向けられているなら、それを取り次ぐことを恐れてはならない。御心が成し遂げられることを隠してはならない(礼拝指針39)。

(2) 大祭司は「主の言葉を一つも隠すな」と窘めた。サムエルは隠さずに一部始終を話した(サム上3:17-18a)。一生涯を主に捧げると誓った献身者は、神の言葉を預かったなら、それを取り次がねばならない。説教者に献身した人は、「主が語られた言葉を一つでも隠すなら、神が幾重にも私を罰してくださるように」と表明して遂行しなければならない(礼拝指針36)。

(3) サムエルの取り次ぐ御言葉は地に落ちることなく、預言者として彼は民から信頼された(サム上3:18b-21)。主は御言葉を説教者に預けたからには、それを伝えさせずには置かない。人々がそれぞれ自分の目に正しいことを行っている秩序なき混沌の時代に、主は御目に適う通りに行われる。そのように確信して取り次ぐ御言葉は必ず実現する(礼拝指針37)。

2. 説教者として精進する友よ。

預言者サムエルに倣って御言葉を隠さず、御心をあますところなく取り次ごう。

(1) 事例3として、「聴き取った御言葉を、説教

にして取り次ぐ」プロセスを提示する。

①物語—備えられた聖書本文から、導かれて聴き取った御言葉を、説教者の言葉で物語る。救済史に基づく聖書説話であれば、物語そのものの筋に沿って、語り直してみる。カテキズムに基づく教理講話であれば、聖書全体の広がりの中で、物語ってみる。*参考(教案誌の聖書研究・説教展開例、母と子の聖書、聖書注解)

②黙想III—主の語りかけ、示された見通し、そこに啓示された御心は、何を実現するのか。説教者自身に向けられた御心は、どのような悔い改めと信仰表明を起こしたか。聴衆の誰かに向けられた御心は、どのような悔い改めと信仰表明を起こすのか。

③使信—物語られた御言葉と御心を一つの使信として、説教者を含む聴衆全体に伝える。物語られた救済の歴史を、説教の語り手・聞き手の生きる今の時代へ語り込む。物語られた教理の筋道を、説教の語り手・聞き手が歩んでいる文脈に取り次ぐ。*参考(教案誌の教理研究・暗唱聖句、各種教理問答、キリスト教辞典)

④黙想IV—物語られること(説教本論)、取り次がれること(説教結論)の流れは自然か。その流れに誘い込む導入(説教序論)に相応しい歴史的・文化的文脈は何か。その流れに誘い込むべき人々(聴衆文脈)に相応しい言葉で表現できているか。

(2) 事例4として、「聴き取り、書き留め、取り次ぐ」一週間の流れを紹介する。

①月曜—説教のための聖書本文の音読と確定。主の語りかけと見通しを心に留める黙想。

②火曜—主の語りかけと感じたことに関する調査、主の見通しと思ったことに関する研究。

③水曜—御言葉は誰に向けて語られたか、御心は何を成し遂げるのか、についての黙想。

④木曜—聴き取った御言葉を、自分の言葉で物語って、説教の本論部分として書き留める。

⑤金曜—説教者と聴衆に向けられた御心は、何を実現しようとしているかに関する黙想。

⑥土曜—示された御心を使信とし、結論部分を書き留めて、それに導く序論部分を考える。

⑦日曜—語られた説教に対する、聞き手の応答にふさわしい祈りを、詩編を参考に祈る。

(3) 事例5として、「救済史に基づく聖書説話」の演述を、教会学校教案誌 No. 38 (2010年7～9月号) 収録の説教展開例『笑いを造り出す神さま』をもって提示する。

(4) 事例6として、「カテキズムに基づく教理講話」の演述を、教会学校教案誌 No. 32 (2009年1～3月号) 収録の説教展開例『イエスさまと歩みたい』をもって提示する。

結—説教とは、

**主が語られる御言葉を聴き取り、
そこに示された御心を取り次ぐ、
預言の務めである。**

この説教観の根拠と、それに基づく説教作法と演述の事例を提示してきた。説教を作り語る営みの全般に、聴く営み(黙想)が深くかかわっている。そのための献身と精進が求められるのである。この厳かな営みへと、大人も子供も区別なく召されている。それを可能にするのは、ただ神からの賜物によるのである。(コリント—14:1—5, 22—25) (太田伝道所宣教教師)

参考—説教準備に有用な各種辞典。

○口語訳に依拠するもの：

『旧約新約聖書語句辞典』、教文館、1988

*日本語見出語を原語毎に分類。

○新改訳に依拠するもの：

『新聖書辞典』、いのちのことば社、1985

*聖書の緒論・梗概・用語。

『聖書神学辞典』、いのちのことば社、2010

*聖書の実用・用例・神学。

『実用聖書注解』、いのちのことば社、1995

*保守的聖書観による読解。

『新キリスト辞典』、いのちのことば社、1991

*神学の用語、教会の歴史。

○新共同訳に依拠するもの：

『キリスト教神学用語辞典』、日本キリスト教団出版局、2002

*公同的神学用語。

『リフォームド神学辞典』、いのちのことば社、2009

*改革派神学用語。

※ 2010年11月23日に開催された「中部中教会学校教師研修会」の講演を掲載しました。



教案誌会計報告

中部中会日曜学校委員会発行『教会学校教案誌』は、日本キリスト改革派教会中部中会の事業として、中部中会に会計報告をしています。けれども、収入の多くが教案誌の売り上げと自由募金であることから、2006年度分より、教案誌誌上にも会計報告を掲載しています。

さて、2010年度の教案誌会計は以下の通りです。内容は、中部中会2011年度第一回定期会において報告したものと同一ですが、購読部数などについては付け加えてあります。

中部中会日曜学校委員会
教会学校教案誌編集部

教案誌会計 (2010年3月3日～2011年2月28日)

収 入		支 出	
中会財務より	100,000	出版費	1,397,550
売り上げ(※1)	1,387,860	送料	116,080
自由募金(※2)	430,805	謝礼	92,000
		事務費	7,515
		会議費	53,193
		交通費	38,370
		消耗品費	15,116
		雑費	14,596
小計	1,918,665	小計	1,734,420
繰越金	719,395	繰越金	903,640
合計	2,638,060	合計	2,638,060

※1 教案誌定期購読部数 348部

定期購読教会・伝道所数 69教会・伝道所(改革派64、他派5)

定期購読個人数 6人

(これらは定期購読を申し込んでおられる数です)

※2 教案誌自由募金 41教会・伝道所、5個人

尊い献金をどうもありがとうございました。

教会・伝道所分内訳

那加教会、那加教会教会学校、那加教会婦人会、灘教会日曜学校、関キリスト教会、関キリスト教会教会学校、川越教会、高蔵寺教会、多治見教会、太田伝道所、四日市教会、桑名伝道所、湘南恩寵教会日曜学校、ひたちなか教会、稲毛海岸教会、新所沢教会教会学校、恵那教会、大屋伝道所、上福岡教会教会学校、銚子栄光教会、仙台教会、筑波みことば伝道所日曜学校、滋賀摂理伝道所日曜学校、湖北台教会、青葉台キリスト教会、八戸伝道所、津島教会、吉原富士見伝道所、神港教会、山田教会教会学校、新浦安教会日曜学校、名古屋岩の上传道所、名古屋教会、名古屋教会婦人会、東京恩寵教会日曜学校、南浦和教会教会学校、高松教会、山梨栄光教会教会学校、江古田教会子どもの教会、豊明教会、東広島伝道所

個人分内訳(敬称略)

ジュン・イム・ジャイ、山隅嘉代子、杉山清美、角谷一子、藤間荘吉

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに11年目に入り、第42号まで発行して参りました。中部中会では8割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ70教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額 30万円／年

送金先 郵便振替 伊藤治郎

00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

〈背景と文脈〉

イスラエルの初代の王サウルは主の戒めに背き(13:8-12, 15:17-23)、王位から退けられることになった(15:28)。ダビデはそのようななかで、イスラエルの次の王となるべく主に召された。そのためサウルから追われる身となり、王としての召命が現実となるまでには長く待つことになる。しかしその期間に、彼は成長し、主の器として整えられていった。

今日の箇所は、ダビデの召命とその召命がどのように実現していくかを示す最初の場面である。イエス・キリストは、ダビデの子孫としてお生まれになった。そのように、ダビデは救済史の中で重要な役割を果たした。

〈ダビデ、油を注がれる(16:1-13)〉

紀元前1025年ごろのことと推測される。サウルのことを嘆く預言者サムエルに、主は、ベツレヘムへ行き、エッサイの息子たちのなかで、主が王として選ばれた者に油注ぎをすることを命じられた(1)。エッサイはオベド(ボアズとルツの間に生まれた子)の子であり、ダビデの父親である(ルツ4:21-22)。ベツレヘムはエルサレムの南約8キロのところにある町で、後にダビデの町と呼ばれ(ルカ2:4)、キリスト誕生の地となった(ルカ2:4-7)。

サムエルは「サウルが聞けばわたしを殺すでしょう」と恐れをもち、主を告げた。サムエルがいたラマからベツレヘムへ行くとき、サウルのいたギブアを通らなければならなかったからである。サウルは自分が退けられ、他の者が王になることをすでに知っていた(15:28)。

サムエルはベツレヘムに赴き、いけにえをささげ、エッサイとその息子たちをその会食に招いた。すでに主は、エッサイの息子たちのなかに王となるべき者を見出した、と彼に告げておられた(1)。油注ぎは、王、預言者、祭司に任命されるとき行われる儀式であり、受ける者を特別な職務へと聖

別し、準備させるものである。

サムエルはエッサイの長男エリアブに目を留め、彼こそ油注がれる者だ、と思った。しかし主は「わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る」と仰せられた(7)。主の基準と人間の基準は異なる。同様に次男アヒナダブ、三男シャンマ、と7人が通ったが、彼らのうちに主のお選びになった者はいなかった。最後に、羊の番をしていたエッサイの末の子(八男)ダビデが呼び寄せられた。主はサムエルに「これがその人だ」(12)と言われたので、サムエルはダビデに油を注いだ。その時から主の霊が激しくダビデに降るようになった(13)。

〈ダビデ、サウルに召しかかえられる(16:14-23)〉

ベツレヘムの羊飼いに過ぎないダビデが、どのように王となる道を進んでいったかが、14節以降、多くの章にわたって語られる。

主の霊はサウルを離れた。主の霊がダビデに降った(13)のと対照的である。これ以後、二人は対照的な道を歩むことになる。主から来る悪霊がサウルをさいなむようになった(14)。「主から来る悪霊」という表現は、悪霊をも主が支配しておられることを示す。主の命令に背いた結果である。

悪霊にさいなまれる王を鎮めるために、豎琴を上手に奏でる者を探すことになり、ダビデが選ばれた。ダビデはサウルに大層気に入られ、王の武器を持つ者として取り立てられた。これはダビデがサウルの側近となったことを示している。悪霊がサウルを襲うたびにダビデが豎琴を奏でると、悪霊は離れ去った。王として選ばれたダビデと、退けられたサウルの対照的な姿をここでも見ることができる。主はダビデをご自分の御心を成就する器として選ばれた。後に主は、「無垢な心で正しくわたしの前を歩んだ」(列王上9:4)とダビデについて語っておられる。(後藤公子)

テキスト サムエル記上 16章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問67, 68

〔単元のねらい〕

子どもたちは、今回の聖書テキストを通して、目に映る姿でなく、目には映らない心をご覧になる神さまと出会う。神さまへの信頼心が目の美しさとなって表れていたダビデのように、御言葉と祈りによって、子どもたちの心に神さまへの信頼が増し加わることを願う。

「神さまに選ばれたダビデ」

愛するお友だち、おはようございます。

この間、先生は、「きみはきみらしく」という映画を見ました。エリというおじさんが作った人形たちの世界のお話なんだけれども、パンチネロという男の子が主人公。彼が住んでいるウィミック村では、変なことがはあったの。それは、まず、鼻を緑色に塗ること。最初、パンチネロは、鼻を緑色に塗ることはしませんでした。「わざわざ違う姿に造った」というエリの言葉を守ってね。だけれど、かわいい女の子に誘惑されたり、町の人たちに責められて、とうとう、鼻を緑色に塗っちゃいました。自分は、流行に乗れたって、得意だったけれど、次から次へと、鼻の色の流行が変わって、とうとう、パンチネロは、目が回っちゃって、ばからしくなって来ました。そして、とうとう、エリのところに行って、助けを求めて、元の鼻の色に戻してもらったの。これは、人形の世界のお話だけれど、私たち、ぼくたち人間も一緒だよ。神さまは、私たち、ぼくたちをみんな、違う姿に造ってくださいました。鼻が低い人がいるかと思ったら、高い人がいる。色が白い人がいるかと思ったら、黒い人がいる。私たち、ぼくたちを、みんな一人ひとり、違う姿に造ってくださいました。けれど、私たち、ぼくたちは、「あの子、鼻が高いから格好良いな、あの子みたいに鼻が高かったからいいな」とか、「あの子、色が白からうらやましいな、あの子みたいに色がもっと白かったらいいな」とか、どうしても、自分の目に映ることに心が奪われてしまって、なかなか、自

分の今の状態に満足できません。でも、神さまは、そんな私たち、ぼくたちとは違ったふうに人をご覧になります。

今日から、ダビデさんのお話に入りますが、ダビデさんのお話の最初は、ダビデさんが、神さまによってイスラエルの新しい王さまに選ばれた時のお話です。

イスラエルの人たちが、カナンというすばらしい所に住むようになってから、ずっと後になると、一人の王さまがイスラエルの人たちを治めるようになりました。それが先週のお話のサウルさんでした。

さて、このサウルさんがまだ王さまの頃、サムエルさんという、神さまのことをイスラエルの人たちに教えるお仕事をする人がいました。神さまは、神さまの御心に背いたサウルさんを王さまの位から退けることになりました。そして、神さまは、サムエルさんをベツレヘムの町のエッサイさんという人の家に行かせたのです。このエッサイさんには、8人の子どもがいました。神さまは、その中の一人を、イスラエルの新しい王さまにすることになったのです。サムエルさんは、その新しい王さまを捜しに、エッサイさんの家に来て来たのです。偉いサムエルさんがやって来たというので、お父さんのエッサイさんは、すぐに子どもたちを末っ子を除いて集めました。

サムエルさんは、当然、エッサイさんの一番上のお兄さん、エリアブさんが、新しい王さまになる人だと思いました。しかし、神さまは、そうで

はないとおっしゃいました。それで、サムエルさんは、子どもたちを一人ひとり、順番に、この人が新しい王さまになる人ですかと、神さまにお聞きしたのです。しかし、みんなそうではありませんでした。それで、サムエルさんは、お父さんのエッサイさんに、「他に息子さんはいませんか」とたずねました。すると、「一番下の子どもがいます。その子は、羊飼いで、今、羊の番をしています」と言いました。「その人を連れて来てください」とサムエルさんは、エッサイさんに頼みました。その一番下の子どもがやって来ると、サムエルさんは、「この子が新しい王さまでしょうか」と神さまにお聞きしました。そうしたら、神さまは、「その子です」とおっしゃいました。そう、この子どもこそ、ダビデさんで、イスラエルの新しい王さまになる人なんです。それで、サムエルさんは、持って来た角の中の油をダビデさんに注ぎました。そうしたら、聖霊なる神さまが、ダビデさんに激しく降るようになったのです。こうして、ダビデさんが、サウルさんに代わって、イスラエルの新しい王さまになる道が始まったのです。

もう一度、神さまがサムエルさんにおっしゃったお言葉をお読みしましょう。

「しかし、主はサムエルに言われた。『容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る』」(16:7)。

もし、人間が、イスラエルの新しい王さまを選ぶとするならば、エッサイさんの長男のエリアブさんだったことでしょう。ところが、神さまは、エッサイさんの末っ子、ダビデさんを選ばれたのです。恐らく、お父さんのエッサイさんもまさ

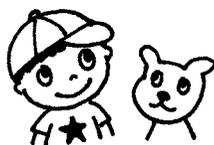
か末っ子のダビデが選ばれるわけがないと思っていたことでしょう。だって、偉いサムエルさんがやって来たというのに、ダビデさんは羊の群れの番をさせられて、呼ばれなかったからです。そのようにエッサイさんの家では末っ子、そして、まだ子どもだからと、お父さんのエッサイさんにも王さまに選ばれるはずがないと決めつけられていたダビデさんを神さまは、新しい王さまに選んでくださったのです。

ところで、ダビデさんは、まだ子どもだったけれども、格好良かったのではないかと思います。でも、そればかりでなしに、目が美しかったと書いてあります(12)。目は心を表します。ダビデさんは、まだ子どもでしたが、神さまに信頼するまっすぐな心が与えられていたのです。そういう神さまに信頼する心が、ダビデさんの目に表れていたのでしょう。神さまは、目に見える資格好でなく、何よりも心をご覧になって、ダビデさんをイスラエルの新しい王さまに選ばれたのです。

私たち、ぼくたちは、つい、格好良さとか、目に見えるものに心が奪われがちですが、まず何よりも、目には見えない心を大事にしましょう。そして、ダビデさんのように、神さまに信頼するまっすぐな心が与えられるように、神さまにお願いしましょう。私たち、ぼくたちの心が神さまへと向くならば、私たち、ぼくたちの目も必ず美しくなります。最後に、目がとても美しかったイエスさまのお言葉をお読みしましょう。「体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい、濁っていれば、全身が暗い。だから、あなたの中にある光が消えれば、その暗さはどれほどであろう」(マタイ6:22,23)。(長谷川潤)

[今週の暗唱聖句] サムエル記上 16章7節

人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。



〈ねらい〉

今日は、ダビデの召命の御言葉から、私たちの外見ではなくて、いつも私たちの心の中を見てくださる神様について学びたいと思います。

〈展開例〉

皆さんのお友だちにはどんな人がいますか？（少し考えてもらう……）きっと、カッコいいお友だちもいると思います。きっと可愛いお友だちもいると思います。いろんなお友だちがいます。ぼくたち私たちは、どうしても外見を見てしまいます。そして、どうして、ぼくはあの人みたいではないのだろうとってしまいます。

さて、サムエルが王様を選ぶことになり、エッサイさんのところに行きました。「彼らがやって来ると、サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油を注がれる者だ、と思った」（サムエル上16:6）。

エリアブは長男です。「彼こそ主の前に油を注がれる者だ、と思った」（サムエル上16:6）と、聖書は言っていますから、外見もとてもいい人でした。サムエルは当然、サウルの次にイスラエルの王になるのは彼だと思いました。しかし、神様の御心は違いました。そこで、次から次へと、兄弟が呼び出されます。

「エッサイはアビナダブを呼び、サムエルの前を通らせた。サムエルは言った。『この者をも主はお選びにならない。』エッサイは次に、シャンマを通らせた。サムエルは言った。『この者をも

主はお選びにならない。』エッサイは七人の息子にサムエルの前を通らせたが、サムエルは彼に言った。「主はこれらの者をお選びにならない。」（16:8-10）。

こうして、神様に選ばれたのは、このとき、野原で、羊を追っていた、末の子ダビデでした。

「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る」（16:7）と、聖書は言っています。

神様は素晴らしいお方です。みんな一人ひとりを本当に素晴らしい、本当に大切な存在として、創って下さいました。いろいろな背の高さのお友だちがいます。いろいろな顔のお友だちがいます。ぼくたち私たちより、背の高い人もいれば、やせている人もいる、もしかすると太っている人もいます。神様は、ぼくたち私たちを、それぞれに素晴らしい存在として創造して下さったのです。

そして神様は、ぼくたち私たちの外見ではなくて、いつも神様は、心を見ていてくださるのです。ぼくたち私たちの心を見ていてくださる神様と一緒に歩んで参りましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神様。ぼくたち私たちの心の中を見ていてくださる神様と一緒に歩めるようにして下さい。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

主は目に映ることをご覧になるのではない、見えないものに目を注ごう。

〈展開例〉

イスラエルでは敵に負けないように王様を立てることになりました。王様を決める人は預言者です。最初の王様はサウルでしたが、サウル王は神様に従わなくなったので、次の王様が選ばれることになりました。預言者サムエルは、ベツレヘムに住むエッセイの子供の中から次の王様を選ぶように神様の言葉を受けて、エッセイの家に行きました。お父さんのエッセイも預言者のサムエルも、長男のエリアブが次の王様になると思いましたが、神様が選ばれたのは一番年下のダビデでした。

ダビデは羊飼いで、人の目から見ればとてもイスラエルの王様になるようには思えません。けれども、神様は目に映ることをご覧になるではありませんでした。

みなさんの兄弟の中で一番年下の弟が王様になるとしたらどうでしょう？ ねたみや争いがあるかもしれません。しかし、神様は目に見える姿や形、年齢や性別でご自分の決定を下されるお方ではありません。神様が大切になさるのは、神様に信頼し、神様に従うことです。そのもっとも良いしるしが、クリスマスに飼い葉桶でお生まれになったイエス様です。イエス様は貧しいお姿で生まれ、人から辱めを受けて、十字架の刑罰によって死なれました。しかし、神様はこの方をすべての人類の王様となさったのです。わたしたちも死にいたるまで神様に従ったイエス様を信頼し、イエス様に従いましょう。

〈お祈り〉

神様。神様は目に映る姿でなく、目に映らないわたしたちの心をご覧になられることを学びました。わたしたちも目に見えることに捕らわれることなく、イエス様を信頼することができますように。アーメン。

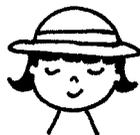
〈ワーク〉

○聖書を開きましょう

- ①サムエルは、最初、エッセイの息子の中から、誰を王になる者だと目に留めましたか？
- ②エッセイは、最初に誰を呼び、サムエルの前を通らせましたか？
- ③エッセイは、次に誰を通らせましたか？
- ④サムエルが最後に見て油を注いだエッセイの息子は誰ですか？
- ⑤（ ）をうめましょう。
 (ア) や (イ) に目を向けるな。
 わたしは、彼を退ける。
 (ウ) が見るように見ない。
 (エ) は (オ) に映ることを見るが、(カ) は (キ) によって見る。

【答え】①エリアブ ②アヒナダブ ③シャンマ ④ダビデ

⑤ア：容姿、イ：背の高さ、ウ：人間、エ：人、オ：目、カ：主、キ：心



〈ねらい〉

私たち人間は目に映る外見でその人の価値を判断してしまうが、神様は目に映らないその人の心を見てくださるということを学ぶ。神様は外見や能力ではなく、私たち一人ひとりの「こころ」をご覧になり、大切にしてくれていることを実感したい。

〈展開例〉

今日の聖書箇所を共に読み、ダビデがイスラエルの新しい王様に選ばれていく過程をたどり、神様の御心を理解する。

○なぜ新しいイスラエル王を選ぶ必要性が生じたのか？

→イスラエルの初代の王サウルが神様の御心に背いてしまったため、神様はサウルを王から退けられた。そのため、空位となったイスラエルの王を選ぶ必要性が生じた。

○新しい王選びのため、サムエルはどのような行動をとったか？

→神様はベツレヘムのエッサイの息子たちの中に、新しい王となるべき者を見つけ出したということをサムエルに告げ、サムエルは油注ぎの準備をしてベツレヘムへ出発した。そこで、エッサイとその息子を「主のいけにえの食事会」に招待した。「なすべきことは、そのときわたしが告げるといふ神様の御言葉に従い神様の言葉をサムエルは待った。

○新王選び、油注ぎはどのように進んでいったか？

→エッサイは8人の息子のうち末息子を除いた7人を食事会に連れてきた。神様は、サムエルが王としてふさわしいと思った長男のエリヤブを王として認めなかった。そしてその場

にいた他の6人の息子もお選びにならなかった。そこでサムエルは、その場におらず、羊の番をしていた目の美しい少年ダビデを呼び寄せた。主は少年ダビデに油を注ぐようにサムエルに命じた。主の命令により、サムエルは彼に油を注いだ。

○神様はエッサイの息子のどこを見て王選びをしたか？

→「容姿や背の高さに目をむけるな。私は彼を退ける。人間がみるようには見ない。人を目に映ることを見るが、主は心によって見る。」(16-7) この御言葉の通り、神様は目に見える人間の外見ではなく、目に見えない人間のこころを見ることによって、人間の選択基準では選ばれるはずのない「少年ダビデ」をイスラエルの新しい王をとしてお選びになった。

○油を注がれたダビデに起こったことは何ですか？

→主の霊が激しくダビデに降るようになり、主がいつもダビデと共におられるようになり、サウル王に仕えるようになった。ダビデは美しい豎琴を奏でることによって、悪霊に悩まされていたサウルの気分を癒した。

〈祈り〉

父なる神様、御名を讃美します。

私たち一人ひとりをお愛してくださってありがとうございます。私たちは人を外見、見た目で判断してしまいます。お友達やまわりの人たちのちょっとした言葉や、態度で怒ったり、傷ついたりする弱いぼくたち私たちです。しかし、神様は私たちのこころを大切に思い励ましてくれて感謝します。私たちをあなたの御言葉と聖霊で満たしてください。

対話の手掛かりとして……。

- ① 今回の中心となる聖句は、「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」(7節)です。そして、よくこのテキストから「人は見た目ではなく、心が大事です」というメッセージが語られることがあります。確かに、人間の価値というのは見た目で判断できるものではありません。そうではなく、どういう心を持って生きるかが大事です。でも、私はふと思うことがあります。「見た目ではなく、心が大事」という言葉を聞いて、本当の意味で慰められるのだろうか……。
- ② むしろ、私たちの深い悩みであり、問題なのは、「心が大事」と分かりながらも、なお見た目や容姿に捕らわれてしまうことです。それに、見た目を綺麗にすることは、そんなにいけないことなのでしょうか。もちろん、偽りの飾りはいけません……。「心が大事」ということの中に生きながら、自分が持っていない知恵や能力をもっている他者を、嫉妬の眼差しの中でしか見ることができない人間の醜さ、また罪というものがあるのではないのでしょうか。
- ③ 神さまの福音というのは、見た目の華やかさをもって自分の心の醜さを覆ったり、隣人を真実に愛することのできない私たちを救い出すことができるものです。私たちが本当に見なければいけないのは、神さまの眼差しです。自分や他人を見ているだけでは、喜びは生まれません。神さまはあなたをどのように見ておられるのでしょうか (イザヤ43:4)。
- ④ 御言葉の中に、「主は心によって見る」とありました。主は、その心でじっと見ておられることがあります。テキストの文脈に沿って考え

るならば、サウルの次の王、つまりダビデのことです。でもそれだけではないでしょう。ダビデの子孫としてお生まれになるイエス・キリスト。そしてキリストにある憐れみをもってあなたを見ておられるのです。この神の眼差しを、神の選びと言い換えることができます。神さまは、ダビデをイスラエルの王として選ばれました。私たちもダビデと同じ意味ではありませんが、神さまによって選ばれた者たちです。そして、神さまに選ばれ、救われるためには、何の条件も能力もいりません。12節にはダビデの容姿も立派だったことが語られていますが、そのことが神さまに選ばれた本当の理由ではありません。ダビデはまったく罪のない人間ではありませんでした。後に起こすバト・シェバの事件に代表されるように、彼もまた罪深い人間であり、救われなければいけない人間だったのです (サムエル記下11)。だからこそダビデを、そして私たちを選んでくださったのです。

- ⑤ ダビデの子孫としてお生まれになった、まことの救い主イエス・キリストは、公に活動を始める前に、ヨハネから洗礼を受けました。その時、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」(マタイ3:17)という天からの声が響きます。神に選ばれているということは、御子イエスが聞いたように、神の子である私たちも、この天の御声を聞いて歩むことができるのです。私たちもダビデのように、神さまの御心を成就するために選ばれた器です。その時、私たちは人間の見た目を気にして、一喜一憂する生き方から解き放たれます。神の御声に聞き従い、神の御心を私の心として生きる者へと変えられていきます。神が見ておられるように、自分や他者を見ることができるようされていきます。そのような新しい自分に造り変えてくださる神さまに期待をして歩いていきましょう。

17章が描くダビデ像は、王となるべき者の求められる信仰です。

ほぼ同じ時代にカナンに定着するようになったペリシテとイスラエルは土地をめぐり争っていました。ペリシテには、イスラエルにない強大な軍事力があり、巨人ゴリアトはその象徴的存在でありました。身長280センチを超え、57キロもある青銅製の鎧を身につけ、どのような攻め手もつけこむすきもない完全な防備を固め、しかも重い武器を自由に操れる強靱な体を持つゴリアトの存在自体がイスラエル人にとって脅威でした。ゴリアトはその恐るべきいでたちで毎日現れ、一騎討ちを呼びかけました。イスラエルを愚弄し続けるゴリアトの行為は、神をも愚弄するものであり、主への挑戦でありました。イスラエルは主のために立ち上がることが求められていました。しかし、イスラエルにはそのことのために立ち上がる信仰が見られませんでした。

ダビデは、ゴリアトの言葉を「生ける神の戦列に挑戦する」ものとして受けとめました。羊飼いと「獅子も熊も倒してきた」ダビデは、「獅子や熊の手から守った主」が共にいて、「あのペリシテ人の手からも、わたしを守ってくださる」ので、「それらの獣の一匹のように」倒すことができる、とサウル王に語りました。それは、王やイスラエルが失っていた信仰です。サムエル記は、いかなる事態でも主への信頼を失わないダビデの姿を伝えています。神はこの純朴な信仰者を通し、イスラエルの王に必要なのは強大な軍事力や行政手腕ではなく、信仰を持って事態に臨み、民を導くものであることを明らかにしています。

ダビデは、サウル王から青銅の兜や鎧や剣などの武器を譲り受けますが、重すぎて身動きがとれないので、武器を脱ぎ捨て、杖と石投げだけで、ゴリアトとの戦いに挑みます。ダビデはゴリアトに向かって、「お前は剣や槍や投げ槍でわたしに向かって来るが、わたしはお前が挑戦したイスラ

エルの戦列の神、万軍の主の名によってお前に立ち向かう」、「主は救いを賜るのに剣や槍を必要とはされない」、「この戦いは主のものだ。主はお前たちを我々の手に渡される」と告げます。

それは、主がイスラエルに求めた信仰です。2章には、不妊の女といわれていたハンナがサムエルを与えられた時に、「勇士の弓は折られるが、よろめく者は力を帯びる。……弱い者を塵の中から立ち上がらせ、貧しい者を芥の中から高く上げる」と神を称えた祈りが記されています。イスラエルには、その名前だけで最強の戦士をも屈服させる神がいます。ダビデは、この神が助けるのに、剣も槍も必要とせず、弱き者を通じて強き者を減らすことができると信じます。「ここに集まったすべての者は知るだろう。この戦いは主のものだ。主はお前たちを我々の手に渡される」(47節)。この言葉は、今を生きるわたしたちに語られています。

ダビデは自分の仕事に使う石投げ一振り、巨人ゴリアトを倒しました。神は与えられた持ち場で忠実に生きる少年の業を用いられます。もちろん、この業は、神の恵みです。神の導きを信じ、自分の仕事に忠実な者の業を神は省みられます。こうして巨人ゴリアトを倒したダビデは、無名の少年からサウル王に召抱えられるものとなり、王への道を歩むことになります。

30代のテモテに、「あなたは、年が若いということで、だれからも軽んじられてはなりません。むしろ、言葉、行動、愛、信仰、純潔の点で、信じる人々の模範となりなさい」(テモテ4:12)とパウロは語りました。若くて弱い存在は、ダビデのような少年だけではありません。テモテのような立派に成人している大人も、まだまだ若いのです。ましてやわたしたちの信仰は若くて未熟です。しかし、そのような者を、主は用いられるのです。

(鳥井一夫)

※第25号(6月3日聖書研究)からの再掲載です。

テキスト サムエル記上 17章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問13

〔単元のねらい〕

ダビデとゴリアトの一騎打ち。子どもたちは、恐らく、お話に聞き耳を立てることだろう。説教者にとっても、子どもに語りやすいテキストであるに違いない。しかし、ダビデの勝因がどこにあったのか。ダビデが子どもたちに英雄視されるのでなく、ダビデと共におられた神さまこそが、子どもたちにほめたたえられればと願う。

「神さまに信頼してゴリアトと戦ったダビデ」

愛する子どもたち、おはようございます。

先週から、ダビデさんのお話をしています。

ある時、ペリシテ人たちが、サウル王さまとイスラエルの人たちをやっつけに来ました。イスラエルの兵隊さんたちは、谷を挟んで、ペリシテの兵隊さんたちの陣地の反対側に、陣を張って、戦いの準備をしました。すると、ペリシテの兵隊さんの陣地から、大男が出て来ました。身長は六アンマ半。ちなみに、一アンマは四十五センチメートルだから、身長が何と三メートル近くの大男です。あのチェ・ホンマンも真っ青です！「やあやあ、俺さまの名はゴリアト。一騎打ちで俺さまに勝ったら、俺たちペリシテは、みんな、お前たちの奴隷になってやる。誰か、俺さまにかかって来る奴はいないか！」。しかし、イスラエルの兵隊さんたちは、みんなこわがって、誰も、ゴリアトに立ち向かおうとはしません。

しばらくすると、ゴリアトは、イスラエルの陣地から、誰かがやって来るのが見えました。それは、豆粒のように小さい。そして、やって来たのは、何とまだ子どものダビデさんでした。しかも、ダビデさんは、剣や槍を持っていません。持っているものと言えば、羊飼いが持っている杖、そして、石投げひもです。ゴリアトは、その様子を見て、ダビデをからかいます。「おい、小僧！杖など持って、俺さまを犬とでも思っているのか」。すると、ダビデさん、「ぼくには、生ける全能の神さまがついている。お前に勝つのに、剣や槍は

いらないのさ」。ダビデさんも、負けじと、ゴリアトに言い返しました。

それを聞いて、ゴリアト、怒って当然です。ゴリアトは、ダビデさんに立ち向かって行きました。すると、ダビデさんは、すばやく、袋から小石を取り出して、石投げひもをビュンビュン、ビュンビュン回して、ゴリアトめがけて飛ばしました。ビューン。小石はものすごい勢いで、ゴリアトめがけて飛んでいきます。

何と、小石は、ゴリアトの額に、見事、命中！ゴリアトは、うつぶせに倒れてしまいました。ダビデさんは、たった一つの小石で、大男ゴリアトを倒したのです。ペリシテの兵隊さんたちは、ゴリアトが倒されてしまったので、逃げ出してしまいました。こうして、戦いは、サウル王さまとイスラエルの人たちの大勝利です。

ところが、ダビデさんは、ゴリアトを倒したからと言って、決して、自慢しませんでした。ダビデさんが、ゴリアトを倒すことができたのは、誰のおかげでしょうか？ そうです。神さまです。神さまと一緒に戦ってくださったから、ゴリアトを倒すことができたのです。そうなんです。ダビデさんは、神さまを心から信頼していたのです。神さまが羊飼いや、そして、自分は羊と違って、羊飼いや羊を守ってくれるように、神さまが自分のことを守って、力をお与えくださると信じていたのです。最後にダビデさんが歌った詩編第23編をお読みしましょう。

主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。
主はわたしを青草の原に休ませ
憩いの水のほとりに伴い
魂を生き返らせてくださる。
主は御名にふさわしく
わたしを正しい道に導かれる。
死の陰の谷を行くときも
わたしは災いを恐れない。
あなたがわたしと共にいてくださる。
あなたの鞭、あなたの杖

それがわたしを力づける。
わたしを苦しめる者を前にしても
あなたはわたしに食卓を整えてくださる。
わたしの頭に香油を注ぎ
わたしの杯を溢れさせてくださる。
命のある限り
恵みと慈しみはいつもわたしを追う。
主の家にわたしは帰り
生涯、そこにとどまるであろう。

(長谷川潤)

[今週の暗唱聖句] サムエル記上 17章47節

主は救いを賜るのに剣や槍を必要とはされない。



〈ねらい〉

今日は、神様に信頼して、ゴリアトと戦ったダビデの姿から、ぼくたち私たちのような小さな者でも用いてくださる神様の御恵みについて、御一緒に考えたいと思います。

〈展開例〉

みんな、どうだろうか。ぼくたち私たちなんてだめだ。ぼくたち私たちが、神様のために働くなんてできるはずがないと、思うてしまうことはないだろうか。

けれども、神様は違います。神様は、ぼくたち私たちのような者でも豊かに用いてくださる、そういうお方なのです。

イスラエルの人々の前に、ペリシテ軍のゴリアトという大巨人が立ちはだかりました。身長は、280cm以上です。50kg以上の鎧を身につけています。「サウルとイスラエルの全軍は、このペリシテ人の言葉を聞いて恐れおののいた」(11,24)と聖書は言っていますから、みんな怖がっていたのです。でもダビデは違いました。「ダビデは周りに立っている兵に言った。『あのペリシテ人を打ち倒し、イスラエルからこの屈辱を取り除く者は、何をしてもらえるのですか。生ける神の戦列に挑戦するとは、あの無割礼のペリシテ人は、一体何者ですか。』」(26)。ダビデにとって、イスラエル軍に対する挑戦、それは、聖書の神様への挑戦にほかならなかったのです。そして、ダビデは、ゴリアトに戦いを挑みます。ダビデには、自分は獣

から羊たちを守ってきたという自信がありました(35-36)。

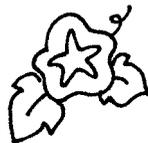
そして、ダビデが手にしたのは、鎧や剣ではありません(39)。何と彼が手にしたのは、滑らかな小さな石五つと投石袋だけでした。「自分の杖を手に取ると、川岸から滑らかな石を五つ選び、身に着けていた羊飼いの投石袋に入れ、石投げ紐を手にして、あのペリシテ人に向かって行った。」(40)しかし、何とそれが、主なる神様によって用いられたのです。

「ダビデは袋に手を入れて小石を取り出すと、石投げ紐を使って飛ばし、ペリシテ人の額を撃った。石はペリシテ人の額に食い込み、彼はうつ伏せに倒れた」(49)と、聖書は言っています。

ぼくたち私たちの手の中にあるもので良いのです。ぼくたち、私たちでいいのです。ぼくたち私たちのような小さな者を、神様は、ご自分のお働きのために、豊かに用いてくださるのです。大切なことは、何か特別なことをするのではなくて、日頃から使い慣れているもので、神様のために、働くことなのです。そんな、ぼくたち私たちを神様は、豊かに用いてくださるのです。

〈お祈り〉

天の父なる神様。ぼくたち私たちのような、小さな者を用いてくださることを感謝します。いま持っているものを、あなたに献げます。お用いください。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

ダビデはただ主なる神に依り頼んで勝利した。主に依り頼む心をはぐくもう。

〈展開例〉

イスラエルの敵であるペリシテ軍にゴリアトという身長が3メートルもある物凄い兵士が現れ、イスラエル軍に一騎打ちをいどみました。けれども、誰もがこわがって、とても戦おうとしません。

このままではイスラエル軍は負けてしまいます。この時、ダビデは戦いに出ていたお兄さんたちのために食事を届けにきました。ダビデは、イスラエル軍の人たちが、あのゴリアトによって恐れを抱いていることに気づきました。このままではイスラエル軍が負けてしまうのではないかと思います。ダビデはサウル王に「わたしが戦いましょう」と申し出ます。王から借りたよろいとかぶとは重すぎるので、ふだん着のまま、石投げと5個の石を持って立ち向かいました。

ゴリアトは、相手が少年なので、ひどく馬鹿にしました。しかし、ダビデは主の守りを信じて少

しも恐れず、石投げ器で1個の石をゴリアトの額に命中させて倒してしまいました。こうして、サウル王とイスラエル軍は戦いに勝利することができました。

どうしてダビデは巨人ゴリアトを倒すことができたのでしょうか？ それは、ダビデがこの戦いを神様の戦いと信じ、神様が共にいて戦ってくださるのであれば必ず勝つことができると疑いませんでした。わたしたちも毎日の生活で本当に困ってしまうことや、寂しいときがあります。けれども、神様が共にいてくだされば、困難をのりきる勇気と力が与えられます。

そのために、まことの勝利者である神様に祈りましょう。

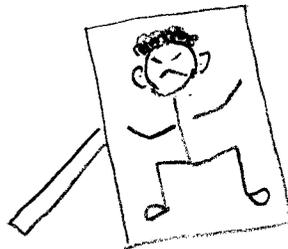
〈お祈り〉

神様。小さなダビデが、神様の力でゴリアトに勝ちました。わたしたちも小さく弱い者ですが神様が共にいてくださり、おそれや困難に勝てるよう祈ります。アーメン。

〈やってみよう〉**○作ってあそぼう**

用意するもの……厚紙、色マジックか色鉛筆、いらぬ紙
作り方

- ①厚紙にいかにも強そうなゴリアトの絵を描く。
- ②厚紙が立つように後ろに厚紙でつい立てを作り貼る。
- ③一発でゴリアトを倒せるようにいらぬ紙を丸める。大きさや固さを工夫しよう！



〈ねらい〉

私たちがまことの敵と戦い勝利するには神様が共にいて戦い、守ってくださいという神様への純粹なる信頼が求められることを学ぶ。少年ダビデのような子供でも神様を信じて祈る時、神様の御用のために働くことができるということを伝えたい。

〈展開例〉

1. 今日の聖書箇所を共に読み、少年ダビデが強靱な敵ゴリアトに勝利した勝因を振り返り、信仰を深める機会とする。

○巨人ゴリアトはどんな戦い方をイスラエルに求めたか？

→ペリシテとイスラエル代表兵士の一騎打ちを求めた。ゴリアトは自分の強さを誇示し、イスラエルをからかい、ばかにし挑発し続けた。

○サウル王やイスラエル兵はゴリアトの挑戦をうけたか？

→ゴリアトは3メートル近い体で力も強く、鎧や兜も頑丈、鉄のやりの破壊力は高い。その巨人ゴリアトの姿は恐ろしく強そうで、ゴリアトには勝ち目はないとおじけづいてしまった。

○なぜダビデ少年は強靱なゴリアトと戦おうと思ったのか？

→少年ダビデは巨人ゴリアトのイスラエルへの挑戦は神への挑戦、イスラエルをばかにすることは、神様をばかにすることだと思い、ゴリアトを許すことができなかつた。「生ける神の戦列に挑戦するとは、あの無割礼のペリ

シテ人は、一体何者ですか。」(16-26)

○なぜダビデ少年はゴリアトを恐れず戦うことができたのか？

→ダビデはイスラエルの戦列の神、万軍の主が共におられ戦ってくれることを信じ、勝利を確信していたので、巨人ゴリアトをも恐れることはなかつた。

○ダビデ少年の戦い方は？

→サウル王からもらった鎧と兜を脱ぎ捨て、丸腰の姿だった。武器は普段羊飼いの番で使う石投げの紐と石ころ、杖だけ。

「わたしはお前が挑戦した、イスラエルの戦列の神、万軍の主の名によってお前に立ち向かう。」(17-45)

神の力を得たダビデは石投げ紐で石を飛ばし、ゴリアトの額を打ち、ゴリアト撃ち殺した。

2. 子供たちにとってゴリアトに代表されるような恐れ存在や、自分たちの敵と感じているものがあれば話しあってみましょう。

そしてそんな時、祈ることによって神様が共にいて私たち守ってくださいという信仰が深まることを教えたい。

〈祈り〉

神様、あなたのみ名があがめられますように。私たちは、自分ひとりでは戦うことができません。神様の力が必要です。どんな困難なときでも祈り、あなたを信頼していくことができる信仰を与えてください。



対話の手掛かりとして……。

- ①ダビデとゴリアトの物語は、幼い頃から何度も聞いてきたという子どもたちも多いことでしょう。物語自体も一度聞いたら忘れることのできない強い印象を与えます。少年ダビデが大男ゴリアテを石ころひとつでやっつけるというストーリーは痛快そのものです。しかし、私たちは英雄としてのダビデの姿を越えた、神さまの真実を見出す必要があるのだと思います。
- ②このことはキリストの十字架と復活にも見られることです。数年前の中高生会で、講師の先生が、「私は『十字架の死が神からの呪いであった』（ガラテヤ3:13）ということを知った時、大きな衝撃を受けた」とおっしゃっていました。学生たちもその後の語り合いの中で、イエスさまの十字架が神さまから呪われた死であったということを知ったという人も多かったのです。十字架で死んで復活なさるイエスさまは素晴らしい英雄です。とてもカッコイイのです。特に小さな頃から教会で育った子どもたちは、イエスさまが大好きですから、イエスさまを英雄視したくなる思いも分からないではありません。しかし、そこに留まってしまうならば、キリストの十字架の本当の意味、つまり十字架の死がこの私のためだということが分からなくなるのではないのでしょうか。十字架の弱さや愚かさに躓かなくても（コリント一1:18）、十字架を英雄視するところで、気付かないうちに躓いてしまっていることがあるのです。
- ③さて、今回の物語は、ダビデとゴリアトとの戦いと思われがちですが、聖書を丁寧に読んでみると、「この戦いは主のもの」（47節）とあります。ゴリアトと戦ってくださるのは、主御自身です。そして私たちも主の戦いに参与するのです。ですから信仰的な様々な戦いは、自分の

ためであると共に、主のために戦っているということでもあります。

- ④ところで、なぜイスラエルの人々はペリシテ人を恐れたのでしょうか。（11節）ゴリアトの体の大きさということもあるかもしれませんが、根本的な恐れはもっと他のところにあります。それは自分たちがイスラエルの民、つまり、神の民であるということを知っていたからです。この時イスラエル全体が、私たちは誰であるのかが分からなくなっていました。自分が誰であるのか、誰のものとしてされているのかが分からなくなると、不安になります。一方ダビデは、ゴリアトを恐れることなく「無割礼のペリシテ人は何者か」と言うのです。（26節）無割礼の者、つまり神のものとしていない者を恐れる必要はないのだということです。ダビデとゴリアトの戦いは、イスラエルが忘れていた「私たちは神の民」であるというアイデンティティーを取り戻す戦いでした。主がダビデをとおしてゴリアトと戦われ、勝利されたことによって、イスラエルの民のアイデンティティーの回復されたのです。「全地はイスラエルに神がいますことを認めるだろう。……ここに集まったすべての者は知るだろう。この戦いは主のものだ。」（46、47節）
- ⑤私たちの歩みの中にも様々な信仰的戦いがあります。敵を前にして、恐れおののくことも少なくありません。でも、その時に思い起こしていただきたいのです。私たちが、神さまのものとされていることを。また、主イエスにつながっていることを一番実感できるのは教会ですから、教会生活、礼拝生活を抜きには戦う力は与えられません。主イエスは「わたしから離れては何もできない」（ヨハネ15:5）とおっしゃいました。イエスさまにつながっているがゆえに、大丈夫という信仰をもって歩みましょう！

テキスト サムエル記上 20章

聖書には友情を表す言葉がありません。ヘブライ人は、それを「契約を結ぶ」という言葉で表現しました。「ヨナタンはダビデを自分自身のように愛し、彼と契約を結び、着ていた上着を脱いで与え、また自分の装束を剣、弓、帯に至るまで与えた」(サムエル上18:3-4)。こうして、ダビデとヨナタンの友情は結ばれました。

このダビデとヨナタンの友情を記す美しい物語は、サムエル記全体の流れからいえば、王位に関わる問題として取り扱われています。ペリシテ人との戦いに勝利して宮廷に召し抱えられることになったダビデは、民衆の間でも、王の宮廷においても、誰にも愛され、尊敬を集めました。そのゆえに、サウル王はダビデに嫉妬し、殺意をいだくようになりました。その結果、ダビデはサウルの迫害から逃れるため、宮廷を去り、難民として荒野を逃げまわらなければなりません。

そのようなダビデに、ヨナタンが命を救うために彼の逃亡に援助の手を差し伸べ、変わらない友情を表したことを、この物語は伝えています。

20章13~15節のヨナタンの言葉は、彼が次の王位につくのが自然なのに、ダビデのためにそれを放棄し、彼を助け、ダビデにより、自分とその家の将来を託そうとするものです。ヨナタンの名には「主は与えた」という意味があります。ダビデに対する主の愛顧がヨナタンの友情を通して表されます。

新月祭の時に示す態度で、サウルが本当にダビデの命を狙っているか確かめるべく二人は行動しますが、ヨナタンはダビデに一つのことを要望しました。それは、ダビデが王位についた時、自分と自分の子孫に対して、慈しみの態度を示して欲しいという要望です。それは、新しい王は古い王家一族の反逆の芽を根絶やしにするため、残虐な仕打ちをもって臨むという風習を踏まえての嘆願でありました。二人の友情は、根底に契約が存在します。ダビデはこの契約に誠実です(サムエル

下9章)。

ヨナタンは、本来なら自分が来るべき王となるはずなのに、ダビデこそ王にふさわしい人物と認め、彼の慈しみに期待し、自分と自分の子孫の命を預けています。ダビデこそ主の選びの器であるという信仰があったからです。ヨナタンは「ダビデを自分自身のように愛していたので」(17)、ダビデにその命を預けます。命を預けるという行為には、そのような信仰が必要です。ヨナタンは、「わたしとあなたが取り決めたこの事については、主がとこしえにわたしとあなたの間におられる」(23)と言って、それが決して破り得ない取り決めであることを強調しました。

新月祭の時、限られた者だけがつくことが許される王の食卓が用意されました。用意されたのは、王サウル、王子ヨナタン、王の従兄弟で軍の長アブネル、そしてダビデが座る四つだけです。しかしその最後の席にダビデはいません。ヨナタンからその理由を聞いたサウルは激怒し、ヨナタンを激しく罵倒し、槍を投げつけました。ヨナタンは、父の態度を見て父が本当にダビデを殺そうとしていることを知り、ダビデにそのことを伝えます。

二人は口づけし、共に激しく泣き、二人とその子孫との間には、主が共におられることを確認して、断腸の思いで別れます。激しく抱きあい、口づけして、共に泣く、その姿は実に感動的です。この後、二人は再会することなく別の道を歩みますが、とこしえにいます主が二人の間を取り持ち、その友情を支え、離れ離れになっても、二人を強く結びつけています。両者の間には、常に主が聖なる橋のように結節点として存在しています。後にサウルとヨナタンがギルボア山の戦いで戦死したとの報を受けたとき、ダビデは、ヨナタンの友情を、「女の愛にまさる驚くべきあなたの愛」(サムエル下1:26)と言って、哀歌を歌っています。

(鳥井一夫)

※第25号(6月10日聖書研究)からの再掲載です。

テキスト サムエル記上 20章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問4, 65

〔単元のねらい〕

ダビデとヨナタンの友情の物語である。子供たちにとっては最大の関心事のひとつである〈ともだち〉がここでの主題となる。主イエスとの交わり、人と人との交わりの恵みを分かち合いたい。

「〈ともだち〉になろう」

ダビデは巨人のゴリアトを倒してヒーローになりました。けれども、サウル王はこのためにダビデを妬んで、憎み、そして、ダビデの命さえ狙うようになります。このことは、ダビデにはとても辛く悲しいことだったでしょう。

しかし、このダビデを助けたのがサウル王の子ヨナタンでした。ヨナタンとダビデは友だちになって、ダビデにこんな約束をしました。「お父さん、君のことを本当に殺そうとしているのかどうか確かめてみよう。でも、もしお父さんが君のことを憎んで殺そうとしても、ぼくは君のことを守ってあげる」。ダビデはどんなにうれしかったでしょう。こうしてダビデとヨナタンは、どんなことがあっても友だちで居続けることを約束したのです。

翌日、ヨナタンはお父さんのサウルが、本当にダビデを殺そうとしていることを知ります。そこで、ダビデが隠れている野原に行き、弓矢で矢を放ちました。「ピューン」（一本目）、「ピューン」（二本目）、「ピューン」（三本目）。そして、家来にその矢を拾いに行かせて、大きな声で叫びました。

「矢はもっと先だー」。これは、ダビデとヨナタンの間だけでわかった暗号でした。「お父さんがダビデの命を狙っているから、逃げろ」という意味でした。ダビデは逃げました。「ヨナタン、ありがとう！」心の中で感謝しながら……。

こうしてダビデは、ヨナタンに守られ、無事にサウルの手から逃げ、命を助けられました。ヨナタンはともだちを命がけで守りました。二人はこ

の先も色んなことがありましたけれども、ずっと〈ともだち〉だったのです。

〈ともだち〉がいるってすばらしいこと。〈ともだち〉と一緒に遊ぶのも楽しいね。つらいことや悲しいことがあっても、〈ともだち〉に励まされることもあるよね。〈ともだち〉に悩みを聞いてもらったりするとすごく安心します。ダビデとヨナタンもそんな〈ともだち〉でした。

でも一番、たいせつなことは、〈ともだち〉から何かをしてもらうことではなくて、あなたが〈ともだち〉に何をしてあげるかです。わたしたちはどうしてか、いつも自分がしてもらうことばかり、求めがちになります。でも、ほんとうの〈ともだち〉は自分が、してもらうことばかりは求めません。目の前にいる〈ともだち〉がほんとうに、何を必要としているのか、何をしてほしいと思っているかということにも、心を向けます。

〈ともだち〉というと、みんなは「わたし」と「あの人」という1対1の関係のことばかりを思うかもしれませんが、きょう、教会に集っているみんなに知って欲しいことがあります。〈ともだち〉の関係ってというのは、それだけじゃないということ。では为什么呢？

それは、「わたし」と「あの人」の間に、「神さま」が入ってくださるということです。ダビデとヨナタンが、何があっても仲良しで居続けることができたのは、神さまに間に入ってもらっていたからです。二人は神さまの前でともだちであるこ

とを約束しました。そして、神さまが支え続けてくださったからほんとうの〈ともだち〉で居続けることができました。

先生は、こどもの頃になかなか〈ともだち〉ができずに悩んでいたことがあります。とつても、さびしいなあ？ と思っていました。自分だけのけ者にされているように思っていたこともあります。せっかく〈ともだち〉になっても、喧嘩をして離ればなれになってしまったこともありました。

みんなの中にも、「ぼくには〈ともだち〉がいないなあ」、「わたしには〈ともだち〉がいないなあ、さびしいなあ」という人もいるかもしれません。でも心配しないでください。大丈夫ですよ。イエスさまを信じて教会に集っているみんなにも必ず〈ともだち〉ができます。

先生も教会に来て〈ともだち〉できましたよ。それは誰でしょう？

一番の〈ともだち〉はイエスさまです。

イエスさまが〈ともだち〉っていうのはおかしいかな？ イエスさまは神さまであっても、〈ともだち〉ではないと思うかもしれません。

でも、イエスさまは〈ともだち〉になってくださったのです。ほんとうの〈ともだち〉です。ぼ

くたちを命がけで守ってくださる、そんな〈ともだち〉。ちょうど、ヨナタンがダビデを守ったような〈ともだち〉です。イエスさまはどんな時も、わたしたちと一緒にいてくださる〈ともだち〉です。このイエスさまを知って本当によかったと思っています。そして、イエスさまは、みんなに「〈ともだち〉になろうよ」と言っておられるのですよ。とてもすばらしいことですね。

教会でできた〈ともだち〉もいます。教会の〈ともだち〉は特別、たいせつな人です。神さまを信じている〈ともだち〉。みんなも教会に来ていると教会できっと〈ともだち〉ができますよ。この教会だけではなく、中会の他の教会に〈ともだち〉が見つかるかもしれませんね。ダビデとヨナタンのような〈ともだち〉がわたしたちにもできますように。

今は、すごく〈ともだち〉ができずにさびしいなあ、そんな寂しい思いをしている人たちが、たくさんいるように思います。みんなの周りにもそんな人がいるかもしれません。大人の人たちにもたくさんいます。その人たちのためにもお祈りしましょう。ひとりでも多くの人たちにイエスさまのことを知って欲しいです。 (橋谷英徳)

[今週の暗唱聖句] サムエル記上 20章42節

わたしとあなたの間にも、わたしの子孫とあなたの子孫の間にも、主がとこしえにおられる。



〈ねらい〉

神様に信頼して歩んでゆくときに、神様は素晴らしい友だちを与えて、ほくたち私たちを助けてくださいます。今日はダビデとヨナタンの友情物語から、お友だちの大切さについて、御言葉に聴きたいと思います。

〈展開例〉

みんな、お友だちがいるかな？ どうだろうか、本当に大切なお友だちをもっているかな（しばらく考えさせる）。

ダビデは、ゴリアトを倒して、一躍イスラエルのヒーローとなりました。多くの人たちが、ダビデの周りに寄って来ました。そして、ダビデをほめたたえました。

「女たちは楽を奏し、歌い交わした。『サウルは千を討ち／ダビデは万を討った。』」（18:7）。

女たちが歌い交わしたこの言葉が、サウルの心を傷つけました。そして、サウルはダビデのことがきらいになって、ダビデのことを憎むようになりました。そして、ダビデの命さえ狙うようになってしまったのです。ダビデはサウルに対して何もしていません。でも、一方的に命をつけ狙われていくようになってしまったのです。このことは、ダビデにとって、どんなにか辛いことであつたでしょうか。

その間に立ったのが、サウルの息子ヨナタンでした。自分のお父さんが、自分の心からの友だちの命をつけ狙っているのです。このことは、ダビデを辛くしただけではなくて、自分のお父さんと友だちの間に立つヨナタンを苦しめました。そし

て、ヨナタンは、お父さんがダビデを本当に殺そうとしているのを知るのでした。

ヨナタンは、ダビデが隠れている野で、弓矢を射ることにしました。これは暗号でした。三本の矢を射るのです。そして、それがダビデが隠れている所よりも、もっと先に落ちれば、それは、サウルがダビデを殺そうとしているという暗号でした（37）。ヨナタンはダビデに逃げろ！！と声をかけました。

「従者が帰って行くと、ダビデは南側から出て来て地にひれ伏し、三度礼をした。彼らは互いに口づけし、共に泣いた。ダビデはいつそう激しく泣いた」（41）。

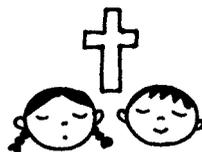
こうしてダビデは、ヨナタンの温かい愛の心によって、サウルの手から守られました。

「ヨナタンは、ダビデを自分自身のように愛していたので、更にその愛のゆえに彼に誓わせて」（17）と聖書は言っています。ヨナタンはダビデのことを自分のことのように愛していたので、お父さんとの板挟みの中でも、ダビデを心から助けることができました。

神様は、ほくたち私たち一人ひとりにも、素晴らしいお友だちを与えてくださいます。そして、折りにかなった助けを与えてくださるのです！！

〈お祈り〉

天の父なる神様。ほくたち私たちにも、素晴らしいお友だちを与えてくださって、心から感謝をいたします。主イエス・キリスト御名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

友情、信仰のきずなに結ばれた友だちが与えられることを求めよう。

〈展開例〉

羊飼いのダビデはサウル王の家来になりました。彼は主をおそれ、豎琴がうまく、また、ペリシテ軍の巨人ゴリアトを倒すほど強く勇ましい若者でした。サウル王の子供ヨナタンとダビデは親友になり、ヨナタンは上等な王子の上着や武器などを与え、自分の命のようにダビデを愛しました。ところが、ダビデが戦いで手柄をたて、だんだん有名になってくると、サウル王はダビデを憎むようになったのです。サウル王は何度もダビデを殺そうとし、ついに槍を投げつけました。ヨナタンは夜中にダビデを遠い荒野に逃がしてあげました。

ダビデはサウル王の追跡を逃れて、荒野をさまよいましたが、主を信じ、サウル王を少しも恨みませんでした。

その後、サウル王とヨナタンはペリシテ軍との戦いで戦死してしまいました。ダビデの悲しみはどれほどのものだったでしょう、親友が亡くなってしまったのです。

わたしたちもさまざまな出会いと別れを経験します。大好きなペットとの別れ、仲良くなったお友だちの引越し、それらすべては神様のご計画です。心から信頼できるお友だち、同じ信仰を持ったお友だちも神様が与えてくださいます。

それにもまして、わたしたちの人生の最後まで、ずっと変わらずにお友だちでいてくださるお方はイエス様です。イエス様はわたしたちが神の国に入るまで導いてくださいます。

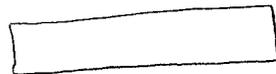
〈お祈り〉

神様。わたしたちに日曜学校のお友だちを与えてくださり感謝します。また、イエス様がわたしたちの友だちとなり、わたしたちを救ってくださることを感謝します。アーメン。

〈やってみよう〉**○作ってみよう**

用意するもの……画用紙、色マジックか色鉛筆、ハサミ
作り方

①画用紙を細長く切る。



②切った紙を半分に折り、またそれを半分に折る。

(これは自由に何等分してもよい)



③「手」になるところがつながるように人の輪郭を描き、ハサミで切る。



④大切なお友だち、教会のお友だちなどを思い浮かべて、顔を描いたり色塗りする。



☆一人のお友だちと自分の場合は、半分に折ればいいね！

描きたい人の人数にあわせて折る数を考えよう。

〈ねらい〉

ダビデとヨナタンはともに神様を心から信頼し、信じていた。だから二人の友情の根底には愛と憐れみと恵みに富みたまう神がいつもおられた。そのような二人は離ればなれになっても、どんな状況下にあってもその友情は温かく強く固く結ばれていて崩壊することはない。

〈展開例〉

皆には友達がいるでしょう。その友達とはどのような関係でしょう。テレビで見た物語を話し合ったり、読んだ本の内容を話したり、ふだん思っていることを語り合ったり、楽しく遊んだり、時にはけんかをしたり、助け合ったりしていることでしょう。

そんな友達がいることは毎日の生活を楽しくするし、学校へ行くのも楽しくなるし、とても有意義なことですよ。

今日はダビデとヨナタンの美しい友情のお話をしましょう。

少年であったダビデはイスラエルとペリシテ人との戦いに於いて、命をかけて戦いました。そして、無敵と言われたペリシテ人の巨人ゴリアトを石を投げて倒し、イスラエルに大勝利をもたらしました。この勝利の背後には神様の力が働いていることは忘れてはなりません、その結果、ダビデはサウル王の宮廷につかえるようになり、そこでヨナタンと初めて知り合ったのです。

イスラエルに勝利をもたらす働きをしたダビデは国民の間に大いに尊敬され、サウル王よりも人気がありました。サウル王はそのことでダビデに嫉妬し、彼を殺害しようと計画します。そのことをサウル王の息子であるヨナタンは知り、自分が父サウル王にとりなすことをダビデに約束します。

ここでサウル王、ヨナタン、ダビデの関係を見てみると、ダビデは神様によってサウル王の次の王様になることを告げられています。サウル王は

自分の次の王は当然息子のヨナタンに継がそうと考えていたことでしょう。何故なら古代においては、新しい王は古い王家一族の反逆の芽を根絶やしにするために残虐な仕打ちをするという風習があったからです。そうなると、もしダビデがサウルの次の王となれば、サウル王一族は皆殺しにされると、サウル王は思っていたのです。

しかし、ヨナタンはダビデを王にふさわしい人、神様が王に選ばれる人物であると認め、ダビデを自分自身のように愛していました。そしてダビデが王位に就いたとき、自分と自分の子孫に慈しみの態度で臨んでほしいと要望します。ヨナタンにしっかりした信仰がなければこのようには考えなかったでしょう。

ダビデはこの要望を受け入れ、誠実に実行していきます。ヨナタンとダビデとの友情には神様の恵み深い愛がお互いの思いや行為を通して表わされています。

サウル王のダビデに対する殺意が明確になったとき、二人はともに激しく泣き、二人とその子孫との間には神様が共におられることを確認し、断腸の思いで別れ、ダビデは一人で逃亡生活を送ることになります。その後、二人は再会することなく、別々の道を歩みますが、神様は、二人が離れていてもその友情を支え、強く結び付けられます。

後にサウルとヨナタンはペリシテ人との戦いで戦死しますが、ダビデはサウルとヨナタンを含む三人の息子の遺体を丁重に火葬に付しました。

〈祈り〉

神様。今子供たちの間で、いじめや孤立化が多くなっていると聞いています。どうか子供たち一人ひとりに神様のお導きによって信仰を与えてくださり、お互いに信じあえる友達をたくさん与えられ、ダビデとヨナタンのような友情を持ってみんなで仲良くしていくことが出来るようにしてください。

対話の手掛かりとして……。

①信仰の友が与えられることは、神さまから与えられる大きな恵みのひとつです。信仰生活は、決して自分ひとりで築き上げていくことはできません。教会共同体に代表されるように、信仰にある家族や友人が必要です。私も短いなりに信仰生活を振り返ってみると、多くの兄弟姉妹の支えや祈りがあったことに感謝しています。自分が気落ちしている時には、周りの仲間が自分に代わって神さまを賛美してくれました。その歌声や祈りに、巻き込まれる中で、段々と病んだ魂がいやされる経験をしました。

②ダビデとヨナタンの友情物語の背後には、ダビデに対するサウル王の憎しみ、妬みがありました。ダビデの活躍をよく思わないサウルは、ダビデの命を奪いたいと思うほどの妬みを持っていたのです（サムエル下19:9-11）。ダビデはサウルの殺意を恐れ、逃亡生活の苦しみの中にありました。ダビデが、生死の境目を彷徨っていた時に、彼を支えたのがサウルの息子ヨナタンでした。苦難や試練に陥っている時、信仰の友が与えられているというのは、ダビデだけではなく、私たちにとっても大事なことです。生死を分けると言っても、過言ではありません。

③私たちは、何をもって自分の友だちを「友」と呼ぶのでしょうか。趣味や性格が合うから友だちなのでしょう。もちろんそれらは大事なことです。でも、考えてほしいのは、友だち関係が上手くいかなくなることもよくあるということなのです。友だち関係だけではなく、あらゆる人間関係において言えることですが、いったん、互いの関係にひびが生じると、修復することが困難になります。「私たちは友だちだから、家族だから大丈夫！」という理由ではどうすることもできません。友情の拠り所が、

もし人間の中にあるとするならば、それは極めて危ういものになってしまいます。

④では、ダビデとヨナタンの場合は、何がふたりを結び合わせていたのでしょうか。23節には、「わたしとあなたが決めたこの事については、主がとこしえにわたしとあなたの間におられる」とあります。42節には「主がとこしえにおられる、と主の名によって誓い合った」とあります。ふたりの友情を結び合わせていたものは自分たちではなく、神さまが共にいてくださるという恵みです。自分たちの決意の強さによってではなく、主が私たちたちを守ってくださるという信頼がふたりの中にあったのです。

⑤主イエスも、弟子たちのことを「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」（ヨハネ15:5）とおっしゃってくださいました。ダビデとヨナタンの友情は（16節では「契約」と呼ぶ）、主イエスと私たちの間でも結ばれました。神さまは、私たちの友となってくださいるために、御子イエスをお遣わしになり、主はご自身の命を十字架でささげてくださいました。十字架の愛が、神さまと私たちの間に、まことの友情を造り出したのです。そして、キリストの友である私たちは、誰かの友になること、「互いに愛し合うこと」へと召されています（ヨハネ15:12）。

⑥信仰の友といえども、意見の違いがあり、時には憎しみさえ生まれることがあります。罪深い自分の惨めさに失望することもあるでしょう。信仰生活なんてどうせ綺麗事だ、ダビデとヨナタンの美しい友情なんて、私たちの間にはない関係のない話だと、思ってしまうこともあるかもしれません。しかしその時にこそ、思い起こしましょう！ まことの友である、キリストの十字架の愛を！

〔主の慈しみに満ちたダビデへの契約〕

ダビデは王として最初の七年六か月の間へブロンでユダを治め、三十三年の間、エルサレムでイスラエルとユダの全土を統治し、実に四十年間王位にありました（サムエル下5:4,5）。エルサレムは、山に囲まれた要害でエブス人という異邦人の町でした。ダビデはこの要害を奇襲して陥れ、この町を「ダビデの町」と呼び、周囲に城壁を築き、ついにここに安住することになります（5:9,7:1）。

このとき、ダビデは主の箱をエルサレムへ運び入れ、天幕の中に安置すると、主の御前に焼き尽くす献げ物と和解の献げ物をささげました（6:11）。

そして、ダビデは、「わたしはレバノン杉の家に住んでいるが、神の箱は天幕を張った中に置いたままだ」（7:2）と言い、神の箱のために特別の場所を建築する必要を覚えます。この時、預言者ナタンに「あなたがわたしのために住むべき家を建てようというのか。わたしはイスラエルの子らをエジプトから導き上った日から今日に至るまで、家に住まず、天幕、すなわち幕屋を住みかとして歩んできた」との主の言葉が臨みます（7:5,6）。これは、まことの神の臨在するところは人の建造物ではないという否定を含みながらも、まことの神、主自ら定められるところに建てられることをかえって、明らかにするものです。

実際に、「ダビデは神の御心にかない、ヤコブの家のために神の住まいが欲しいと願っていましたが、神のために家を建てたのはソロモンでした」（使徒言行録7:46）。しかしながら、この時、いわば、ダビデの息子ソロモンの神殿建設の基礎とも言える大切な神の契約がダビデと取り交わされることになります。このダビデへの契約は、「主があなた（ダビデ）のために家を興す。あなたが生涯を終え、先祖と共に眠るとき、あなたの身から出る子孫に跡を継がせ、その王国を揺るぎないものとする。この者がわたしの名のために家を建

て、わたしは彼の王国の王座をどこしえに堅く据える」（サムエル下7:11-13）という、主がダビデとその子孫を祝福されるという慈しみに満ちたものでした。

〔ダビデへの契約とキリストにある喜び〕

ダビデは、思いがけないこの祝福に満ちた主の言葉を聞き、感嘆の叫び声をあげて、「主の御前に出て座し」、「主なる神よ、何故わたしを、わたしの家などを、ここまでお導きくださったのですか。……あなたは、この僕の家を遠い将来にかかわる御言葉まで賜りました」と祈ります（7:18以下）。

そして、ダビデは、主なる神がイスラエルを救い出してくださり御自分の民とされたみ業をほめたたえ、エジプトと異邦の民とその神々からイスラエルの民を救い出してくださったことを感謝するのです。そして、神の約束のみ言葉に基づいて祈ることによって、「勇気を得ました」（7:27）と告白します。さらに、「主なる神よ、あなたは神、あなたの御言葉は真実です。あなたは僕にこのような恵みの御言葉を賜りました。どうか今、この（あなたの）僕の家を祝福し、どこしえに御前に永らえさせてください。主なる神よ、あなたが御言葉を賜れば、その祝福によって（あなたの）僕の家はどこしえに祝福されます」（7:28, 29）と祈りは締めくくられます。

実に、このダビデへの契約は、「アブラハムの子ダビデの子」（マタイ1:1）イエス・キリストの降誕という驚くべき神のみ業において、わたしたちの住む世界のただ中に実現しました。使徒言行録13章23節で「神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださったのです」と言われているとおりです。この神の契約にしっかり立って救いの恵みを共に受け継ぎつつ、主イエスに喜びと感謝をささげましょう。（宮武輝彦）

※第25号（6月17日聖書研究）からの再掲載です。

テキスト サムエル記下 7章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問23, 24, 37

〔単元のねらい〕

主は神殿の建築を願ったダビデの願いを退けられた。しかし、そこで主はダビデを祝福して、ダビデとの間に契約を結ばれた。神の恵みの契約の恵みを覚えて、喜び感謝しよう。

「家を建ててくださる神さま」

サウルとの戦いに勝って、ダビデはようやくイスラエルの王さまになりました。王さまになったダビデは、やがてエルサレムを都とします。周囲の敵はすべて退けられて、ダビデにも平和な毎日が訪れ、レバノン杉でできた大きくて頑丈な宮殿を建てて、そこに住むようになりました。そんなある日のことです。ダビデは預言者ナタンに言います。「見なさい。わたしはレバノン杉の家に住んでいるが、神の箱は天幕を張った中に置いたままだ」(2)。

ナタンは王に言います。「心にあることは何でも実行なさるとよいでしょう。主はあなたと共におられます」(3)。

ダビデは、ふと気づいたのでした。自分は立派な家に住んでいるのに、神さまはそうじゃないということに。

「ああ、なんて神さまに申し訳ないことをしているのだろう。なんて恩知らずなのだろう。神さまは私に恵みをくださったのに、私の方は神さまに何もしてあげていないではないか。」

ダビデはこのように思ったのでした。そこで、ダビデは神さまのための家を建てたいと言い出したのです。そして、神さまに仕えている預言者のナタンに相談したのでした。ナタンは、それは良いことだからしたらよいでしょうと賛成してくれました。

けれども、その夜のことでした。神さまは、このダビデの願いを退けられました。

これはとても不思議なことに思われます。せっかくのダビデからの申し出を神さまは喜ばれず

に、お断りになりました。なぜなのでしょう？

理由の一つは、神さまは人間とは違う方だからです。神さまは人から何かをしてもらわなければ困られるような方ではありません。

ダビデは神さまの恵みにお返しをしようとした。でも神さまの恵みに対して、どんなお返しをすることができるのでしょうか。私たちも、神さまからたくさんの恵みをいただいています。でもではありませんが、お返しすることはできません。

ダビデは神さまのために家を建てると言いました。でもどうでしょうか。神さまがお住まいになる家を、ダビデが建てることができるでしょうか？ 神さまは、私たちの目には見えない聖なるお方です。その神さまのお住まいを造ることは人間にはとてもできないことなのです。

神さまは、美しい宮殿に住むことも、一つの場所にじっとしておられることも、お望みにはならなかったのです。それは、神さまにはもっと大きな計画、もっと大きなお仕事があったからです。神さまはダビデが思ってもみなかった大きな計画をもっておられ、それを成し遂げようとなさっておられたのです。このことが一番、大きな理由だったのです。

ですから、神さまは、ダビデにこうおっしゃいました。「あなたがわたしのために家を建てるとは、わたしがあなたのために家を建てるとは、わたしがあなたの王国を確かなものとする。あなたの子孫から救い主が生まれます。あなたの国はこれから先もずっと続きます」。

神さまのお仕事は、イスラエルだけではなく、この世界に、神さまの救いが実現していくということでした。そして、神さまはこの約束どおりに、ダビデの子孫から救い主であるイエスさまを誕生させられました。

神さまは今も、大きな救いの計画をもっておられ、救いの御業を行なっておられます。

ダビデは、神さまのために家を建てたいと言ったのですが、神さまに断られてしまいました。逆に、神さまからは、「わたしはあなたのために家を建てる。救い主があなたの子孫から生まれる」、そういう約束を聞くことになりました。ダビデはせっかくの申し出を断られて、ショックだったでしょうか。そうではありません。ダビデはこのことを喜びました。神さまが思っていたよりもずっ

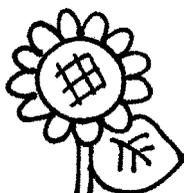
とずっと大きな方であることがわかってうれしく思いました。そして、神さまがこの世界に救い主をお与えになろうとしていることを知ってうれしかったのです。ダビデは、このことを感謝してお祈りをしました。

神さまも、このダビデの祈りを聞いて、とても喜ばれたでしょう。家を建ててもらうことよりも、神さまはこのダビデのお祈りを喜ばれたに違いありません。

私たちもみんな神さまからたくさんの恵みをいただいています。神さまの恵みを数えてみましょう。神さまに感謝しましょう。お祈りしましょう。きっと天にいらっしゃる神さまはみんなのお祈りを喜んでくださいます。 (橋谷英徳)

[今週の暗唱聖句] サムエル記下 7章11, 12節

主があなたのために家を興す。あなたが生涯を終え、
先祖と共に眠るとき、あなたの身から出る子孫に跡を継がせ、
その王国を揺るぎないものとする。



〈ねらい〉

神様は、私たちが考えているよりも、もっともっと大きなお方であることを、御言葉から考えましょう。

〈展開例〉

皆にとって、神様って、どんなお方だろうか？
(少し考えてみる……)

実は神様というお方は、ぼくたち私たちが考えるよりも、ずっとずっと大きなお方なんだね。

ダビデが王様になって、イスラエルはとても安定していました (1)。

「王は預言者ナタンに言った。『見なさい。わたしはレバノン杉の家に住んでいるが、神の箱は天幕を張った中に置いたままだ。』」 (2)。

ダビデは、自分だけがrippana家に住んで、神様のために大きなお住まいがないので、ぜひ神様のために素晴らしいお住まいを建てようとしたのでした。ダビデと一緒にいたナタンという人もそのことを勧めたのですが、神様は「あなたが生涯を終え、先祖と共に眠るとき、あなたの身から出る子孫に跡を継がせ、その王国を揺るぎないものとする。この者がわたしの名のために家を建て、わたしは彼の王国の王座をどこしえに堅く据える」 (12-13) と言われました。

結局は、ダビデ王の子供であるソロモン王が神のお住まいである神殿を建てることになります。でも、よく考えてみれば、神様は美しい神殿に住むことも、一つのところに、ずっとおられることもありません。神様は一つところにしぼられることは絶対にないのです。

それは神様には、もっともっと大きな御計画が

あったのです。それがこの御言葉です。

「わたしは慈しみを彼から取り去りはしない。あなたの前から退けたサウルから慈しみを取り去ったが、そのようなことはしない。あなたの家、あなたの王国は、あなたの行く手にどこしえに続き、あなたの王座はどこしえに堅く据えられる。」 (15-16)

神様は、ダビデの王国がずっと続くだけではなくて、ダビデのずっとずっとずっと後の子供から、救い主イエス・キリストがお生まれになることを約束されたのです。

「神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださったのです。」 (使徒言行録13:23)

そして、神様はお約束の通り、ぼくたち私たちのために、救い主、イエス・キリストを生まれさせてくださったのです。

ぼくたち私たちに対する神様のご計画は色々あると思います。ぼくは将来こうなりたい、わたしはこれになりたいと、色々あると思います。でも神様は、ぼくたち私たちのために、一番良いことをしてくださるのです。神様を信じていきましょう!!

神様は素晴らしいことをしてくださるのです!!

〈お祈り〉

天の父なる神様。ぼくたち私たちの思いを超えて素晴らしいことをしてくださる神様を信じていることができるようにしてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

主の神殿建築を願うダビデを祝福し、契約を結ばれた。契約の真実を喜ぼう。

〈展開例〉

サウル王も、ダビデの大親友であったヨナタンも、ペリシテ軍との戦いで死んでしまいました。イスラエルの王様になり、神様の祝福を賜ったダビデは、エルサレムに移り住みました。そして、この町に住むすべての人が神様を中心にして、礼拝を中心に生活できるように願いました。

しかし、よく見れば、ダビデ自身はレバノン杉で作られた立派な家に住んでいるのに、神様が与えてくださった十戒の入った契約の箱をおさめているところは、みすばらしい幕屋（テント）でした。そこで、ダビデは神様のために立派な神殿を建てようと思いましたが、預言者を通して伝えられた神様の言葉は、ダビデの申し出を断るものでした。

神様は人の建てた家に住むことはなさらない、とおっしゃいました。そして、それどころか、神

様の方から、イスラエルとダビデのために家を興し、ダビデの王国がその子孫にいたるまで平安に、安らぎのうちに過ごすことができるように、約束（契約）してくださいました。

このダビデの子孫からイエス・キリストがお生まれになります。この方がまことの神様の神殿を建ててくださいました。キリストの十字架と復活を土台とするキリストの教会です。キリストを礎として、神様を礼拝する神の民が世界中に起こされ、わたしたちもその一枝として、今日も礼拝をささげています。神様は人の思いを遥かに超えて、目に見える立派な神殿でなく、目には見えませんが世の終わりまで続くキリスト教会を祝福する約束をしてくださいました。

〈お祈り〉

神様。今わたしたちが毎週通っているこの教会を、ずっと昔から祝福してください感謝します。これからもこのお恵みを忘れないで、真の神様を礼拝することができるよう祈ります。アーメン。

〈やってみよう〉**○聖書を開いて考えよう**

ばらばらにした聖句を紙で作ります。それらを並べて聖句を完成しましょう。

地上の大いなる者に並ぶ名声を与えよう

わたしは共にいて

あなたがどこに行こうとも

あなたの行く手から敵をことごとく断ち



〈ねらい〉

主なる神は恵みに富み、慈しみ深く、忍耐強いお方です。また神の御言葉は真実で約束を忠実に果たしてください。ダビデは篤い信仰をもって神の御言葉を第一とし、すべてを神にゆだね、神を深く信頼し常に賛美と感謝をささげています。神はこのようなダビデを信頼され祝福して、ダビデの子孫によって永遠の王国をたてると約束されます。この約束はダビデの子孫である救い主イエス・キリストがお生まれになることによって実現するのです。

〈展開例〉

みんなはお父さんやお母さん、友達、そして色々な人と約束するでしょう。その約束をちゃんと守っていますか。約束を守り責任を果たすことは大変重要なことです。神様もダビデに約束されました。その約束をダビデがどのように信頼し、果たしていったのでしょうか。ダビデの熱心な信仰が今のみんなの平安と喜びにつながっているお話をしましょう。

ダビデは神様の御心にどこまでも忠実で、この成り行きを常に神様にゆだね、良いか悪いかの判断を自分の都合ではなく、神様の御心にかなっているかどうかによって決める、神様を畏れ敬う人でした。このようなダビデに対して、神様は、「僕ダビデの手によって、私の民イスラエルを敵の手から救う」「わが民イスラエルを牧するのはあなただ、あなたがイスラエルの指導者となる」と約束されました。

この約束を信じて神様の御心を第一とするダビデは、敵であるペリシテや他の種族と戦って勝利し、イスラエルとユダの全土を統治する王とされます。ダビデは神様に祝福され、神様の約束は実現していきます。このことから明らかになったことは、すべては神様が支配されており、ダビデは神様の御心を実現するために仕える神の器、神様の忠実な僕だということです。

神様はダビデに示された約束に忠実であられました。ダビデもまた神様に忠実に応答し、王位を

獲得し、王権を確立します。そこでダビデは他所にあった「神様の契約の箱」をエルサレムに移し、そこに神様が住まれる神殿を建てたいと神様に願います。しかし、神様はこれを許されません。ダビデは神様から恵みをいっぱいいただいて立派な宮殿に住んでいる、だから、そのお返しに神殿を建てたいと神様に願ったのですが、神様はお断りになりました。何故でしょうか。神様は人から感謝や賛美はお受けになりますが、何かしてもらうことはお喜びになりません。私たちもたくさんの恵みをいただいています、お返しをすることなどとてもできません。まして神様のお住まいを造ることは人間には出来ないことなのです。

神様は、人間にはとても考えられないような大きなご計画を持っておられます。その計画は、すべての人を救い、永遠の命を与え、人間が希望と喜びを持って平安に生きることでできる平和な世界を創り上げることです。そのような神様ですから、人間が考えるように美しい神殿に住んでゆっくりしようなどとは考えておられないのです。

神様はダビデに神殿建築はお断りになりましたが、その願いは汲み取られ「彼の子孫によって永遠の王国を建てる」と約束されました。この約束はダビデの子イエス・キリストがお生まれになることによって実現するのです。そのイエス・キリストの十字架とご復活による福音を信じることによって、私たちは罪赦され、希望を持って平安に生きることが出来るのです。ご復活された主イエス・キリストのお体が神様の神殿であり、それが教会なのです。この教会を通して神様のご計画されている平和な世界が実現していくのです。

これが神様がダビデと結ばれた契約の真実です。私たちは神様のこの約束を信じて歩んでいきましょう。

〈祈り〉

神様。神様がダビデと結ばれた契約を実行して、御子イエス・キリストをこの世にお送りください、感謝します。私たちも神様の御心に忠実に従って歩むことが出来ますようにお導きください。

対話の手掛かりとして……。

- ①自分によくしていただいた方に感謝を表わすことは、人間関係を築き上げていくうえで欠かすことのできないものです。もし、お礼を言わず、感謝の意を表わさなければ、相手に対してたいへん失礼にあたります。また、感謝を表わす場合も、それをどのようなかたちで表わせばよいのかが分からなくなることもあります。これくらいで相手に喜んでいただけるだろうか、もっとした方がいいのだろうか。感謝を表わすという行為の中にも、つつい相手の心を気にしてしまうところがあるのです。
- ②そのことが、神さまに対する感謝にも表れてきます。ダビデは若くしてイスラエルの王になりました。自分の命を狙っていたサウルをはじめ敵らしい敵はいなくなり、家も与えられ安心して暮らすことができるようになったのです。ダビデは、神さまの恵みによって、今の自分があることを知っていましたから、神さまに心から感謝したかったのです。具体的には、神の箱を天幕ではなく、立派な神殿の中に置くことでした。自分だけがいい家に住んで、神さまを安っぽい天幕に置いておくことは申し訳ないと思ったのでしょう。ダビデはしっかりと感謝の計画を立てました。神さまのために神殿を建てればきっと喜んでいただけるに違いないと確信したのです。
- ③神さまは、ダビデの感謝の行為をお喜びになられたと思います。どうも神さまの御心とはかけ離れていたようです。ダビデは神さまからいただいた恵みに対して、感謝を表わし、お返しすることができるものだと考えました。感謝することによって、自分と神さまとの関係が健全

なものになると、どこかで思い込んでいたのです。もちろん神さまは、私たちの感謝の思いを喜んで受け入れてくださいます。しかし、神さまと私たちの関係は、私たちがどれだけ感謝を表したかで決まるものではないのです。

- ④神さまと私たちの関係を築き上げてくださるのは、神さまご自身です。聖書では、このことを「契約」と言います。しかも神の契約は、この世的な契約とは違います。つまり、私と相手がお互いの関係ではないということです。聖書が語る契約は、いつでも神さまが私たちの方に歩み寄ってくださることによって成り立つものです。今回の「ダビデの契約」と呼ばれる出来事においても、神さまは「あなたのために家を興す」とおっしゃいました。神さまに感謝したいと願ったダビデに、更なる恵みを与えると約束をしてくださるのです(11～13節)。「与えられたらお返しをする」という人間が考える常識を遥かに越えたお方。それが神さまです。
- ⑤では、私たちが神さまに感謝することは無駄なことなのでしょうか。そんなことはありません。27節に、「それゆえ、僕はこの祈りをささげる勇気を得ました」とあります。18節からはダビデの祈りが記されています。その内容は要するに、「神さま、どうかあなたが約束してくださいとおおり、私たちを祝福してください」というものです。神さまに十分に感謝を表わせていないのにもかかわらず、また神さまに祈り求めるなんて厚かましいのではと心配するかもしれませんが、でもそんな心配はいりません。むしろ、益々神さまの祝福を求めてよいのです。神さまの契約の真実に、「アーメン」(真実です)とお応えして、更なる祝福を求めて生きることを、神さまはお喜びになるのです。

〈背景と文脈〉

詩編120編から134編までの15編に「都に上る歌」という表題が付されている。これはエルサレムの神殿に礼拝に上るときに歌われた歌を集めたものである。特に、律法で規定されていた三大祭りの巡礼のとき歌われたと考えられる。「男子はすべて、年に三度、すなわち除酵祭、七週祭、仮庵祭に、あなたの神、主の御前、主の選ばれる場所に出なければならない」（申命記16:16）とあるように、人々はこれらの祭りに参加するために地方から巡礼の旅に出た。

イスラエルの民にとって、都エルサレムに上り、神殿で神を礼拝することは何よりの喜びであった。この詩編には、礼拝の喜び、そして聖なる都エルサレムの繁栄と平安を祈る詩人の切々たる思いが込められている。言及されている都上りは、用いられている時制から、詩人の回想と考えるのが自然である。「ダビデの詩」という表題は後からつけられたものである。この詩編がいつ作られたかについては、はっきりせず、学者の間にさまざまな意見がある。

〈エルサレムで主を礼拝する喜び (1-5)〉

1~2節は、巡礼に参加でき、エルサレムに着いたときの喜びを、短い詩のなかに、生き生きと、また鮮やかに表現している。エルサレムは、イスラエルの民にとっては聖なる都、神の都であり、心こがれる場所であった。そこには主の家(1)があり、ダビデの王座(5)が据えられていたからである。イスラエルは神が統治される国家であり、宗教と行政と司法はひとつだった。

「すべての部族、主の部族は上って来る」(4)。エルサレムは契約の民をひとつにする場であった。偉大な贖いのみわざによって民を救い、民の必要を満たし、今なお民を導いておられる主を礼拝するのはイスラエルの定めである(4)。彼らは主に属する契約の民であり、共同体である。定められた祭り(申命記16:1-17)を共に祝うこと

はその象徴であり、主に属する部族としてのアイデンティティを確認するときでもあった。祭りへの参加は、主への感謝(4)、讃美、そして主への従順を示すものであり、また相互の交わりの場でもあった。

エルサレムが慕われたもうひとつの理由は、そこにダビデの王座が据えられ、正義を象徴する裁きの座があったからである(5)。ちなみに、サムエル記下7章はダビデ物語のなかでもクライマックスである。主がナタンを通して「あなたの家、あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続き、あなたの王座はとこしえに堅く据えられる」(7:16)とダビデに約束されたことは、彼の子孫であるイエス・キリストによって成就した(詩89:4-5)。それは、地上の王国とは異なる永遠の王国であり、エルサレムはその王国の象徴である。それは、信仰の父アブラハムが待ち望んでいた永遠の都である(ヘブライ11:10)。

〈エルサレムの平和のための祈り (6-9)〉

詩人は「エルサレムの平和を求めよう」(6)と呼びかける。「サレム」は「平和」(シャローム)と同じ語根をもつ。聖都エルサレムの平和は、「あなたを愛する人々」(6b)、すなわち主の民の安全と繁栄の基礎である。

詩人はまた、信仰を同じくする兄弟、友のうち平和があるように、と祈る(8)。彼らは、主によってひとつとされた共同体である。詩編133の都上りの歌では、共同体の交わりの麗しさが強調されている。「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び」(1)。

詩人はこれらの祈りを霊的な視点からささげている。彼の祈りは、ご自分の民を贖うために、ダビデの子孫としてお生まれになったイエス・キリストによって実現した。その平和は神との和解に基づく真の平和であり、人々とのつながりのもとである。(後藤公子)

テキスト 詩編 122編
参照カテキズム 子どもカテキズム 問80

〔単元のねらい〕

毎年、8月15日に近い主日は、通常のカリキュラムを中断し、平和について考える礼拝を捧げています。子どもカテキズムに、「平和」そのものを取り扱う問答はありません。しかし、主の祈りの第二祈願を扱う問80の答えの中に、「神さまの恵みの支配」という言葉があります。これこそ神の平和にほかなりません。神の平和は、既に、イエス・キリストの十字架と復活によって、地に実現していることを証しましょう。神の救いのご計画の中心は、その平和が、神の国の中心的あらわれである教会において始められ、確立され、拡大して行くことにあります。この平和を破壊する人間の罪とサタン企てに、大人も子どもたちも心を合わせ、抵抗し、反抗し、平和を造り出すことこそ、教会の存在理由そのものであることを、確信し、その実践へと、共に小さなことから始めて行くことができたなら、幸いです。そして、まさにイスラエルの平和（安全保障）こそ、現代世界最大の課題であることを震える思いで受け止めます。

「平和のあいさつをかわそう」

今朝は、旧約聖書の詩編を読みました。この詩は、すばらしい神殿があったエルサレムというイスラエルの都に行くときの詩です。ちょうど、神さまを礼拝する安息の日なのだと思います。それぞれの家のドアが開いて、「主の家に行こう」と言い始めます。「さあ、エルサレムの神殿に出かけて、皆で、神さまを礼拝しよう!」、「今日は、安息日だ。うれしいなあ。みんなで、声をあわせて詩編を歌い、神さまの御言葉を聴いて礼拝できるんだ」。きっと、早起きをして、準備を整えて、いそいそわくわくしながら、道に出てきます。みんなの顔は、輝いています。スキップしながら、進んで行く子どもたちもいます。見ている大人たちもニコニコしています。詩人も、「わたしはうれしかった」と、すなおに歌います。

先生も、今朝、皆が元気に、教会に来てくれて、今、いっしょに礼拝できていることが、とてもうれしいです。神さまに感謝します。

何故、神さまを礼拝することは、そんなに楽しくうれしいのでしょうか。皆は、どこに行くとき、嬉しくたのしくなりますか。反対に、どこに行くとき、悲しい気持ちになってしまいますか。

たとえばみんなは、学校に行くの、楽しいですか。どうして楽しいのでしょうか。楽しくないですか。どうして、そうなのかな。

答えは、きっと、かんたんです。「だって、勉強が楽しくてしかたがないんだもん」と答えてくれるお友だちはいるでしょうか。「だって、友だちがいるから」。そう答えてくれるお友だちが、一番多いのではないかと思います。

つまり、ぼくたち私たちにとって、そこにいると、うれしくたのしくなるのは、いっしょに遊んでくれて、自分のことを大切に思ってくれる友だちがいるからではないでしょうか。

さて、詩人は今、「わたしたちの足は、立っている」と歌います。神殿に到着しているわけです。しかも、ぞくぞくと、イスラエルの人たちがやって来ます。そして、「主の御名に感謝をささげ」始めています。賛美の歌声が神殿にこだましています。礼拝が始まっているのです。ここでは、皆の心が一つに結ばれています。うれしく楽しい礼拝です。

このように、人と人、友だちと友だちとの間にある、うれしく楽しい関係のことを、「平和」と

いうのです。もしかすると、平和というのは、戦争がないこと、つまり、国と国とが争って、武器をもって殺し合っていないことだと思うかもしれませんが。たしかに、それも平和です。でも、ほんとうの平和は、どこから始まるかという、ぼくたち私たちの一番身近なところ、つまり自分の心の中から始まるもの、始めなければならないものなのです。

友だちに意地悪なことを言ったり、したりする人や、けんかばかりしている人が、「戦争反対、戦争は悪い、ダメ」と言っても、ちょっとおかしいと思いませんか。ただ同時に、ぼくたち私たちも、よく知っていることだと思います。お友だちと仲良くしたいし、しなければならぬことは、頭ではよくわかっているつもりだけれども、実際に、そうすることはとても難しいということです。

神さまとは、どのようなお方なのでしょう。新約聖書のローマの信徒への手紙の中に、「平和の神」、「平和の源なる神」という言葉があります。平和というのは、神さまのことだと言って良いわけです。つまり、ぼくたち私たちの神さまは、「父なる神さま、子なる神さまのイエスさまそして聖霊なる神さま」（子どもカテキズム問10）です。三位一体の神さまです。その神さまの間に、けんかやあらそいなどあるはずがありません。いつもお互いを愛しあい、信頼し合い、深い絆で結ばれています。

そして、その平和の神さまによって造られた人間は、本当は、この神さまを真似して、お互いに愛し合い、信頼し合い、深い絆で結ばれて、暮らせるはずなのです。それが、人間のまことの平和なのです。

ところが、その神さまが与えてくださった平和を、あのアダムさんとエバさんが、神さまの御言葉を破って、壊してしまいました。最初はお互いにとても愛しあい、信頼し合い、深い絆でむすば

れていたのに、けんかを始めてしまいました。こうして、人間はお互いに妬み、憎しみ、お互いを無視したり、憤ったり、平和を失ってしまったのです。

考えてみましょう。このようなぼくたち私たち人間は、いったいどうしたら、この世界、そして、ぼくたち私たちの学校の中に、まことの平和がつかれるのでしょうか。

今日、神さまに与えられた御言葉は、礼拝する喜び、礼拝するやすらぎ、礼拝するしあわせを、神さまに感謝する詩でした。つまり、神さまは、ぼくたち私たち人間に、神さまを礼拝することによって、平和をあたえてくださるという約束をしてくださったのです。だから、この神さまを礼拝しないなら、ほんとうの平和は実現しないのです。

そして何よりも大切なことは、この神さまを礼拝できるように、ぼくたち私たちの罪を十字架で償ってくださったイエスさまのこころです。イエスさまを信じる人こそ、神さまを礼拝できるのです。そして、イエスさまを信じることによって、お互いの心と心が通い合って、平和になるのです。

教会は、世界の平和を実現するためにも、礼拝を捧げているのです。神さまは、ぼくたち私たちのこの小さな礼拝も、世界の平和をつくるための道具としてくださいます。今朝ここで、「あなたのうちに平和があるように」と心から、お友だちの幸福、お友だちの笑顔を願ってこの祝福の言葉、挨拶をかわすなら、神さまは、それをかなえてくださいます。ぼくたち私たちを通して、この教会の礼拝式を通して、神さまは平和を造り出してください。

最後に、今も世界では、争いや戦いが続いています。実は、その一番大きな問題は、今のイスラエルという国に平和がないことにあるのです。この詩をもって、ぼくたち私たちの心からの祈りしたいと思います。（相馬伸郎）

[今週の暗唱聖句]

詩編 122編8節

わたしは言おう、わたしの兄弟、友のために。

「あなたのうちに平和があるように」

〈ねらい〉

神様は、ほくたち私たち一人ひとりを愛しておられます。毎週日曜日に、その神様を心から礼拝する、その喜びについて考えたいと思います。

〈展開例〉

皆、毎週日曜日に、どんな心で教会に行っているかな？（皆に聞いてみる……）。楽しいな、楽しみだな、嬉しいな。こう思って行っているお友だちもいると思います。でも、やだなあ、つまらないなあ。こんな思いで行っているお友だちもいると思います。

今日、聖書に「主の家に行こう、と人々が言ったとき／わたしはうれしかった」（1）とありました。神様を礼拝しに行く時は楽しいのです。神様を礼拝しに行くときは嬉しいのです。神様を礼拝しに行くときは、本当に楽しいのです。

「エルサレムよ、あなたの城門の中に／私たちの足は立っている」（2）。

この詩編の作者は既に神殿にいます。神殿の中で神様を礼拝する、準備をしているのです。

「エルサレム、都として建てられた町。そこに、すべては結び合い、そこに、すべての部族、主の部族は上って来る。主の御名に感謝をささげるのはイスラエルの定め」（3-4）。

後から、後から、次から次へと、続々といろいろな人が神殿に礼拝に来ているのです。

そして、皆が神様を見上げて、皆が神様を賛美して、皆が心からお祈りをしています。こうして、皆の心が一つに結ばれているのです。このように、ほくたち私たちの間にある、嬉しくて、楽しい関

係のことを、「平和」と言います。

もちろん、大きな災害がないとか、戦争がないとか、争いのないことを平和と言います。でも、本当の平和は、ほくたち私たちの間に、まず、あるものであり、ほくたち私たちの心の中から生まれるものなのです。これを平和というのです。

神様は、「平和の神様」であり、「平和の源なる神様」なのです。でも、ほくたち私たちは、この神様に背き、罪を犯して、神様との平和を壊してしまいました。そして、神様との平和が壊れてしまった時に、ほくたち私たちの間にある平和も壊れてしまったのです。

でも、イエス・キリストが十字架で、ほくたち私たちの罪を赦してくださることによって、神様との平和を回復してくださいました。そして、神様を信じ、主イエス・キリストを信じる時に、神様との平和だけではなくて、ほくたち私たちの中にある平和も回復してくださったのです。

「エルサレムの平和を求めよう。『あなたを愛する人々に平安があるように。』」（6）

「わたしは願おう／私たちの神、主の家のために。『あなたに幸いがあるように。』」（9）

神様との平和を回復して、お友だちとの真の平和を得て、心から神様を礼拝しましょう！！

〈お祈り〉

天の父なる神様。ほくたち私たちが、あなたを信じて、平和を得て、そして、お友だちとの平和を得て、心から礼拝できるようにしてください。主イエス・キリスト御名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

平和の土台はキリストにある。与えられた神の平和を人々と分かちあおう。

〈展開例〉

皆さんはどこに行くときがたのしいですか。

どこに行くときが悲しいですか。(生徒に具体的に言ってもらいましょう。)

私たちが楽しいと思うところは、大好きなところがあるところですね。そして楽しいところには、大好きな人やお友だちがいることが多いですね。

お友だちとけんかをしてしまったときは楽しいですか？ お友だちをいじめたときは楽しいですか？ ぜんぜん楽しいことはありませんよね。そこには怒ったみんなの顔や、意地悪な顔しかありません。

私たちがたのしいとき、うれしいときには笑顔があります。自分も笑顔でそしてみんなの笑顔があふれている。そのような関係、それを「平和」

と言います。

神様はもともと私たちに「平和」を与えていてくださいましたが、アダムとエバさんが神様との約束を破って壊してしまいました。だから、私たちはけんかを始めてしまい、人を憎むようになってしまったのです。

でも、神様は私たちが教会で礼拝をささげることによって「平和」を与えてくださるという約束をしてくださいました。だから、神様を礼拝することによってしか本当の「平和」は訪れないのです。今日もみなさんと一緒に礼拝を守ることができて感謝です。皆さんが笑顔で教会に毎週来てくれることが、本当の「平和」につながっていくのです。

〈お祈り〉

本当の平和を与えてくださった神様。戦争やけんか、憎しみのない世界になるよう、人々の心をつくり変えてください。わたしの心に、いつも「平和」をあたえてください。アーメン。

〈やってみよう〉**○聖書の言葉を聞きましょう**

「平和」「平安」という言葉は、それぞれ何回でてくるでしょうか？

教師が詩編122編を読み、その間、生徒は目を閉じて、静かに気をつけて聞こう！

【答え】「平和」3回、「平安」2回



〈ねらい〉

平和の神様が、私たちといつも共にいてくださることを感謝して、心を神様に向け礼拝し、まことの平和が与えられるように祈りましょう。

〈展開例〉

今日、みんなはどんなことを思いながら教会に来たか、思い出してみてください。

「お友達が来ているかな?」「今週も先生に会える」とか、もしかしたら、お母さんやお父さんに「もう出発の時間だよ」と教えてもらって来たかな? 今日、今日の聖書の箇所も、教会に出かけていく人のことが書かれていたね。

Q どんな気持ちだと書かれていたかな?

A 1節「わたしはうれしかった」

教会に来て礼拝すること、それは私たちにとって、本当の喜びです。大好きなイエス様のことを信じて賛美をします。聖書からは、神様の御言葉を、私たちにくださいます。そして、神様を礼拝することによって、私たちにまことの平和を約束

してくださっているのです。

今日、教会に来るまでの一週間に、みんなは兄弟やお友達とケンカしちゃったことがあったかな? ケンカにはならなくても、兄弟やお友達に意地悪しちゃったことはなかったかな??

私たち人間は、罪を持って生まれてきています。神様から私たちは、「互いに愛し合いなさい。助け合いなさい」と、教えられているのですが、平和の心がないと、なかなかいつも仲良ししていることはできません。

私たち一人ひとり、神様はいつも一緒にいてくださいます。神様を礼拝し、私たちの心に平和が与えられ、兄弟・家族・お友達……みんなの平和が心の中からつながっていくようにお祈りしましょう。

〈祈り〉

天の神様。今日も元気に教会に来ることができて、ありがとうございます。わたしの心に神様のまことの平和を与えてください。



対話の手掛かりとして……。

- ①今週は「平和」について考えます。平和という言葉は教会の中だけではなく、教会の外においても頻りに聞く言葉です。また平和について考えることは、教会の中だけでしているのではなく、学校や社会、世界中において、いつも考えていることです。なぜなら、誰もが世界が平和であってほしいことを望んでいるからです。政治や世界情勢に詳しくない人もでも、小さな子どもであったとしても、戦争はよくないことだということを知っています。戦争なんかやめて、早く皆が平和に過ごすことができたらいいのにと願っているのです。にもかかわらず、いつまでたっても戦争は終わりません。毎日のように悲惨なニュースを見聞きしなければいけないのです。「なぜこんなことが起こるのですか」という人々の声が、キリスト教会にも向けられています。私たちはそこで語るべき言葉を持っているでしょうか。
- ②「戦争と平和」という言葉があるように、「平和」と「戦争」はいつも並べて語られます。つまり、戦争がない状態のことを「平和」と呼ぶのです。確かに、この世界から戦争が一日も早くなくなることを、私たちは日々祈り願っていますし、これからも祈り求めるべきです。しかし、その上で、私たち教会が、またキリスト者たちが、考えなければいけないことがあるのではないのでしょうか。つまり、戦争がなくなれば、それで本当の平和がもたらされるのかということなのです。「戦争」と聞いて、すぐに思い浮かべるのは、互いに武器を用いて、命を奪い合い、街が爆弾によって無残にも破壊されている姿です。
- ③しかし、もっと広い意味で、戦争を理解するならば、私たちが生きている日本においても、学校や友だち、あるいは家族の間においてさえも

頻りに起こっていることではないのでしょうか。互いに愛し合うことができず、憎しみ合い、殺してしまうことさえあります。実際に、手を出さなくても、「あんなやついなくなればいいのに」という思いに苦しむことがあります。「兄弟を憎む者は皆人殺し」(ヨハネー3:15、マタイ5:22)とあるとおりです。つまり、私たちの中には、隣人を真実に愛することのできない「罪」があるのです。人間の手によって戦争をなくし、そのような意味での平和を実現することができるかもしれませんが、しかし、罪の問題は、人間の力ではどうすることもできないのです。なぜなら、罪の本質は、人間同士の問題ではなく、神さまとの関係において言われていることだからです。

- ④人間の罪のゆえに、私たちと神さまの間には大きな隔ての壁ができてしまいました。人間の力では、罪の壁を打ち壊したり、壁を乗り越えて神さまのもとに行くことはできません。だから、神さまはご自分の方から、私たちの方へと乗り込んで来てくださったのです。イエス・キリストの十字架の贖いによって、私たちの罪は取り除かれました。そのことによって、私たちが神さまは真実に和解することができたのです。「実にキリストはわたしたちの平和であります」(エフェソ2:14)。キリストがもたらす平和が、すべての人に届く時、戦争がなくなるだけではなく、人間が互いに愛し合って生きることのできる平和が実現されます。そのために、地上に教会が建てられ、まことの平和であるキリストの福音を宣べ伝えているのです。
- ⑤詩編122編は、神の都エルサレムでささげた礼拝の喜びを歌っています。今日、主の日の礼拝において、私たちは神さまの平和の中にあることを共に覚えることができるのです。

神の御心である救いの恵みは世界に及ぶ。
主なる神の御心に喜んで従おう。

〈ヨナの逃亡〉

神様は、預言者ヨナにニネベの町に宣教の命令を下しました。ニネベは、アッシリア帝国の大都市であります。当時、全世界の中心首都でもありました。単に大都市というのではなく、ニネベの町は、異邦人の代表であり、人間の築いた文明の象徴であり、高ぶりの象徴として神様はニネベの町に宣教命令を下したのであります。ニネベの悪を指摘し、神のさばきを下すというのであります。ここに神の救いが、単にユダヤの人たちだけではなく、全世界に及んでいることが暗示されております。

しかしヨナは、素直にニネベの町への宣教命令に服すると思いきや、正反対のタルシシュ行きの船に「人々に紛れ込んで」(2)、神の命令から逃れようとするのであります。なぜ、ヨナが逃亡してしまったのかは、4章2節に記されております。ヨナなりの理由があったので、ヨナの無言の逃亡に固い決意があったことがうかがえます。それゆえ、無言で服従したアブラハム(創世記22章)とは対照的であります。神の命令に逆らう預言者は、ベテルに住んでいた老預言者(列王記上13章)があげられますが、神の命令に反する、背くことがあれば何かが起こることを聖書は示します。それが、突然の嵐であります。

〈ヨナの危機〉

「主は大風を海に向かって放たれたので、大海は大荒れとなり……」(4)。主なる神が、このヨナの逃亡において、突然の大風を放たれました。神は、後に巨大な魚、とうごま、虫などを通して、ヨナの心を動かします。神が、それらをご意志通りに用いることにおいて、自然界の支配者であり、

その中でヨナを導かれることが描かれていくことになります。

船乗りたちは、神々に助けを求めて、貴重な積み荷を投棄し、緊急避難の努力に努めます。その間、ヨナは、のんきにも船底に降りて熟睡しております。ヨナは、ヤッファに下り(3)、船に下り(乗り込み)、いま船底に降り、やがて海の底にまで降ることになります。

船乗りたちは、「くじ」を引くことにおいて、犯人探しをします(7)。サイコロのようなものを投げて神意を知る方法(ヨシュア17:1、サムエル上14:41、使徒1:26)ですが、そのくじがヨナにあたります。そしてヨナは、「わたしはヘブライ人だ。海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者だ……」(9、10)と白状します。ヨナが白状することにおいて、ヨナの語る言葉と、そして神に逆らっているという現実の間に、矛盾が皮肉にも際立ち、うつろに響くのであります。ここではヨナが預言者として召されていながら英雄的な姿を失って、ならず者の様相を示しています。同時に、逆に異教の人々が、神の力と反逆がもたらす恐ろしい罰を深刻に受け止め、ヨナを海に投げ込むことにおいて、主なる神に忠実な信仰を表明するのであります。ここから分かるように、異教の人々が主を畏れ、誓いを立てたことにおいて、主の救いの恵みが世界に及んでいることを示しております。

ヨナは、己の思いにおいて主の御心に従おうとしませんでした。けれども、これから主なる神は、ヨナを呼び寄せて、悔い改めに導き、主の御心通りになさろうとします。全世界に及ぶ神の御心である救いの恵みは、神ご自身の御力において実現されます。たとえ預言者ヨナが逆らったとしても、実現されます。私たちは、何が主の御心であるかを知り、そして主なる神の御心を素直に喜んで従うものになりたいものです。(潮田 祐)

テキスト ヨナ書 1章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問11

〔単元のねらい〕

今日から四週にわたってヨナ書を学ぶ。ヨナ書は小さな書物であるが、神の主権、救いの普遍性、そして罪人に対する神の恵みの奥深さ等、この書から学び得ることは数多い。とりわけご自身に逆らい、逃げ続ける預言者ヨナに対して神がいかに恵み深くあられるか、いかに豊かに、周到に彼の命のために備えてくださるかを心に刻みたい。わたしたちもまたヨナのように神に救われ、神に生かされ、神に守られ、神の救いに招かれている幸いなひとりひとりであることを今一度覚えたい。

「神さまのみ手」

今日から、ヨナという人のことを学びましょう。ヨナは預言者でした。預言者とは神さまの代理として、人々に神さまのみ言葉を語り伝えるために召され、立てられた人です。文字どおり神さまの口となって、忠実に神さまのみ心を告げることが、預言者のつとめでした。

神さまは、あるとき預言者ヨナに、ニネベに行って語れとお命じになりました。ニネベはアッシリアという国の都で、たいへん豊かで繁栄していた都市でした。けれどもアッシリアの人々は神さまのみ言葉に従わず、悪いことばかりをしていました。その罪と悪のゆえに、滅ぼされてもしかたなかったのです。

けれども神さまはニネベの都が滅びることをお望みにならず、罪の審判を警告し、ニネベの人々を悔い改めに導いて救おうとなさいました。そのためにヨナを用いようとなさったのです。

けれども、ヨナは神さまの命令に従いませんでした。預言者なのに、従わなかったのです。ヨナはタルシシュという港町に向かいました。この町は神さまが行けとお命じになったニネベとは反対の方角にありました。このようにしてヨナは神さまの命令に背き、神さまから逃げ出したのです。

ヨナはどうして神さまの命令に従わなかったのでしょうか。たぶん、神さまがニネベの人々を救おうとなさったことが気に入らなかったのです。

アッシリアは異教の国で、偶像の神々を拝んでいた国でした。神さまのみ心は広く、神さまの憐れみは偽りの神々を拝んで、滅びて行こうとしている人々にも及ぶものです。

ところがヨナは、救いの恵みは神さまの選びの民であるイスラエルにだけ与えられるべきであって、異教徒たちには与えられるべきでないと考えていました。ですから、ニネベに対する神さまのなさりかたが不満だったのです。神さまのみ心の広さ、深さが不満だったのです。それで、神さまのご命令から逃げ出そうとしたのです。反対の方向に向かっていったのです。

けれども、ヨナの逃亡は失敗に終わりました。神さまのみ手の及ばない場所の世界のどこにもありません。神さまのみ手から逃げられる人はだれひとりとしてありません。どこに逃げようとしても、神さまはそこにおられるからです。

タルシシュ行きの船に乗り込み、まんまと逃げおおせたと思ったヨナでしたが、何と嵐が起こって、船は海の真ん中で激しく揺れ、こなごなに碎け散ってしまうかと思われました。この嵐を起されたのは神さまです。

船に乗り込んでいた人々は、だれのせいでこの災難がふりかかったのかをつきとめるために、くじを引きました。くじはヨナに当たり、嵐の原因がヨナにあることがわかりました。そこで、彼の手足をしばって海に放り込んだのです。

海の真ん中に投げ込まれたヨナはどうなったのでしょうか。それは、また次週お話しします。

わたしたちもヨナのように、神さまに不満を抱いたり、納得できなかつたりということがあるかもしれません。神さまはわたしたちよりもはるかに大きなお方です。わたしたちはちっぽけな存在です。それにもかかわらず、わたしたちは自分の小さなはかりをもって神さまをはかり、神さまのなさが自分の思いにかなわないと知ると、不満を抱くのです。そして神さまに背き、神さまから逃げ出そうとするのです。

神さまのみ心は人間の思いをはるかに超えていることを覚えましょう。神さまのなさることはい

つも間違いがないことを知しましょう。いかなる時にも神さまに従う人こそ、真に幸いな人であることを覚えましょう。

わたしたちは神さまのみ手から逃れることはできません。どこに行っても、神さまはわたしたちとともにおられます。それはわたしたちにとって、たいへん幸せなことです。神さまはわたしたちによいことしかなさらないからです。わたしたちは自分の愚かさによって、しばしば神さまのよきみ心を知らないままに、神さまに背きます。けれども神さまはそのように愚かなわたしたちをも、忍耐強く恵みの道に導いてくださるのです。

(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] 詩編 139編7節

どこに行けば あなたの霊から離れることができよう。
どこに逃れれば、御顔を避けることができよう。



〈ねらい〉

神様は、ぼくたち私たち一人ひとりを愛しておられます。ぼくたち私たちの思いを遥かに超えて導いてくださる、神様の御心に喜んで従うことについて、一緒に考えたいと思います。

〈展開例〉

みんな、神様に、このことをしなさいと言われたのに、いやだよと言って、自分勝手なことをしてしまったことはないだろうか（聞いて見る……）。

実は今日登場しているヨナさんという人は、神様のメッセージに背いて、全然違う方向に出かけてしまった人でした。

『さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている。』しかしヨナは主から逃れようとして出発し、タルシシュに向かった。ヤッファに下ると、折よくタルシシュ行きの船が見つかったので、船賃を払って乗り込み、人々に紛れ込んで主から逃れようと、タルシシュに向かった。」(1-3)。

ニネベという町には、神様を信じない人々がたくさん住んでいました。ですから、神様はヨナさんに、「そこに行って、神様のお話をしなさい」と言われたのですが、ヨナさんは、ユダヤ人以外の人たちに神様のお話をするのが嫌で、タルシシュという町の方に逃れて行きました。

ところがです。神様は何でも知っておられます。「主は大風を海に向かって放たれたので、海は大荒れとなり、船は今にも砕けんばかりとなった」(4)。

ヨナが乗った船が大嵐にあったのです。船の乗

組員たちは、気が気ではありません。このままでは、みんな溺れて死んでしまいます。そこで、誰のせいで、こんな大変な目にあったのか、くじを引くことにしました。当時、人々は、くじによって神様の御心がかかると信じていたのです。

「さて、人々は互いに言った。『さあ、くじを引こう。誰のせいで、我々にこの災難がふりかかったのか、はっきりさせよう。』そこで、くじを引くとヨナに当たった」(7)。

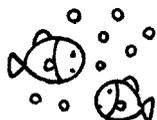
しかし、ヨナは自分では、なぜこんな大嵐が起ったのか知っていたのです。「ヨナは彼らに言った。『わたしはヘブライ人だ。海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者だ。』人々は非常に恐れ、ヨナに言った。『なんということをしたのだ。』人々はヨナが、主の前から逃げて来たことを知った。彼が白状したからである。」(9-10)。

神様は、ぼくたち私たちに、一番良い道を用意してくださっているのです。でも、それが分からずに、自分勝手な道を行こうとしてしまうこともあります。

神様の御心は、ぼくたち、私たちが、どんなにそれを否定しても、何をしても必ず実現します。しかも、それがぼくたち私たちにとって、一番良い道なのです。神様を信頼していきましょう!!

〈お祈り〉

天の父なる神様。ぼくたち私たちの、思いを遥かに超えて、一番良いことをしてくださる神様に信頼して歩むことができるようにしてください。主イエス・キリスト御名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

神の御心である救いの恵みは世界に及ぶ。主なる神の御心に喜んで従おう。

〈展開例〉

今日はヨナさんのお話です。ヨナさんは神様のことばをみんなにお話しする預言者でした。

あるとき、ヨナさんは神様からお告げを受けます。「ニネベに行って神様のことを語りなさい」という神様のご命令でした。

ニネベという国は、その頃たいへん豊かな町でしたけれども、神様のことなどみんな忘れてしまっていて、自分たちの好き勝手なことばかりしていました。悪いこともいっぱいしていました。

神様はそんな悪い町ニネベをそのままにしようとはされず、ニネベという町と人々を救おうとお考えになったのです。

でも、ヨナさんは神様のこのご命令を不満に思いました。「どうしてあんなに悪いことをしているニネベの人々のために神様のみことばを伝えなければいけないのだろう?」「どうして神様はニ

ネベの町を救いたいのだろう?」ヨナさんにはどうしても分かりません。そしてヨナさんは、神様の命令に従わないで、逃げてしまいました。港に行き、ニネベではなくタルシシュ行きの船に乗り込みました。ヨナさんは遠くへ行行って、神様から隠れようとしたんですね。

え! 神様から隠れようとした? そんなことできるのでしょうか? できませんよね。神様はちゃんと知っておられます。私たちがどこでなにをしているのかちゃんと全部知っておられます。

神様は大嵐によってヨナさんの船を襲わせました。神様の命令に背いたヨナさんは、船の人たちに手足を縛られて嵐の海へ投げ込まれました。

さあ、ヨナさんは、どうなるのでしょうか? それはまた来週のお楽しみ。

〈お祈り〉

神様。あなたはわたしたちのすべてを知っておられ、いつも見守ってくださいます。あなたから逃げることをせずに、あなたの命令に従うことができますように。アーメン。

〈ワーク〉

○聖書を開きましょう

- ①神さまがヨナに行くように命じた都の名前は?
- ②ヨナが乗った船の行き先はどこ?
- ③海が大荒れになったとき、ヨナはどこで何をしていましたか?
- ④海はどのようにしたら静まりましたか?

【答え】①ニネベ ②ヤッフア ③船底で寝ていた ④ヨナを海にほうり込んだ



〈ねらい〉

神様の御心は人間の思い・考えをはるかに超えていることを知り、喜んで従いたいと思うことを学ぶ。

〈今日の聖書〉**★ヨナ書1章**

- ①聖書を読みましょう。
- ②物語を整理しましょう。

ヨナは何をしていた人ですか？
神様はヨナに何を命じましたか？
ヨナはどこへ向かいましたか？
神様はそれに対してどうされましたか？
乗組員たちは、ヨナをどうしましたか？
すると、海はどうになりましたか？

〈展開例〉

今日から、ヨナさんというひとのお話を聞きます。旧約聖書の後ろのほうに、ヨナ書という短い物語があります。

ヨナさんという人は「預言者」でした。神様のことばを「預かる」お仕事ですね。そんなヨナさんなのに、どうして、神様のことばに、すぐ従わなかったんだろう？ きっと、理由があったよね。
実は、ニネベの町の人々は、神様を信じていま

せんでした。偽物の神様を信じていたんだね。

だからヨナは、その土地へ行くことを嫌がりました。ヨナは、「神様に選ばれた民・イスラエルだけが救われるべきだ」と思っていたのです。だから、神様の優しい気持ちに反発したんだね。

みんなも「自分の思いや考えと、神様が喜ぶことがちがう」というときがあると思います。どうしてこんなことが起こるんだろう？ 自分ばかりつらいことがある。そんなふうにどんどん気持ちが暗くなるかもしれません。

だけど、神様のお考えというものは、そういう小さな私たち人間を、はるかに超えているのです。

ヨナは結局、神様が放った大嵐に遭い、船乗りに海へ投げ込まれてしまいます。ヨナはどうなってしまうのでしょうか？ それはまた、来週のお話。

私たちは、神様から隠れることはできません。いつも、共にいらっしやってくださいます。それは、とてもしあわせなこと。たくさん間違えてしまう私たちだけ、そんな私たちでも、神様が助けてくださいます。

〈祈り〉

神様。たくさん間違える私たちを、どうぞ恵みの道へお導きください。



対話の手掛かりとして……。

- ①ヨナは、預言者という務めを与えられながらも、神さまの命令に従うことが嫌でした。私たちも神さまを信じていながら、御言葉から離れたいという誘惑がいつも襲ってきます。そのような経験について語り合うことができないでしょうか。例えば、毎週日曜日に教会に行くことの中にも、どこか本当に喜んでいない自分があるかもしれません。私はもっと他のことがしたいのにというふうに……。しかしその一方で、神さまの声が聞こえてくるのも事実です。自分の声と神さまの御声の狭間で葛藤している子どもたちは思っている以上に多いのです。
- ②そのような子どもたちに、「それはダメ」とか「そんなのは神さまの子どもではない」というふうに一方的に裁いても何の解決にもなりません。そうではなく、既に自分の心の隅っこで響き始めている神の言葉に対して、もっと肯定的に見つめ直すことへと導いてあげることはできないでしょうか。神の言葉と自分の心がぶつかり合っているということは、大きな恵みだと思ふのです。
- ③神さまからの逃亡を企てたヨナでしたが、結局は、神の命令どおり、ニネベに行くこととなります。この出来事をおして、ヨナは神の言葉に捕らえられた経験をするのです。神の言葉から逃れられないというのは、決して恐ろしいことではありません。神さまに捕らえられるというのは、確かに自分が思っていたような道を進むことができないということになるかもしれませんが、それはイコール不幸ではないのです。私も牧師になりたいと思って、牧師になったわけではありません。しかし、神さまに捕らえら

れ、召されて歩んでいるこの道を不幸だとは思っていません。牧師として働かなければ知り得なかった神さまの恵みをたくさんいただいていることに感謝しています。そしてこれからも祝福して下さると確信しています。教会学校の教師の方たちの中にも、かつて自分が想像もしていなかった道に導かれ、そこで与えられた恵みを語ることはできるのではないのでしょうか。信仰の先輩たちがどのように生きてきたのか、その証しを聞くことを、きっと子どもたちは楽しみしていると思うのです。

- ④神さまと自分の思いがぶつかるところで、神さまに従うことへと導かれればよいのですが、背を向けて離れ去ってしまうこともあります。その結果、ヨナが嵐の海に投げ込まれたような苦難を経験することもあるでしょう。しかし、それは神さまに背いたがゆえの罰や裁きというよりも、自分とは何者であるのかを思い起こさせるためのものです(9節)。そして、私たちの神さまは、ヨナを見捨てられなかったように、罪深い私たちをも救い出してくださるお方であることを知るようになるためです。この神さまを大きな御手の中で、悔い改めに導かれ、再び神さまの御心を喜んで生きる者へと変えられていくのです。
- ⑤ヨナの姿は、不思議にも自分の姿と重なり合うことが多く、子どもから大人まで喜んで読まれる聖書物語のひとつです。しかし、ヨナと自分は似ているという共感だけに留まらず、そんなヨナや自分に、神さまはどのように関わってくださり、何をしてくださったのかということに心を向けるならば、更に新たな発見があるはずですよ！



ヨナの祈り。不従順な者を赦し、立ち上がらせてくださる神をほめたたえよう。

〈ヨナの救出〉

海に投げ込まれたヨナは、死んだと思いきや、何と主なる神の導きにおいて奇跡的に救出されます。その救出方法は、常識では考えられない救出方法でありました。主なる神は巨大な魚にヨナを呑みこませることに於いて救出されるのでありました。この巨大な魚が、クジラであるかどうかは分かりません。大切なことは、この魚がどのような魚であるかではなく、巨大な魚を通して主なる神がヨナを守り導いているということを押さえなければなりません。そして、死の世界というべき海底に深く沈んでいくところを、ヨナは、巨大な魚の腹の中に守られ、祈りに導かれていくのであります。

〈ヨナの祈り〉

ヨナは、三日三晩魚の腹の中に奇跡的に生存していました。この魚の腹の中は、ヨナにしてみれば暗闇でしたが、祈りの時、神へと心を集中できる空間、時間でありました。陰府とは、死者の行く世界（ヨブ3:17-19を参照）であり、そこでは礼拝も祈りもささげられることがなく、神との関係が一切断たれる（詩編88:4-13, 115:17を参照）ところでありました。その中から、主なる神が奇跡的にヨナを助けてくださり、ヨナを滅びの穴から引き上げてくださったと、ヨナは感謝の祈り（2-10）をささげます。

「わたしは思った。あなたの御前から追放されたのだと……」（5）。このようにヨナは、自分が海に投げ込まれて、もはや生きるはずはないと

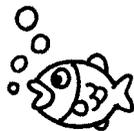
思っていたことが分かります。けれども、ヨナは、主の力において死から生へと導かれたのであります。そのことをヨナは、知ったのであります。ここでは、主への感謝が述べられていると同時に、罪の自覚を表明しています。罪の自覚と主の赦しの感謝において、ヨナは「わたしは誓ったことを果たそう」という決意をしています。つまり、ヨナは、「立ち上がらせてくださる神の働き」を知ったのであります。

私たちの信じている主なる神は、不従順な者を赦し、その不従順な者を立ち上がらせてくださる神です。それが主の救いです。主の救いは、抽象的なものではなく、不従順な者にもなすべきことを気づかせてくださるといった具体的な、神の働きがあるのです。その中で、ヨナは「救いは、主にこそある」（10）と信仰告白したのであります。

私たちも、罪人ゆえに不従順な者ではありますが、主が具体的なことを通して立ち上がらせてくださるのです。私たちの信じる神は、この私を立ち上がらせてくださる神であることをほめたたえるものでありたいと思います。

さて、こうして話は振り出しに戻ります。振り出しに戻るというより、主なる神が導きだした結果であり、神が決めた通りであった。ヨナは、自ら死に値することを自覚していて、しかも死からの救出を主に願って聞き入れられたのです。

救いにふさわしくない者をも救い出す神の憐れみを体験したヨナは、もし主がニネベの町に対して同じ憐れみを示すならば、それを理解できたはずであります。しかし現実にはどうであったでしょうか。3章では、ヨナは神からの使命を果たし、4章では不平を洩らすことになるのであります。（潮田 祐）



テキスト ヨナ書 2章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問21

〔単元のねらい〕

ヨナ書2章は、神のみ手によって死の淵から救い出されたヨナがうたった、実に美しい讃美の歌である。イエス・キリストの救いに招かれた者たちは、皆ひとしくこの歌を歌うことができるであろう。旧約聖書の中でもその深みと豊かさにおいて比類がないと評されるこの祈りを、わたしたちも心深く味わいたい。そして、ともに声を合わせて神をほめたたえたい。

「救いは、主にこそある」

ニネベに行くようにとの神さまのご命令に背いてタルシシュ行き船に乗り込んだヨナは、船が砕け散るかと思われるような大きな嵐にいました。船の乗組員たちは、この大きなわざわいの原因がヨナにあることがわかると、ヨナを海に投げ込みました。

ヨナはこのとき、自分の命はこれで終わってしまうと思ったでしょう。潮の流れに巻き込まれ、高波が次々と頭の上を越えていきます。大水が喉元にまで達して、海藻が頭に絡みつきます。深い、果てしない海の真ん中で死んでいかなければならない。どんなに恐ろしかったことでしょう。

そして、ヨナは神さまが自分を海に投げ込まれたことを知っているのです。神さまのみ言葉に背き、み前から逃げ出した罪の刑罰として、今自分は息絶えようとしているのだということを知っているのです。

けれども、この大きな恐れの中で、ヨナは神さまのみ名を呼びます。神さま、どうかわたしの命を救ってくださいと祈り願います。すると、神さまは彼の祈りを聞いてくださったのです。神さまは大きな魚にお命じになって、ヨナを呑み込ませます。ヨナの命を助けるためです。ヨナの乗った船を嵐にあわせたのは神さまです。しかし、ここでヨナの命を救うために大きな魚を備えてくださったのも神さまです。

ヨナは自分を呑みこんだ魚のお腹の中で、神さ

まをほめたたえます。今朝の2章は、このときにヨナが魚のお腹の中でうたった感謝と讃美の歌です。

ヨナはこの時の経験によって、神さまがほんとうに神さまのみ名を呼び求める者を救ってくださるお方であることを知ったのです。死に直面するような危機の中で、神さまはみ名を呼ぶ者を助けてくださる。喉元まで襲っている大水から助け出してください。その救いの恵みを身をもって味わい知ったのです。

ヨナは三日三晩魚のお腹の中にいて、それから陸地に吐き出されました。神さまは彼の命を守られたのです。でも、考えてみると今ここで讃美の歌をうたっているヨナは、まだ魚のお腹の中にいます。そこは真っ暗闇であったと思います。荒れ狂う海も恐ろしい場所ですが、この真っ暗闇の場所も恐ろしかったのではないのでしょうか。

しかし、ヨナはこの場所で救いの喜びに満たされています。神さまの恵みを知った人は、真っ暗闇の中でも喜ぶことができます。

わたしたちの日々にも時につらいこと、悲しいこと、恐ろしいことが起こります。大きな恐れや不安に押しつぶされそうになることがあるかもしれません。

けれども、わたしたちは神さまのみ名を呼ぶことができます。神さまに助けを求めることをゆるされています。そして、神さまはみ名を呼び求める者を必ず助けてくださいます。真っ暗闇と思え

るような状況の中でも、そこに必ずみ手を伸ばしてくださいませ。苦しみから逃れる道を備えてくださいませ。暗闇の中に光がさし込みます。それゆえに、わたしたちは暗闇の中でも讃美の歌をうたうことができるのです。

わたしたちの命を支配しているのはわたしたち自身ではなく、造り主なる神さまです。神さまはわたしたちを憐れみ、わたしたちを救し、わたしたちに最善をなして下さるお方です。それゆえわたしたちは安心して、この命を神さまのみ手にゆだねることができるのです。

イエスさまはご自分が十字架にかかれることを、神さまがヨナを救って下さったことになぞらえてお語りになりました（マタイによる福音書12章3節）。ヨナは三日三晩魚のお腹の真っ暗闇に置かれ、死の中で命を得ました。そのことはイエスさまがわたしたちの罪の身代わりに十字架に

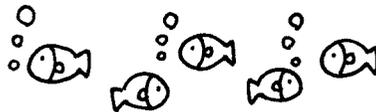
死なれたこと、十字架の恐れと苦しみをその身に負われ、陰府の底にまでくだっていかれ、そして三日目に死をうち破ってよみがえられたこと、この十字架と復活のみわざによってわたしたちを死から命に移しかえて下さったこと、この先取りであつたのです。

イエスさまが死んでよみがえって下さったゆえに、わたしたちは罪の苦しみ、死の恐れからときはなれています。わたしたちが深い闇の中に置かれている時にも、イエスさまはわたしたちとともにいてくださいます。大きな苦しみやわざわざいの中でみ名を呼び求める時、イエスさまは必ず答えて、助けてくださいます。

神さまに命を守られたヨナは「救いは、主にこそある」（10節）とうたいました。イエスさまの十字架とよみがえりによって、わたしたちは「救いは、主にこそある」ことを鮮やかに知ることをゆるされています。（木下裕也）

[今週の暗唱聖句] ヨナ書 2章10節後半

救いは、主にこそある。



〈ねらい〉

神様は、ぼくたち私たちが心から愛しておられます。そして、ぼくたち私たちがどんなに失敗をしたとしても、必ずやり直すチャンスを与えてくださいます。その神様の愛について、御言葉に聞きましょう。

〈展開例〉

さて、海の中に投げ込まれてしまったヨナさんでした。本当ならば、このまま溺れ死んでもおかしくはなかったのに、神様は実に不思議な方法でヨナさんを助けてくださったのです。それは、魚にヨナさんをのみ込ませるといことでした。

「主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。」(1)

この魚は何だろう？ 皆どう思う？ 人間をのみ込むことができるのだから、クジラかな？ よく分からないけれども、神様は、大きな魚を送って、ヨナさんをのみ込ませたのです。そして、胃袋の中で消化させないで、実に不思議な方法で、三日間、守られたのです。

不思議です。神様の御手の中で、この三日間が神様の御前での祈りの時となりました。

「ヨナは魚の腹の中から自分の神、主に祈りをささげて、言った。苦難の中で、わたしが叫ぶと／主は答えてくださった。陰府の底から、助けを求めると／わたしの声を聞いてくださった。」(2-3)

ヨナさんは、自分が海に投げ込まれたときに、きっともう駄目だと思ったでしょう。実際に、「わたしは思った／あなたの御前から追放されたのだ

と。生きて再び聖なる神殿を見ることがあろうかと。大水がわたしを襲って喉に達する。深淵に呑み込まれ、水草が頭に絡みつく」(5-6)と祈っているのです。そして、命が守られたときには、「わたしは山々の基まで、地の底まで沈み／地はわたしの上に永久に扉を閉ざす。しかし、わが神、主よ／あなたは命を／滅びの穴から引き上げてくださった。息絶えようとするとき／わたしは主の御名を唱えた。わたしの祈りがあなたに届き／聖なる神殿に達した。偽りの神々に従う者たちが／忠節を捨て去ろうとも、わたしは感謝の声をあげ／いけにえをささげて、誓ったことを果たそう。救いは、主にこそある」(7-10)と祈りました。

ヨナさんは、本当に神様にあって、わたしの命は守られた、神様にあって、わたしの命は生かされているのだ、その確信に立つことができるようになったのです。そして、こう祈ると、神様はヨナさんを陸地に吐き出しました。(11)

ぼくたち私たちも、失敗してしまうことがたくさんあります。ああすれば良かったと思うこともたくさんあります。でも神様は、ぼくたち私たちがどんなに失敗をしても、やり直すチャンスを与えてくださるのです。ヨナさんのように、失敗をしても、悔い改めて、もう一回立ちあがっていきましょう！！

〈お祈り〉

天の父なる神様。私たちは失敗することがありますが、あなたは、もう一回やりなおすチャンスを与えてくださいます。感謝します。主イエス・キリスト御名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

ヨナの祈り。不従順な者を救し、立ち上がらせてくださる神をほめたたえよう。

〈展開例〉

ニネベに行くはずだったヨナさんは、神様のご命令に背いて、ぜんぜん方向が違うタルシシュ行きの船に乗り込んでしまいました。そして、その船は大嵐にまきこまれてしまいました。原因がヨナさんにあることを知った船の人たちは、ヨナさんの手足を縛って、ヨナさんを嵐の海へほうり投げました。ヨナさんは嵐の海に投げ出されました。

絶体絶命です。死ぬと思ったでしょう。

けれども、ヨナさんは、神様の命令に背いた刑罰として海に投げ出されたことを知っていました。その時、心から「神様、助けてください」と、「私を救ってください」と、ヨナさんは祈ったのです。

神様は大きなお魚にヨナさんを飲み込ませました。神様はヨナさんを救ってくださったのです。

ヨナさんは神様のご命令に背いたことを反省し

ました。そして、心から感謝しました。

お魚のお腹の中は、真っ暗だったでしょうね。恐いでしょうね。でも、ヨナさんは祈りを聞いて助けてくださった神様に感謝の気持ちでいっぱい讃美の歌をうたっていました。

真っ暗の中でも、神様のお恵みで救われた人、お恵みを受けた人は喜ぶことができます。

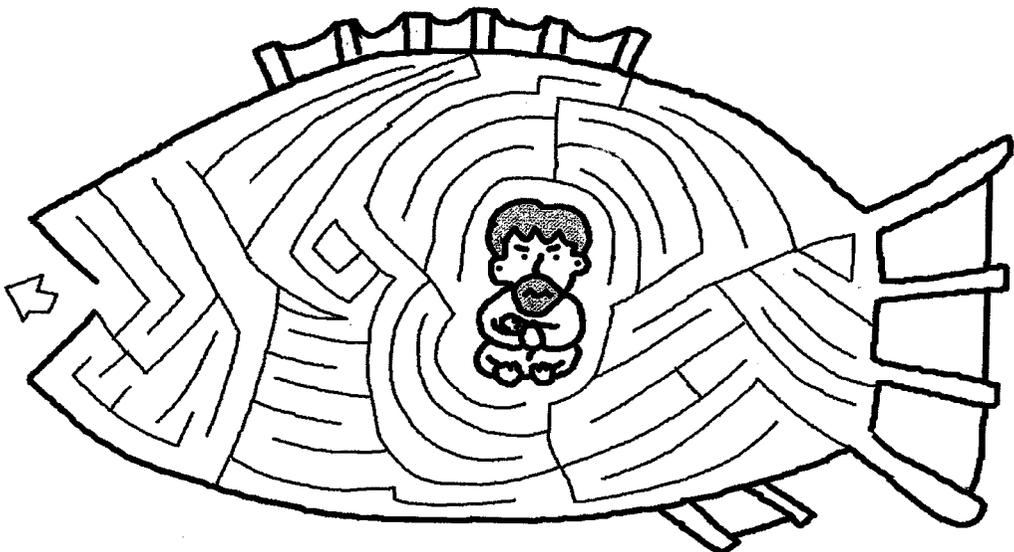
私たちにもつらいときや泣きたくなるときがありますね。そんなとき、神様はみなさんが「助けてください」「守ってください」とお祈りすることを待っておられます。神様は、ヨナさんのように、必ず私たちを助けてくださいます。真っ暗な中から救い出してくださいます。ヨナさんを助けてくださった神様は、今も私たちの祈りを聞いて、助けてくださるのです。感謝しましょう。

〈お祈り〉

神様。ヨナさんの時代も、今の時代も、私たちが救い出してくださいる神様。一生懸命にお祈りします。この一週間も私たちと一緒に歩いて守ってください。アーメン。

〈やってみよう〉

○ヨナを外に出しましょう。



〈ねらい〉

ヨナの祈りから、神様の用意してくださる救いに感謝することを学ぶ。

〈今日の聖書〉**★ヨナ書2章**

①聖書を読みましょう。

②物語を整理しましょう。

神様は海に投げ込まれたヨナに何を用意されましたか？

ヨナはどうなりましたか？

どのくらいの間、そうしていましたか？

魚はどうしてヨナを吐き出したのですか？

〈展開例〉

先週から、ヨナさんのお話を聞いています。今日は、前回の続き。

海に投げ込まれたヨナさんは、絶体絶命でしたね。手足を捕らわれて海に投げ込まれたら、死ぬしかないと思うでしょう。とても怖かったと思います。そんなヨナさんに、神様は大きな魚を用意してく

ださいました。ヨナさんが死なないように、その魚に命令して、ヨナさんを飲みこんでもらったのです。

そうすることによって、ヨナさんは助かりました。

そこで、ヨナさんが神様にささげたお祈りが、今回のメインです。考えてみると、魚のおなかの中に居るヨナさん、不安な気持ちにもなるのではないのでしょうか。真っ暗な中で、ただひとりぼっちだったら。

だけど、ヨナさんのお祈りに注目しましょう。喜びで満たされています。

私たちは、神様に支配されています。神様は、私たちを憐れみ、たいせつにしてください方です。だから私たちも、何も見えない、わからないときでも、神様に安心して任せることができるのです。

〈祈り〉

神様。いつも私たちを助けてくださってありがとうございます。暗闇の中に居ても、あなたを信頼することができますように。アーメン。



対話の手掛かりとして……。

- ①神さまに祈ることは息をすること、呼吸をすることです。普段私たちが、呼吸をしないと苦しくなり、命の危機を感じます。それと同じように、祈ることは、信仰生活において欠かすことができない大切なものなのです。でも、なかなかお祈りができなかったり、どう祈っていいのか分からないということがあります。前は、御言葉から離れたヨナの姿を見ましたが、私たちは御言葉だけではなく、祈ることにおいても神さまから離れてしまうことがあるのではないのでしょうか。今回はヨナの物語をとおして、「祈り」について考えてみましょう。
- ②ヨナは神の言葉から遠くに離れようとしてました。しかし、その結果どうなったのでしょうか。嵐の海に投げ出されて、死ぬほどの経験をしたのです。でもそこでヨナは何をしたのでしょうか。神さまに対して、何でこんな目に遭わせるのだと、怒りを覚えたのでしょうか。もう神さまなんか知らないと益々背を向けたのでしょうか。そうではありませんでした。「自分の神、主に祈りをささげた」のです(2、8節)。「困ったときの神頼み」という言葉があり、これを否定的に理解する人もいます。確かに自分の都合のいい時だけ、お祈りすることはよくないことでしょう。でも、「困ったときの神離れ」ということも、神さまは悲しまれます。私たちには祈ることができない弱さがありますが、様々な出来事をおして、私たちの心が再び、神さまの方に向き、祈ることへと促されていくのです。
- ③お祈りをしても、神さまは何も聞いてくださらないという経験が誰にでもあると思います。さすがにこんなところにまで、神さまは来てくださらないと諦めてしまうこともあるでしょう。

でも神さまは、苦難や陰府の中にあっても、死を前にしても、ヨナの祈りを聞いてくださり、答えてくださるお方であることが分かります(3、7、8節)。私たちはひとりぼっではありません。どんなところにも神さまはおられます。だから安心して「神さま」と呼ぶことができるのです。

- ④私たちの祈りに対して、神さまが答えてくださるというのは、具体的にどのようなことなのでしょう。今回のテキストの最後11節には、「主が命じられると、魚はヨナを陸地に吐き出した」とあります。次の3章では、ヨナが、神さまから命じられたニネベの地で宣教活動を始めることになるのです。つまり、ヨナが大地に吐き出されたということは、自分がこれから歩むべき道が示されたということです。ヨナは神に悔い改めの祈りをささげ、赦しを確信し、新しく歩むべき地に押し出されていったのです。しかも神さまは私を救ってくださったという感謝を携えて。私たちも祈ることによって、新しく歩む大地へと送り出されます。闇から光の射す方へ、死から命へと導かれています。祈りを聞いてくださる神さまが、私たちを新しい存在へと変えてくださるのです。
- ⑤神さまや信仰について分からないことや疑問に思う子どもたち多いと思います。自分は何も分かっていないから、信仰告白する資格はないと思いつていることも多いのです。だから、お祈りをする資格もないのだと……。しかし、そうではありません。神さまのことが分らなければ、神さまに祈ったらよいのです。「あなたのことを教えてください」「わたしを助けてください」と。その先には、「救いは、主にこそある」(10節)と主をほめたたえながら歩むことができる新しい大地が広がっています。

主なる神は悔い改めを喜ばれる。
罪人を赦してくださる神をほめたたえよう。

〈ヨナの服従〉

「救いは、主にこそある」(10)と信仰の告白をしたヨナ。そのヨナに再び主の命令が下ります。復活の主イエスが裏切ったペテロに、「わたしの羊を養いなさい」と言われた言葉が重なり合います。主が言われたことを直ちに行うという服従が大切であります。そして、同じような失敗(過ち)を繰り返さないことも大切です。

〈ニネベでの悔い改め〉

ニネベの町は、12万人以上(4:11)と記されていることから、当時の大都会でありました。また、一巡するのに三日かかったと記されております(3)。ヨナが宣教するのは大変なことでありました。しかしヨナは、「あと40日すれば、ニネベの都は滅びる」と宣べ伝え、断食を呼びかけました。

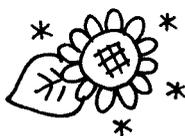
40日という限定は、ノアの洪水時の降水期間(創世記7:4)、モーセのシナイ山滞在期間(出エジプト24:18)、エリヤのホレブ巡礼(列王上19:8)などがあり、ある神が定めた一定の期間を示しております。そして、40日で滅びるとするのは、ソドムとゴモラと重なっており(創世記19:21、アモス4:11)、巨大都市に対する悪のはびこりが強調されております。

その中でヨナは、滅亡の預言をし、断食を彼らに呼びかけるのであります。断食は、悔い改めを示す行為であり、神への立ち帰りの象徴でもあります。常識で考えるならば、こんなにひどい町が

ヨナの一言で悔い改めるだろうか、という思いが生じてくるかもしれません。しかし、不思議なことに、ニネベの人たちは、船乗りのように神を信じ、それを具体的に表し、ヨナが命令した通りに、粗布をまとい、断食をして悔い改めへと導かれていくのであります。彼らは、不思議なしや奇跡を見て悔い改めたのではなく、ひとえにヨナが語った言葉において悔い改めたのでした。まず民衆が、ヨナの言葉を受け入れ、ついで王が彼の言葉を受け入れ、さらに王が布告をし、動物までも断食を命じられるのであります。動物までもということで、ニネベのすべてが神に悔い改めるという行動になっていることを示しております。さらにこのことが強調されているのが、「ひたすら神に祈願せよ(原語は「叫べ」)(8)という言葉であります。単に祭儀の外側だけではなく、神に向かって助けを徹底的に求めるという姿勢と信仰が強調されております。

このような彼らの熱心な業に対して、主なる神はどのようにされたでしょうか。「神は彼らの業、彼らが悪の道を離れたことをご覧になり、思い直され、宣告した災いを下すのをやめられた」(10)と記されております。神は、断食をしたから、粗布をまとったからではなく、悪を離れ、神に向かったということで思い直され、やめられたのです。

ここで大切なことは、神が思い直されて、やめられたということではなく、神が愛をもって彼らを赦されたことであり、異邦人の彼らを赦し、喜ばれたということで、私たちの信じる神は、悔い改める者を赦し、喜ばれる神であられるということ信じ、主をほめたたえましょう。(潮田 祐)



テキスト ヨナ書 3章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問67

〔単元のねらい〕

「主なる神は悔い改めを喜ばれる。罪人を赦してくださる神をほめたたえよう」。単元目標の教えと勧めにアーメンである。この箇所には面白い筋書きがあって、それに注目しながら物語りたい。逃避行を思い直したヨナが伝道すると、ニネベの人々は思い直して断食し、災いをくだすことを神も思い直される。むしろニネベの人々の罪を赦そうとお思いの神が、まず預言者ヨナを悔い改めに導き、更にニネベの人々をも悔い改めに導かれた。この神をほめたたえよう。

「悔い改めに導く神」

教会に誘いましょう。礼拝に連れて来ましょう。そんなふうに教会学校の先生から言われたとき、あなたは誰を誘いますか。仲の良い友だちでしょうか。誘いやすそうで、誘いにくいかもしれません。それとも、いつも独りぼっちの誰かでしょうか。誘いにくそうで、誘いやすいかもしれません。それでは、自分にとって一番嫌いな人はどうでしょう。絶対誘いたくない、連れて来たくないと、思ってしまうかもしれません。今日は、そんな思いを抱いた人が登場します。

大海原で今にも溺れそうな人が、叫び声を上げています。「神さま、あなたはわたしを深い海に投げ込まれました。潮の流れがわたしを巻き込み、波また波がわたしの上を越えて行きます。わたしは、あなたの御前から追放されました。生きて再び国に帰ることも、礼拝することもないでしょう」。その声の主は、ヨナその人です。イエス様ご誕生から、はるか800年も昔に働いた預言者です。預言者とは、神さまの言葉をお預かりする者、という意味です。御言葉を聴き取ったら、それを告げ知らせる働き人です。

そんな大切な働きをする人が、なぜ溺れかかっているのでしょうか。しかも、神さまご自身によって海に投げ込まれたのは、なぜでしょう。それは、このヨナという人が、神さまの言葉をお預かりしたまま、自分の心の中にしまい込んでいたからです。「さあ、大いなる都ニネベに行って、これに

呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている」。この御言葉を聴き取ったのに、ヨナは告げ知らせることを嫌がって、船ののって逃げ出したのです。逃げた理由は、イスラエルの神さまの言葉を、アッシリアという敵の国の人々に伝えるのが嫌だったからです。「イスラエルの神があなたがたに仰せになる。あなたがたの悪は、神の耳に届いている。あなたがたの罪は、神の目に明らかである」。そんなことを告げようものなら、きっと殺されてしまうに違いない。彼はそう思ったのです。

しかし、ヨナに御言葉をお預けになった神さまは、それを伝えさせずにおかない方でした。彼をつかまえて海に放り込み、彼が祈るのを待っておられました。命の危険のなかで、彼が助けを求めて祈ると、神さまは巨大な魚に命じてヨナを呑みこませ、三日三晩のあいだ魚の腹の中で、ヨナの思いを直そうとなさったのです。「わたしの主なる神さま。溺れ死にそうだったわたしを、あなたは引き上げてくださいました。わたしは感謝をささげて、あなたに従い直します。あなたこそが、わたしの救いだからです」。ヨナが思い直したこと、彼が悔い改めたことを神さまはお認めになりました。そして巨大な魚に命じて、彼を海岸に吐き出させたのです。こうしてヨナは、預言者としてもう一度、スタートラインに立たせていただいたのです。

「さあ、大いなる都ニネベに行って、わたしが
お前に語る言葉を告げよ」。神さまのご命令を改
めて聴き取って、預言者ヨナは、今度はすぐに従っ
て旅立ちます。イスラエルの国から北へ300キロ、
東へ600キロ、ユーフラテス川を渡り、チグリ
ス川を越えて、アッシリアの国の都ニネベに着きま
す。一回りするのにも三日もかかる大きな都に入っ
た預言者ヨナは、神さまからお預かりした御言葉
を叫びながら、一日中告げ知らせて歩くのです。
「イスラエルの神が仰せである！ お前たちの悪は
神の耳に届いている！ お前たちの罪は神の目に
明らかである！ このあと40日もすればニネベの
都は滅びる！」。今にも兵隊がやってきて、取り
押さえられるかも知れない。すぐにも縛り上げら
れ、八つ裂きにされるかもしれない。そんな恐れ
を抱きながらも、思い直したヨナは、命がけで働
きをやり抜きます。預言者を悔い改めに導いた神
さまのご熱心が、彼をそうさせたのです。

するとどうでしょう！ ヨナが思ってもみな
なかったことが起こるのです。何と！ ニネベの人々
が神さまを信じてしまうのです！ 敵の国の人々が、
まるでヨナそっくりに、自分たちの悪い言葉
や行動を思い直し、イスラエルの神さまの前で悔
い改め、身分の高い人から低い人まで粗末な衣を
まとい、断食するではありませんか！ 都の宮殿
にいるアッシリアの王までが思い直し、その座か
ら立ち上がって王衣を脱ぎ捨て、灰の中に座り込
んで都中に断食を呼びかけるではありませんか！
「人も家畜も、何一つ食べ物に口にしてはなら
ない。食べることも飲むこともしてはならない。皆
そろって、ひたすらイスラエルの神に祈れ。思い
直し、おのおの悪を離れよ。悔い改めて、自分
たちの手から罪を捨てよ。そうすれば、イスラエ
ルの神も思い直してくださるかもしれない。アッシ
リアに対する激しい怒りを静めてくださるかもし
れない。ニネベに住むわれわれを滅ぼすことを思
い留まってくださるかもしれない」。

このあと起こったことは、ヨナをさらに驚かせ

ました。ご命令に背いて逃げ出した預言者を赦し
てくださった神さまは、彼の働きを用いて御自分
の民イスラエルを脅かすアッシリアの人々までも
赦してしまわれたのです！ ニネベの人々が思い
直して、罪を捨てて悪から離れたことを御覧にな
ると、イスラエルの神さまも思い直されて、預言
者ヨナを通して告げ知らせた災いを下すことを思
い留まられたのです。

このように、イスラエルの神は、恵みと憐れみ
の神です。人間の罪と悪を、慈しみをもって忍耐
なさり、彼らを悔い改めに導いて、災いをくだす
ことを思い直される神です。しかも、御自分が憐
れもうと思う人を憐れみ、慈しもうと思う人を慈
しむ神です。イスラエルの民だからといって、そ
のまま皆を赦すことはなさいません。アッシリア
の者だからといって、そのまま皆を裁くこともな
さいません。神の前に思い直し、罪を悔い改める
人を、神は赦してくださって、災いを思い留ま
られるのです。ですから、イスラエルの神の御言葉
は、預言者によって全世界に告げ知らされなけれ
ばなりません。神の祝福と警告は、あらゆる人を
悔い改めに導いて救いに与らせる、神の福音な
のです。

預言者は、そのことを思い知らされました。ヨ
ナは、受け入れがたいほどの神さまの憐れみと慈
しみを、目の当たりにさせられたのです。それは、
今ここにいる私たちも体験させられることです。
神さまの御言葉を聴いていながら、それに背いて
しまうような私たちを、神さまは悔い改めに導か
れます。思い直して神さまに従い、福音を告げ知
らせる私たちを用いて、神さまは世の人々を悔い
改めに導かれます。神さまの祝福と警告の御言葉
は、イエスさまの十字架と復活の出来事によって
全世界に広げられ、人々を悔い改めに導いて、赦
しと平安に与らせるのです。罪人を赦そうとな
さる神は、私たちを悔い改めに導いて、この世で
一番嫌いな人さえも悔い改めに導く神なのです。

(二宮 創)

[今週の暗唱聖句]

ローマの信徒への手紙9章15節

わたしは自分が憐れもうと思う者を憐れみ、
慈しもうと思う者を慈しむ。

〈ねらい〉

神様は、ほくたち私たちが心から悔い改めて、もう一回従っていくことを心から喜ばれます。その神様の愛について、御言葉に聞きましょう。

〈展開例〉

さて、ヨナさんは神様のお言いつけに背いて、ニネベに行くことをせず、タルシュシュ行き of 船に乗って出かけました。しかし、神様は、失敗を通してご自身の御心を行われていきます。大嵐の中に投げ出されたヨナさんを魚に呑みこませ、陸地に吐き出されました。そして、もう一回神様のためにお働きをするチャンスを与えられたのです。それは、あのニネベで、神様のために、神様の御言葉を語ることでした。

「主の言葉が再びヨナに臨んだ。さあ、大いなる都ニネベに行って、わたしがお前に語る言葉を告げよ。」(1-2)

ニネベは、12万人以上の人々が住む大きな町でした。(4:11) そしてヨナさんは、その人々に神様のメッセージを語ったのです。神の御言葉を語ったのです。

「ヨナは主の命令どおり、直ちにニネベに行った。ニネベは非常に大きな都で、一回りするのに三日かかった。ヨナはまず都に入り、一日分の距離を歩きながら叫び、そして言った。『あと四十日すれば、ニネベの都は滅びる。』」(3-4)

すると、どうでしょうか。ニネベは異邦人の街です。神様を信じない人々がたくさんいる町です。でも、そんな町ですけれども、「すると、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い

者も低い者も身に粗布をまとった。」(5) 身分の高い人から、身分の低い人に至るまで、皆神様の御前に行いを改めて、そして、悔い改めて、神様を信じていこうとしました。

人々は思いました。「そうすれば神が思い直されて激しい怒りを静め、我々は滅びを免れるかもしれない。」(9)

それを見て、神様は、「神は彼らの業、彼らが悪の道を離れたことを御覧になり、思い直され、宣告した災いをくださのをやめられた。」(10)

ニネベの人々が断食をしたからではないのです。粗布をまとったからではないのです。ニネベの人々が心から悔い改めて、行いを改めたのです。だから、神はニネベを滅ぼすことを思いなおされました。

神様は、自分の罪を認めて、自分が神様に背を向けていたということを認めて、心から悔い改める者を決して見捨てられることなく、心から愛して、心から赦して、そして心から受け入れてくださるのです。どんな人でも、神様の御前に心から悔い改めて従っていく者を、神様は愛してくださるのです。ほくたち私たちも、神様の御前に心から悔い改めて、従っていきましょう！！

〈お祈り〉

天の父なる神様。あなたは、ほくたち私たちの悔い改めを喜んでくださるお方です。心から悔い改めることができるように導いてください。主イエス・キリスト御名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

ヨナを悔い改めへとみちびかれた神は、そのヨナによって更にニネベの人々を悔い改めへと導いてくださった。悔い改めを喜んでくださる神をほめたたえよう。

〈展開例〉

○神様の御言葉に従わず、神様から逃げ出したヨナでしたが、神様はヨナを見捨ててしまうことなく、大きな魚の腹の中で神様に祈りをささげる時を与えてくださいました。なぜ神様はヨナを海の中で溺れるままにはっておかれなかったのでしょうか。

→神様はヨナを深く愛してくださっていたので、神様に祈りをささげ悔い改める時を与えてくださった。神様はニネベの人々を救うためにヨナを用いようとして計画なさっていた。

○悔い改めたヨナに神様は何を求められましたか。

→もう一度「ニネベに行って、神様の言葉を宣べ伝えるように」求められた。(ヨナにニネベの人々を悔い改めへと導く役目を与えられた。)

○ヨナは神様の御言葉を聞いて、今度はすぐにニネベの町に行きました。最初に神様の御言葉に従わなかったヨナと何が変わったのでしょうか。

→ニネベに行きたくないという気持ちは同じ。(ニネベはイスラエルにとって敵国。ニネベの人々を助けたいという気持ちはヨナには最初も今度もなかった。)

ただ、罪深い自分を助けてくださった真の神様の御言葉に従いたかっただけ。

○ニネベの人々はヨナの言葉を聞いてどうしましたか。

→すぐにヨナの言葉を聞き入れ、神様を信じ、悪の道を離れ、神様に祈りをささげた

○なぜニネベの人々はすぐに悔い改めることができたのでしょうか。

→神様はヨナと同じようにニネベの人々も愛していただき、ニネベの人々が悔い改めるように導いてくださったから

○新約聖書の中でイエスさまがこのニネベの人々の悔い改めについて語っておられる箇所があります。読んでみましょう。

→マタイによる福音書12章41節

〈祈り〉

神様。罪を犯す私たちを赦していただき、何度でも神様に立ち返らせてくださることを感謝します。神様がどんなときも私たちを見てくださることを忘れず、神様に従っていくことができるようにしてください。



対話の手掛かりとして……。

①主の言葉が再びヨナに臨みました（1節）。

神さまはヨナにお命じになられた御言葉を、もう一度告げられます（ヨナ1:2）。神さまは、わたしの使命に再び生きようと、私たちを立ち上がらせてくださるのです。しかも神さまは、ヨナを別の道に召したわけではありません。初めから決めておられた道へ招かれるのです。私たちの人生にも、多くの失敗があり、挫折があります。そこで立ち上がるのできないほどに、倒れ込んでしまうこともあるでしょう。この道は、もともと自分には向いていなかったのだと、別の道に行くこともあるかもしれません。けれども、もう一度、かつて自分が失敗した同じ道へと招かれることもあるのです。再び同じ道を歩み出した時に、「自分はこの道でちゃんとやっていけるのだろうか」「また失敗しないだろうか」という不安は尽きないかもしれません。しかし、それにも勝って、自分を再び立ち上がらせてくださった神さまの恵みにいつも感謝しながら歩むことができるのです。ニネベに向かったヨナの心の中には、「救いは、主にこそある」（ヨナ2:10）という喜びの歌がいつも響いていたに違いないと思います。

②さて、ニネベの人たちは、ヨナをとおして語られた御言葉を聞いて（4節）、神さまの前に悔い改めを表わします（5-9節）。神さまは、彼らの悔い改めを、ご覧になり、「思い直され」ました（10節）。神さまが一度お決めになられたことを、「思い直される」というのは、おかしなことだと思われるかもしれません（出エ32:14、アモス7:3）。人間ならまだしも、神さまがコロコロと心変わりしてしまうならば、いったい私たちは何を信じてきたらよいか分からなくなります。では、なぜ神さまは、ニネベの人たちを滅ぼすことを辞められたのでしょうか。それには、はっきりとした理由があ

ります。神さまが思い直されるのは、人々が神さまの前から離れ、滅んでしまうことが御心ではないからです。だから、より多くの者たちを救う方向へと神さまの決定が変更されるのです。

③その中心にあるのは、神さまの「愛」です。神さまは聖なる方、義なる方でもあられますから、人間の罪や悪を放ったらかしにはしません。まあ、これくらいだったら赦してやるかと、もう悪さをするなよというのは、優しさのように思えて、実に無責任な態度ではないでしょうか。もし本当の愛があるならば、その人が罪を犯さないように厳しく言い聞かせ、二度と御自分のもとから離れないように、ギュッと抱きしめるのではないのでしょうか。神さまが罪を犯した人間に対して、怒りを覚え、あなたがたを滅ぼすまでおっしゃるのは、私たちに対する深い愛があるからです。あなたがたは滅んではいけない！ わたしのもとに帰ってこなければいけない！ 滅びの宣告の裏には、神さまの強い招きがあるのです。このことを「福音」と呼びます。ニネベの人たちは、滅びの宣告の中に、強い神さまの愛の御声を聞き取ったに違いありません。

④罪人を滅ぼすことを思い直された神さまの愛は、やがてこの世に来てくださったキリストの中にはっきりと現れました。あなたは滅んではいけない！ わたしのもとに戻って来い！ という招きの声は、私たち一人ひとりにも向けられています。罪に苦しむ私たちは、ニネベの王のように、「思い直してくださるかもしれない」とわずかな望みを神さまに託しているかもしれません（3:9）。「かもしれない」というのは、「もしかしたら」ということです。でもキリストの十字架によって、「かもしれない」「もしかしたら」というわずかな望みは、100パーセント確かな希望に変えられたのです！

すべての人を愛して惜しむ神の愛を知って、悔い改めの愛に生きよう。

〈ヨナの怒り〉

ニネベの人たちは、心から悔い改めました。そして神は彼らの罪を赦し、彼らを喜ばれました。通常ならば、ヨナも共に喜ぶべきであります。けれども、神の怒りがやんだときから、ヨナの怒りが始まるのであります。彼らが、異邦人であるがゆえに、またニネベを滅ぼすことをやめたその憐れみに対して激しく怒るのであります。口にする信条と実際の思いとの矛盾、自己への思いと他者への思いの矛盾がさらけ出されております。

おそらく、ヨナの心境としては、ソドムとゴモラと同じような町であるがゆえに、滅ぼされるのが当然であると思っていたかもしれません。また、ヨナは、神の救いは選民だけであるというエゴがあったかもしれません。つまり、私たちは救われて当然であるが、彼らは救われるはずがないといったヨナの比較があったように思われます。

「わたしの言葉」、「わたしの国」など一人称の形が9回繰り返されております。そこからヨナのエゴの強さがうかがえます。そして、ついにヨナは、神がこのように憐れみ深く振る舞う世界に自分は存在したくないと言うのであります(3)。

〈ヨナの教育〉

主なる神は、ヨナを直ちにさばくことも、見捨てることもしませんでした。むしろ、ヨナを教育しようとして、問いかけられるのであります。最初は、「お前は怒るが、それは正しいことか」と問いかけられます。しかし、ヨナは、その問いに答えません。言葉で無理であるなら、主なる神は、ヨナに救いと苦しみを体験させます。

「とうごま」の木をヨナに与えます。「とうごま」は、およそ4メートルの高さに及ぶ木であり、種

子からヒマシ油をとって下剤ができます。また、第二次世界大戦のとき、日本各地でも栽培され、飛行機用の潤滑油として使用されていたようであります。

とうごまの木はヨナよりも丈が高くなり、頭の上に陰を作りました。それでヨナは大いに喜び、不満が解消されました。しかし、神は、虫と熱射の東風を送り、とうごまの木は枯れてしまいます。そして神は、ヨナに最後の問いかけをします。ヨナは「もちろんです。怒りのあまり死にたいぐらいです」(9)と神に不満を漏らします。神に不満を漏らすことが当然の権利でもあるかのように、ヨナは神に不満をぶつけます。

右も左もわきまえない人間であるヨナ、自己中心的な考えであるヨナ。そのヨナは、当然、神の目から見てさばきの対象であります。神にとっては、むしろそれだけいっそう憐れみの対象であることを語りかけます。神は、ヨナの自己中心的生活を逆手にとって教育をなさるのであります。ヨナをも異邦人をも包み込む主なる神の愛と憐れみが、ここでは徹底的に描かれているのであります。

「(主なる神は、) そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです」(ペトロ二3:9)。

私たちの信じる神は、すべての人を愛して惜しむ神であります。また、忍耐して私たちの悔い改めを待ってくださる神であります。どんなに私たちが神に不平や不満を言っても、忍耐してくださる愛なる神であります。

ニネベの人たちは神の忍耐において、悔い改めました。そして神は赦されました。おそらく、神の最後の言葉を聞いて、ヨナも悔い改めたのではないのでしょうか。私たちは、ヨナと同じように神に教育されています。そのことを自覚して、神の愛の深さを知り、悔い改めの愛に生きていくものでありたいと思います。(潮田 祐)

テキスト ヨナ書 4章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問21

〔単元のねらい〕

「すべての人を愛して惜しむ神の愛を知って、悔い改めの愛に生きよう」。単元目標に賛成である。ここにも面白い筋書きがある。ヨナがとうごまの木を惜しんだ機をとらえて、神はニネベの人々を惜しむ御心を打ち明けられた。木が枯れたことに怒るヨナに、神も人が滅びることに怒る御自分の激情を示される。ニネベの人々の悔い改めと神の思い直しに対して、ヨナが怒ったその怒りは、神の恵みと憐れみの御心に逆行する怒りだったことを、教え諭したい。

「人の滅びを望まぬ神」

神さまのなさることが、どうてい受け入れられない。神さまのお気持ち、まったく分からない。そんな怒りを露わにして、神さまに訴える人がいました。「主よ、どうか今、わたしの命を取ってください。生きていたよりは死んだほうがましです」。預言者ヨナ、この人の激しい訴えに答えて、主なる神は問いかけられました。「お前は怒るが、それは正しいことか」。

彼の怒りの原因は、イスラエルの敵の国アッシリア、その都ニネベの王と住民を、神さまが赦してしまわれたことにありました。ダビデ、ソロモンが70年にわたって治めたイスラエル統一王国、それが北と南に分裂して戦争をするようになってから、イスラエルは次第に弱体化していました。それに乗じてアッシリア帝国は軍隊を派遣し、南北イスラエルを脅かして、莫大な金銀を貢物として要求し、幾度となく持ち去ったのです。この敵の国の都に赴いて、命がけで神さまの言葉を告げ知らせたのが、預言者ヨナでした。「イスラエルの神が仰せである！ お前たちの悪は神の耳に届いている！ お前たちの罪は神の目に明らかである！ このあと40日もすればニネベの都は滅びる！」と。

するとどうでしょう！ ニネベの人々が神さまを信じてしまうのです！ アッシリアの人々が自分たちの悪い言葉や行動を思い直し、イスラエルの神の前で悔い改め、身分の高い人から低い人ま

で粗末な衣をまとい断食するのです！ ニネベの人々が罪を捨てて悪から離れたことを御覧になると、イスラエルの神さまは思い直されて、預言者ヨナを通して告げ知らせた災いを下すことを思い留まられたのです！ 敵を裁いて滅ぼすのではなく、その人々を戒めて赦す。そのようになさる神さまに向かって、預言者ヨナは、激しい怒りをぶちまけています。

「わたしには、こうなることが分かっていました。あなたは恵みと憐れみの神です。忍耐深く、慈しみに富み、災いを下そうとしても思い直される方です」。この言葉によって、神さまに賛美と感謝を捧げることが期待されていたでしょうけれども、預言者ヨナはそうではなく、皮肉と不満を投げつけています。彼の怒りは正しいことでしょうか。少なくとも、一つ二つのことについて、正しいとは言えません。

一つはヨナ自身、神さまから赦された人だったということ。神さまから御言葉をお預かりしたのに、それを心の中にしまい込んで、伝えようとしなかったこと。預言者なのに、ご命令に背いて、逃げ出したこと。それでも神さまは、ヨナを連れ戻し、悔い改めに導き、背きの罪を赦し、彼をもう一度スタートラインに立たせてくださったこと。赦された罪人なのに、同じく赦された敵の国について怒っている。その怒りは、神さまの目から見て、正しくないのです

もう一つは人間として、神さまの御心と御業に言いがかりを付けることは出来ないということ。神さまは御自分が憐れもうと思う人を憐れみ、慈しもうと思う人を慈しむ方。イスラエルの民だからといって、そのまま皆を恵むことはなさらない。アッシリアの者だからといって、そのまま皆を呪うこともなさらない。あらゆる人に祝福を約束し、服従を要求なさる。不従順に対しては警告を発せられる。その上で、神の前に思い直し、罪を悔い改める人には赦しを与えて、災いを下すことを思い留まれる。このように思し召し、このように成し遂げる神に向かって、人間が怒ることは正しくないのです。

この一つ二つのことに気付かせるため、神さまは問いかけられたのでありました。「お前は怒るが、それは正しいことか」。しかし預言者は、神さまのお気持ちに気付きません。彼の怒りは収まりそうにありません。プンプンと顔を真っ赤にしながら、ヨナは都から出て行きます。ニネベの人々がこれからどうなるのか見届けようと、小屋を建てて座り込みます。そんな彼を、神さまは尚も赦しておいでになります。そして御自分のお気持ちを分からせようと、彼の生活に御手を伸ばされます。

真昼の厳しい陽射しに晒されて苦しんでいるヨナのために、神さまは一本のどうごまの木をはえさせられます。芽を出したかと思うと、その日のうちにみるみる伸びて、ヨナの背丈より高くなります。葉が茂ると日陰ができたので、ヨナはその木が生えて茂ったことをとても喜びます。いつしか彼の不満は薄れ、怒りも静まります。ところが翌朝、神さまはその木を虫に食い荒らさせられたので、木は枯れてしまいます。日が昇って、太陽がヨナの頭上に照りつけ、東からの熱風が吹き付けます。その木が枯れてしまったことを、ヨナは本当に悔しく思い、その木を枯らしてしまった虫に怒りがこみ上げます。いつしか、枯れてしまった哀れな木が、自分のことのように思えてきて、神さまのなさることへの不満と怒りがよみがえり

ます。預言者ヨナはぐったりとなって、ふたたびつぶやきます。「生きているよりは、死んだ方がましです」。

預言者ヨナの怒りとつぶやきを御覧になった神さまは、彼にふたたび問いかけられます。「どうごまの木のことでお前は怒るが、それは正しいことか」。ヨナは答えます。「もちろんです。あなたのなさったことを受け入れられません。あなたのお気持ちがさっぱり分かりません。わたしは不満でいっぱいです。怒りくるって死にたいほどです」。預言者はここでも、神さまのお気持ちを理解することができませんでした。

ところが！神さまはすかさず！ 預言者ヨナにたたみかけます。「お前は、自分で労することも育てることもなく、一夜にして生じ、一夜にして滅びたどうごまの木を惜しんでいる（悔しく思っている・哀れに感じている・その死に激怒している）。そのお前の気持ちは、神であるわたしが、お前に抱いている気持ちとそっくりなのだ。お前に命を与え、預言者に育て上げたのはわたしである。もしもお前が滅びたら、わたしはお前を惜しみ、悔しく思い、お前を死なせた罪に激怒するだろう。この気持ちは、ニネベの人々に対しても同じなのだ。わたしが命を与えた12万もの人間が、神を知らず、自分の罪もわきまえず、赦されないままに死んで滅びることを、どうしてわたしが望むだろう。一人の人の命でも滅びることを、わたしは決して望まない。わたしが望むことを、お前の望みとせよ。これがわたしの気持ちである」。

神の御独り子イエスさまは、滅びゆく罪人の死を御自分の死となさいました。それは人間が罪赦されて生きるためにほかなりません。神さまがそうしてくださったのですから、罪赦されて生きる私たちも、神さまが悲しまれることを自分の悲しみとし、神さまが喜ばれることを自分の喜びとしよう。ヨナの神が願っておられたことを願い、主イエスの父が望んでおられること望む。それが私たちの救いです。

(二宮 創)

[今週の暗唱聖句]

マタイによる福音書 18章14節

これら小さな者が一人でも滅びることは、
あなたがたの天の父の御心ではない。

〈ねらい〉

神様は、ほくたち私たちを、心から愛してくださっています。その神様の愛について、御言葉に聞きましょう。

〈展開例〉

さて、不思議だね。ニネベの人々は、ヨナさんを通して語られた神様のメッセージを通して、皆、悔い改めました。神様の怒りは静まったのです。でも、神様の怒りが静まった時に、今度はヨナの怒りが爆発しました。「ヨナにとって、このことは大いに不満であり、彼は怒った。」(1)

きっと、ヨナさんは、ニネベの町を、聖書に出て来るソドムとゴモラのような、悪い人々が住んでいる町だと思い込んでいたのかもしれませんが。また、神様の救いは、ユダヤ人以外に伝えられてはいけないと思ってしまっていたのかもしれませんが。

ヨナさんはきっと、自分たちが救われるのは当然であったとしても、異邦人である、神様を信じない彼らが救われるのは納得いかないと、思っていたのだと思います。

「彼は、主に訴えた。『ああ、主よ、わたしがまだ国にいましたとき、言ったとおりではありませんか。だから、わたしは先にタルシシュに向かって逃げたのです。わたしには、こうなることが分かっていました。あなたは、恵みと憐れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直される方です。主よどうか今、わたしの命を取ってください。生きていたよりも死ぬ方がましです。』」(2-3)。

こんなに神様が憐れみ深いのでは、生きていたくないと思ったのかもしれませんが。物凄、強情な人ですね。

でも神様は、ヨナを決して裁いたり、見捨てたりいたしません。ヨナが木陰として使っていた、とうごまの木を枯らすという、目に見える形の教育をされるのです。

「すると、主なる神は彼の苦痛を救うため、とうごまの木に命じて芽を出させられた。とうごまの木は伸びてヨナよりも丈が高くなり、頭の上に陰をつくったので、ヨナの不満は消え、このとうごまの木を大いに喜んだ。ところが翌日の明け方、神は虫に命じて木に登らせ、とうごまの木を食い荒らさせられたので木は枯れてしまった。」(6-7)

とうごまの木が枯れたことを惜しむヨナの心を用いて、神様がどんなに人々を愛しておられるのか、異邦人でもユダヤ人でも愛しておられるのかということを、教えられたのです。

神様は、すべての人が主イエス・キリストを信じて、救われることを願っておられます。この愛からは、ほくたち私たちも決して漏れてはいないのです。神様のこの愛に心から感謝をして歩んでいきましょう!!

〈お祈り〉

天の父なる神様。あなたは、すべての人を、そして、ほくたち私たちを心から愛してください。この愛を心から信じていることができますように。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

すべての人を愛して惜しむ神の愛を知って、悔い改めの愛に生きよう。

〈展開例〉

ヨナは、神様に不満を感じていました。ニネベの町の人たちは本当の神様を信じないで、神様に嫌われることをしていました。神様はそんな人々を見て、ヨナをつかわし、悔い改めを求めました。すると、ニネベの王様から家畜までみんな心から悔い改め、「神様ごめんなさい」と思い直しました。そんなニネベの人たちを見た神様は、憐れみ深く、ニネベを滅ぼすことをおやめになりました。

ヨナはニネベの町が滅ぶことを願って小高い丘からこの町をずっと見ていました。ところが、日が照ってとても暑いし、のども渇く！ 神様はとても暑そうなヨナを見て、とうごまの木を一晚のうちにグングン伸ばし日陰を作っていました。ヨナは神様の配慮に満足しつつも怒っています。

次に、神様はとうごまの木を枯らしました。

とうごまの木が枯れ、暑くて仕方がない、神様

に見放されてしまった！ ニネベも滅びないし、暑いし、死んだほうがまだ！ ヨナはとても不満に思っていました。けれども、神様はヨナに気づいてほしかったのです。一本のとうごまが枯れてしまうことでさえ、これだけ心が揺らいでしまうヨナ。

神様にとって、大きな町のたくさんの人が滅びることはもっと悲しいことです。小さなことで不満ばかり感じてしまう私たちですが、神様は私たちひとりひとり、分け隔てなく愛してくださっています。私たちが感じる不満は、神様の愛の前では本当に小さなことです。神様からたくさんの愛を注いでもらっていることを忘れず、毎日「神様。ありがとうございます、ごめんなさい」のお祈りをつづけたいですね。

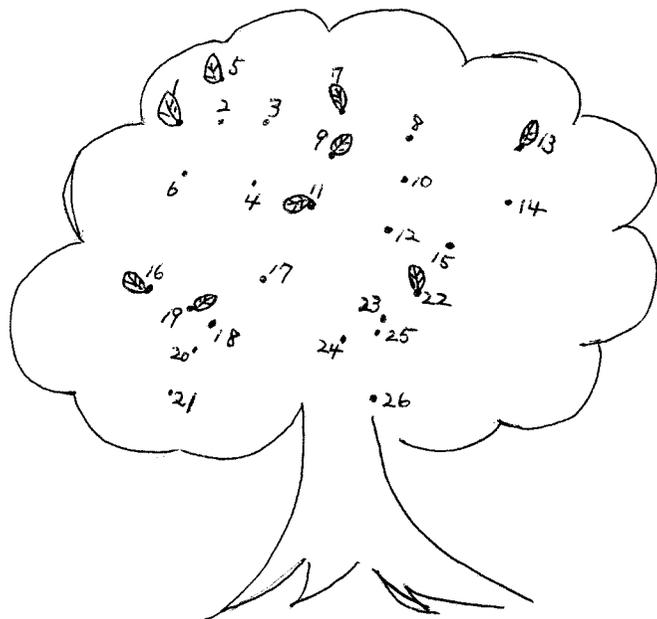
〈お祈り〉

神様。いつも私たちを愛して守ってくださいありがとうございます。私たちもまわりの友だちを赦し、愛することができるようにしてください。アーメン。

〈やってみよう〉

○とうごまの木のなぞ

とうごまの木には、
どんな言葉が
隠されているでしょうか？
番号順に線で結んで
みましょう。
ただし、点から葉っぱは
結ばないでね。



【答え】 カミノアイ

〈ねらい〉

神様は神様が造ってくださった全ての人間を愛してくださっていて、神様に立ち帰ることを望んでおられる。その神様の御心を心から感謝し、神様に仕えていく者としていただきたい。

〈展開例〉

- ヨナは神様はどんなお方だと言っていますか。
 - 恵みと憐みの神、忍耐強く、慈しみに富み、災いを下そうとしても思いなおされる方
- そんな神をなぜヨナは不満に思い、怒っているのでしょうか。
 - ニネベ町はイスラエルの敵国（アッシリア）の町で、今までイスラエルの人々はひどい目にあわせられてきたため、ヨナはニネベの町は滅ぼされるべきだと考えていた。
- 「ニネベの人を赦して欲しくない」と思うヨナについてどう思いますか。
 - ひどいことをされたらそう思っても仕方ないかも……。でも、ヨナは自分も同じように罪を犯し、神様に赦された者だということを思うべき。神様の憐みに不満を持つことは正しくない。
- 怒るヨナに神様はどうされましたか。
 - とうごまの木をヨナに与え、さらにそれを取

り上げられた。

- 神様はとうごまの木でヨナに何を伝えたかったのでしょうか。
 - とうごまの木が枯れたことにさえ怒るヨナに、人間を造られ、人間を深く愛してくださっている神様が、人が滅びることをどんなに悔しく悲しく思われるかということ伝えたかった。
- （聖書には書いてありませんが）ヨナは神様の御言葉を聞いてどう思ったでしょうか。
 - 神様はたとえ自分に逆らう者であっても、深く愛してくださり、悔い改めて神様に立ち帰ることを心から望んでくださっている。そして、神様の愛は世界中の人々へ広く及んでいるのだということがよくわかった。
 - 自分のこと、自分の国のことばかり考えていた私をニネベの人々の救いに用いてくださった恵みと憐みの神をほめたたえよう。

〈祈り〉

神様。私たちをいつも深い愛をもって赦してくださることを感謝します。自分勝手な思いでいることの多い私たちですが、どうぞ神様の御心を思い、神様の御心になかった歩みをなすことができるようにしてください。



対話の手掛かりとして……。

- ①神さまは、ニネベの人々が悔い改めたことを知って、彼らを滅ぼすことを思い直されました(ヨナ3:10)。しかし、ヨナにとってこのことは不満であり、怒りを覚えます。「生きているよりも死ぬ方がまし」とさえ言うのです(3、8節)。私たちも神さまに対して怒りを覚えることがあるかもしれません。それはどういう時でしょうか。その怒りは果たして正しいのでしょうか。時に怒りは、自分が(自分だけが)正しいという偽りの確信から生まれることがあります。
- ②第4章後半はとうごまの木を巡って、神さまとヨナとの対話が記されています。とうごまの木の出来事とおして、神さまは、ヨナの中に芽生えている「惜しむ心」に気付かせることです。それも惜しむ心が間違っただけの方に向いていることに気付かせようとしています。「惜しむ」というのは、心残りに思う、残念に思うということです。ヨナがとうごまの木が枯れたことを惜しんだように、罪深い人間でさえも惜しむ心があるのです。たとえば、失ったものが、自分のものでなくてもです。とうごまの木が枯れたことに怒ったのは、ヨナがそれを大切にしていたからではありません。暑さをしのぐに都合がよかっただけなのです。
- ③また、とうごまの木の出来事とおして、神さまがヨナに教えたかったもう一つのことは、「神さまの愛」です。ヨナがとうごまの木を惜しんだように、神さまもニネベの人々を惜しまれます。しかもニネベの人々は、神さまのものであります。御自分のものであるということは、それだけ大切なものであり、愛しておられるということです。ニネベの人々が御自分のもとから離れること、失われることを惜しまずにはおられませんで

した。それゆえに、「ヨナよ、お前の怒りは正しいのか。そうではないだろう」と教えようとしているのです。私たちは自分の心にはとても敏感です。かすり傷さえも痛みを感じ、我慢できずに腹を立てます。なのに、他人が傷ついてもあまり気付きません。傷を負わせたのが自分であったとしてもです。まして、神さまの惜しむ心には気付かず、都合よく惜しむ自分の心だけを大事にします。でも本当に知るべきことは、神さまの愛です。神さまは、恵みと憐れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直されるお方であることを知らねばならないのです(2節)。

- ④ヨナ書は、神さまからの問いかけで締めくくられています。神さまの言葉に、ヨナがどう応えたかは記されていません。ということは、この問いかけに、どう応えて生きていくのか、その責任が今日の私たちに問われているのだと思います。この世の不条理に巻き込まれ、確かな答えを見いだせないまま、「自分は生きているよりも、死ぬがましだ」という怒りや叫びが至るところで聞こえてはこないでしょうか。いや、もしかしたら自分自身が、既にそのような叫びをあげているのかもしれません。
- ⑤その声に、神さまは真実に答えてくださいました。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ3:16)。神さまはこの世と、この世に属する私たちを愛し抜いてくださったのです。生きていたって、何の喜びも意味もないと思っている「世」を、神さまは愛しておられます。生きるだけの価値と意味が、キリストの愛のゆえに確かに存在するのです。私たちは、この惜しみなく愛してくださるキリストの福音を伝える使命に遣わされています。

ソロモン王は、エルサレムに壮麗な神殿を建て、様々な国と外交・交易を結び、イスラエルの威光を内外に広めた名君として描かれる。そしてソロモン王の代名詞といえば、遠くシェバ（エチオピア）にまで聞こえたといわれる、その「知恵王」ぶりである（列王上10章）。「ソロモンの知恵は東方のどの人の知恵にも、エジプトのいかなる知恵にもまさった。彼はエズラ人エタン……をしのぐ、最も知恵ある者であり、その名は周りのすべての国々に知れ渡った」（列王上5:10, 11）。

それゆえ「知恵」はソロモンに帰されており、詩編にダビデの名が付されているように、箴言などの旧約の知恵文学のいくつかには、ソロモンの名が付されている（例えば、雅歌は英語では“the Song of Solomon”とも呼ばれる）。ソロモンの宮廷において、古今東西の知恵の言葉や、格言などが収録されて大切にまとめられ、イスラエルの信仰に取り入れられ、そのような旧約知恵文学へと結晶化したものと考えられる。

与えられたテキストは、その知恵王の知恵の源泉はいずこにあるかを伝えるものである。それは、「取るに足りない若者」に、神からの賜物として与えられたものであると、はっきり教えられている。それゆえ王は、ひたすら謙遜と祈りによって、その賜物を秩序と平和のために用いさせていただくべきものであり、おのれの才覚におごり高ぶり、民を不遜に扱うことは決してゆるされないことが暗示されている。

ソロモンが祈り求めた言葉から、彼に与えられた知恵の輪郭を定めよう。彼は「聞く心を与え、あなたの民を正しく裁き、善と悪を識別できるようにしてください」（9節私訳）と祈っている。まず「聞く心」が一番に求められている。それは、諸々の民の声を聞き分けるに先立って、神の語りかけを素直に聞きとり、諸々の世の知恵の中から

神の真理を聞き分けることのできる、心のまっすぐさであろう。「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」（申命記6:4, 5）。この呼びかけに応えるためにこそ、何よりも「聞く心」が願い求められる。

また、「あなたの民」を「裁く」力を求めている。イスラエルの民は、どこまでも主のものであってソロモンのものではない。神の正しい裁きを、ただ器として、ふさわしく取り次ぐことだけが王の職務であるというわきまえが好ましい。この「裁き」は「秩序、支配、公正……」という意味領域を持つ。神の正しい御支配が、自らの統治を通して実現しますように。その祈りは「御国が来ますように、御心がなりますように」と通じる。

また、「善と悪を識別する」と聞いて思い出すのは、エデンの園に生えた「善悪の知識の木」である。アダムはその知識に魅力を覚え、自らの手でつかみとろうとした結果、墮落の悲惨に追われた。善と悪の識別者は神であって、人間であってはならない。ソロモンは、ただ神からその知識が教えられることを願った。

このような願いをもち、そしてその実現のためにこそ「聞く心」が与えられるようにと、ソロモンは祈ったのである。そう考えるならば、ソロモンの祈りに貫かれているのは本質的に、主に信頼し、主に聞き従おうとする精神に他ならない。「主を畏れることは知恵の初め／聖なる方を知ることとは分別の初め」（箴言9:10）。まさにこの箴言のとおり、このソロモンのごとき「主を畏れる心」にだけ、真の知恵は宿る。

そのようにして、主に忠実を尽くそうとする者には、富も長寿も、一切の必要が備えられる。「まず神の国と神の義を求めよ」と、主イエスが教えてくださった通りのことである。（坂井孝宏）

テキスト 列王記上 3章4～15節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問5, 25, 33, 38, 76

〔単元のねらい〕

主を恐れ敬うことが知恵の初めである。真実の知恵は創造主である生けるまことの神にある。わたしたちは小さな被造物であり、かつ、愚かな罪人にほかならない。それゆえに、神の御前にへりくだり、知恵を祈り求めることが必要である。知恵は、祈り求めることによって与えられる。この知恵は、「これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました」（マタイ11:25）と言われる。人の目に小さく無力に見える幼子に開かれている知恵なのであり、幼子のように受け取るべき知恵である。祈りによってへりくだることなしに、この知恵はありえない。わたしたちも、与えられた務めを果たすために、まず祈ることによって始めていこう。

「祈り求めるべき知恵」

旧約のイスラエルの民の歴史の学びを再開します。7月には、ダビデ王のことを学びましたね。神さまに忠実に歩むダビデ王を祝福して、神さまはダビデと契約を結ばれました。ダビデ王の子孫にイスラエル王国を継がせ、その王国を揺るぎないものとするという約束です。そのとおり、神さまはダビデ王の息子ソロモンをイスラエル王国の新しい王さまにしてくださいました。そのソロモン王がどんな王さまであったのか、今日はまず、ソロモン王がたいへん知恵のある王さまだったことをお話ししましょう。

ある日のこと、二人の女の人が一人の赤ん坊を連れて、ソロモン王のところにやって来ました。おそらく他の人にも相談したのでしょうけれど、決着がつかず、知恵があることで有名だったソロモン王に助けを求めたのです。

女の中の一人が言いました。「わたしたち二人は同じ家に住んでいますが、わたしはその家で子どもを産み、この人も三日後に子どもを産みました。ところが、この人は、夜中に寝ている間に子どもの上に寄りかかって、子どもを死なせてしまいました。そして、何ということでしょう。わたしが眠っている間に、わたしの子どもと自分の死んだ子どもを取り替えてしまったのです。わた

しが朝起きて、子どもを見ると死んでいたのですが、よく見るとそれは自分の子どもではなかったのです。この人の抱えている生きている子どもが、わたしの子どもなのです」。もう一人の女の人と言いました。「いいえ、生きてるのがわたしの子どもで、死んだのはあなたの子どもです」。二人はソロモン王の前で言い争いを始めました。その家に住んでいたのは、この二人の女だけだったので、だれも生きている子どもの本当のお母さんがどちらなのか、分からなかったのです。

ソロモン王はしばらく二人の様子を見て考えて、「剣を持って来なさい」と家来に命じました。そして、二人に言いました。「その生きている子どもを剣で二つに引き裂くので、一人は半分を、もう一人は残りの半分を持って帰りなさい」。

それを聞いて、一人の女の人と言いました。「王さま、分かりました。お願いします。この子どもを生かしたまま、この人にあげてください。この子を二つに裂いて殺さないでください」。この女の人が本当のお母さんだったからです。もう一人の女の人と言いました。「どうぞ、王さまがお決めになったとおり、裂いて分けてください」。

ソロモン王は言いました。「この子どもを生かしたまま、はじめの女に渡しなさい。この子を殺してはなりません。はじめの女が、この子の本当

のお母さんです」。

みんな、ほっとしましたね。本当のお母さんが分かってよかったですね。ソロモン王は、とても知恵のある人で、こういう知恵あるお話が幾つか伝えられています。

みんなも、「こういう知恵があるといいなあ」と思いませんか。ソロモン王のこの知恵はいったいどこから来たのでしょうか。今日は、みんなに知ってもらいたいと思います。知恵というのは神さまのものであり、神さまから来るのです。このときのソロモン王の知恵も、神さまから来たものです。ソロモン王は神さまに知恵を求めて、神さまが知恵をソロモン王に与えておられました。

ソロモンは、王さまになって、ある日のこと、ギブオンというところでいけにえをささげました。神さまを礼拝したのです。その日の夜、ソロモン王の夢の中に神さまが現れておっしゃいました。「何事でも願うがよい。あなたに与えよう」。

「何事でも願うがよい。あなたに与えよう」と言われて、みんなだったら何をお願いするでしょうか。子どもの頃のわたしだったら、オモチャかマンガをお願いしてしまうかもしれません。

ソロモンはこう答えました。「神さま、あなたはわたしの父ダビデを愛して、その息子であるわたしを王さまにしてくださいました。けれども、わたしはまだ取るに足らない若者で、どのように振る舞えばよいのかを知りません。神さま、あなたの民イスラエルはとても大きく、どうしてわたしなどに治めることができるでしょう。どうか、善と悪を判断できるように、聞き分ける心をください」。そうお祈りしたのです。

ソロモン王は、神さまを愛し、また本当にイスラエル王国を大切にしていたのだと思います。いったいどうすれば国を治めることができるのか。それは神さまに頼るほかないと思ったのです。だから、善と悪を判断する知恵、聞き分ける心を神さまに祈り求めました。善と悪を判断し、人の

言葉を聞き分け、また神さまの御心に聞き従うことができないなら、どうてい国を治めることはできないのです。

聖書は語っています。「主を畏れることは知恵の初め、聖なる方を知ることは分別の初め」。神さまは天地を造られたお方です。その造り主である神さまが、この世界、この天地のすべてをご存じであり、すべての知恵の源です。知恵は、天地の造り主である神さまから来るのです。ですから、聖書は言います。「主を畏れることは知恵の初め、聖なる方を知ることは分別の初め」。

主を恐れ敬うことは、人の心を練りきよめて、善と悪を見分ける力を養わせます。物事を聞き分ける分別を与えます。目に見えることに惑わされず、物事の本質を見抜く力を与えます。人にとって何が本質的なことかを見抜くことができるようになります。主を恐れ敬うことが、人の洞察力をはぐくむのです。

先ほどの、二人の女と赤ん坊の出来事でも、本当の母親であるならば、何よりもその子が生きることを願い求めるはずです。裂いて分けてよいなどは決して言いません。そのことを見抜く知恵がソロモンに与えられたのです。

このような主を恐れ敬う知恵が与えられて、ソロモン王の時代、イスラエル王国は大いに繁栄しました。ダビデ王が計画して準備していた神殿を建てることも許されて、ソロモン王はたいへん立派な神殿を建て上げることができたのです。

「主を畏れることは知恵の初め、聖なる方を知ることは分別の初め」。ここに、真に知恵ある人生があります。わたしたちも、神さまを礼拝して、主を恐れ敬うことに生きていきましょう。学校の勉強も大切です。しかし、それ以上に、聖書の御言葉に学ぶ、聖書の学校である教会が大切なのです。礼拝をささげて、御言葉に聞き、神さまの知恵を祈り求めましょう。 (望月 信)

[今週の暗唱聖句] 箴言 9章10節

主を畏れることは知恵の初め
聖なる方を知ることは分別の初め。

〈ねらい〉

神様は、ぼくたち私たちを、心から愛してくださっています。そして、神の国とその義を第一とする時に神様が一番良いものを与えてくださいます。その神様の愛について、御言葉に聞きましょう。

〈展開例〉

みんな、もし神様が、ぼくたち私たちに、何か良いものを与えようと言ってくださったら、ぼくたち私たちは、神様に何を求めるだろうか（聞いてみる……）

今日、登場するのは、ソロモン王です。ソロモンはダビデ王の息子で、ダビデに代わって、神様のために大きな神殿を建てた人でした。ある日、神様がソロモンに語りかけるのです。「その夜、主はギブオンでソロモンの夢枕に立ち、『何事でも願うがよい。あなたに与えよう』と言われた。」(5)

ソロモンはどうしたでしょうか。あれをください、これをくださいと、自分の欲しいものを願ったでしょうか。

「わが神、主よ、あなたは父ダビデに代わる王として、このぼくをお立てになりました。しかし、わたしは取るに足らない若者で、どのようにふるまうべきかを知りません。僕はあなたのお選びになった民の中にいますが、その民は多く、数えることも調べることもできないほどです。どうか、あなたの民を正しく裁き、善と悪を判断することができるように、この僕に聞き分ける心をお与えください。そうでなければ、この数多いあなたの

民を裁くことが、誰にできましょう。」(7-9)

ソロモンが求めたのは、民を正しく裁き、善悪を判断する知恵でした。

このソロモンの願いを聞いて、神様は大変喜ばれました。「主はソロモンのこの願いをお喜びになった。神はこう言われた。『あなたは自分のために長寿を求めず、富を求めず、また敵の命も求めることなく、訴えを正しく聞き分ける知恵を求めた。見よ、わたしはあなたの言葉に従って、今あなたに知恵に満ちた賢明な心を与える。あなたの先にも後にもあなたに並ぶ者はいない。』」(10-12)

さらには、「もしあなたが父ダビデの歩んだように、わたしの掟と戒めを守って、わたしの道を歩むなら、あなたに長寿をも恵もう」(14)と、神様はソロモンに知恵と長寿と富を与えました。神様に忠実を尽くすソロモンを、神は大変喜ばれました。

イエス様も、「まず神の国と神の義を第一に求めなさい」と言われました。

神様を第一するときに、神様は、ぼくたち私たちに、一番良いものを与えてくださいます。いつも神様を第一にして歩いてゆきましょう！！

〈お祈り〉

天の父なる神様。あなたは、「まず神の国と神の義を第一に求めなさい」と言われました。そのときに、あなたは一番良いものを与えてくださることを信じます。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

真実の知恵は神のもの。善と悪を判断する知恵、聞き分けるところを祈り求めよう。

〈展開例〉

今日の聖書のお話は、賢いソロモン王のお話の中で有名なところですね。二人の女の人がソロモン王の前にいます。二人の女の人は、元気な赤ちゃんの本当の母親はわたしだ！とソロモン王に訴えます。ソロモン王は言いました。「赤ちゃんを剣で半分にして、半分ずつ持って帰れ。」

二人の女ののうち本当の母親は、赤ちゃんが半分にされるのでは赤ちゃんが死んでしまう！と思ひ、偽者のお母さんに赤ちゃんを譲ろうとします。そこにソロモン王は本当のお母さんの愛を見て、赤ちゃんのお母さんが二人のうちどちらなのか、知恵をもって判断しました。

ソロモン王の知恵が発揮されたお話です。ソロモン王はとても勉強熱心で、また、頭の回転が速かったから「知恵のある王様」とよばれていたのでしょうか？

今日読んだ聖書によると、ソロモン王の知恵は神様から与えられたと書かれています。ソロモン王は神様に何を願ったのでしょうか？

聖書には「知恵」とあります。ソロモン王が知恵がほしいと願ったとき、神様は喜ばれました。

普通わたしたちは、新しい服がほしい、お金がほしいとか考えてしまいます。ソロモン王が願った知恵とは何でしょうか？ 善と悪を判断する知恵。この「本当の知恵」は神様しか持つことはできません。では、私たちは知恵を持つことができないのでしょうか？ いいえ。私たちは本当の知恵を持った神様に頼ることができます。いつも心の中に神様がいてくださることを信じて、何かに迷った時、神様にお祈りをする、という気持ちをもちたいと思います。

〈お祈り〉

神様。今日も聖書のお話をきくことができありがとうございます。神様の御声に耳をかたむけることができるようにしてください。アーメン。

〈やってみよう〉**○宝物を作るう**

用意するもの……紙粘土

☆知恵を出して、素敵な宝物を作りましょう。

☆今日は形を作って、次週、色塗りをします。



〈ねらい〉

主を畏れ敬うことが知恵のはじめであることを、具体的な日常生活の例をあげながら、子供たちに考えさせたいと思います。その知恵は祈ることにおいて与えられます。従って神様に喜ばれる生き方ができるように、「知恵をお与えください」と日々祈ることの大切さを子供たちに伝えましょう。

〈展開例〉

1. 神様はソロモンの夢枕に立ち、ソロモンに何を語りかけられましたか。

神様は夢の中でソロモンに向かって、「何事でも願うがよい。あなたに与えよう」と語りかけられました（列王記上3:5）。

2. ソロモンは、その神様の語りかけに対して、どのように答えましたか。

ソロモンは、「あれが欲しい」「これが欲しい」と、自分の欲望のままに神様に願いごとをしませませんでした。では、彼は何を願ったのでしょうか。彼は自分の知恵に頼らず、むしろ謙遜に、「知恵を与えてください」と神様に願いました。「神の民を正しく裁き、善と悪を判断できるように、この僕に聞き分ける心をお与えください」（列王記上3:9）と。

3. このソロモンの願いを聞いて、神様はどう思われたでしょう。そして、その時、神様はソロモンに向かって、どういう約束をなさいましたか？

神様は、ソロモンが自分の欲望のままに「長生きできますように」とか「お金持ちになれますように」と願うのではなくて、民の訴えを正しく聞き分ける知恵を求めたことを大層喜ばれました。（列王記上3:10-11）そして、ソロモンの願い通りに、「賢い知恵を与える」との約束をなさいました。（列王記上3:12）そればかりか、神様は、ソロモンが求めなかった富と長寿をも約束なさったのです。（列王記上3:13-14）

4. 皆さんは、毎日の生活の中で、「これはどうすればよいのだろうか？」「どっちを選べばよいのだろうか？」と迷ったことはありませんか。

どんなことで迷ったのか、みんなで話し合ってみましょう。

5. そんな時、皆さんはどうしましたか？

友達に相談したり、お父さんやお母さんに相談したりすることもあったかもしれません。あるいは、悩み抜いた末に自分で答えを出したという子供もいるかもしれません。人に相談することも、自分で悩み抜くことも大切なことです。そういう子供たちの答えを大切にしておいてください。そして、そんなとき、ソロモンがどうしていたかを子供たちに考えさせましょう。

ソロモンは、夢の中で神様に知恵を求めました。つまり、ソロモンは自分には神の民を正しく治める知恵と力がないことを素直に認め、まず神様に助けを祈り求めたのです。その上で、色んな人からの助言を受け、自分でも懸命に考え抜いて、様々な決断をしていったのでしょう。ソロモンは神様に信頼し、神様を畏れ敬っていたので、まず神様に「知恵を与えてください」と祈ることをもってことを始めました。その時に神様は、この祈りを聞き上げ、必要な知恵と力を備えてくださったのです。ある時には必要な助言者を与え、またある時には必要な知恵と力をソロモン自身に賜物として与えてくださいました。この神様に信頼し、祈ることから事を始めることの大切さを子供たちにしっかりと伝えたいと思います。

〈祈り〉

神様。私たちは、日々の生活の中で、自分がどのように歩むべきかが分からず、悩んでしまうことがあります。そんな時に、自分の力に頼ってジタバタするのではなくて、ソロモンのように、まず神様に「知恵を与えてください」と助けを祈り求めることができますように。

対話の手掛かりとして……。

- ①神さまが夢の中でソロモンに尋ねられたように、「何事でも願うがよい。あなたに与えよう」(5節)と尋ねられたならば、私たちは何を願うのでしょうか。「何事でも」と言われると、案外迷ってしまうかもしれません。また、「願えば、与えよう」と約束してくださるのですから、あれもこれも……と、ほしいものが心の中に次々と浮かんでくることでしょう。そして、それらを神さまに願うのは、それぞれにちゃんと理由があるのだと思います。私たちが、神さまに願う理由は何でしょうか。それは自分の中に、無いもの、足りないものがあるからではないでしょうか。だから、どうかお与えください。満たしてくださいと願うのです。
- ②イスラエルの王となったソロモンは、まだ取るに足らない若者で、どのようにふるまうべきかを知りませんでした(7節)。ソロモンは、自分の弱さや貧しさを、神さまの前で謙遜に受け止めていたのです。自分にないものを願うというのは、単なる「ないものねだり」や「わがまま」ではなく、神さまから託された働きを全うすることができるために必要なものを願うのです。そして、ソロモンが願ったのは、自分のためというよりも、イスラエルに平和と秩序をもたらされるためでした。そのことをとおして、神さまのご栄光が現わされるために、自分にはないあなたの知恵をどうか与えてくださいと願ったのです。
- ③私たちが祈り願うのは、自分たちの中に不足しているものがあるからだ最初記しました。しかし、誤解しないでいただきたいことがあります。祈りというのは、自分の欲望を満たすものではないということです。あるいは自分は満ち足りていると思えば、祈る必要はないという

ことでもではありません。神さまが、一人ひとりに託されている使命を果たすことができるために、いつも祈り願う必要があります。「主を畏れることは知恵の初め」(箴言1:7)という御言葉を心に刻みながら、祈りをささげましょう。

- ④また、その願いが「ないものねだり」にならないために大事なことは、神さまへの深い信頼です。主イエスは、神さまは私たちが祈り願う前から、あなたが必要なものをすべてご存知なのだおっしゃいました。(マタイ6:8)。だから、やたらと心を騒がすこともありません。安心して、祈ったらいいのです(フィリピ4:6)。また神さまは、ソロモンが求めなかったものまで与えてくださいました(13節)。主イエスも、「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」と約束してくださいます(マタイ6:33)。
- ⑤最近、本屋に行くと「〇〇の言葉」とか、「〇〇の力」という類の本が目立つところに並べられています。多くの人が、この世を賢く生き抜くための知恵の言葉や力を必要としているのだな、とつくづく思わされます。でも大事なのは、主を畏れること、神さまを中心にして生きることです。しかし、今の世界は、神さまを畏れないどころか、自分が神となり、「聞く心」(9節)を持ちません。正しく善悪を判断(同節)せず、偽りの正義を振りかざしています。そこには平和も秩序もありません。それゆえに人々だけではなく、神さまさえも悲しませています。それだけに、「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」とおっしゃった主イエスの言葉が身に迫ってきます。子どもたちもまたこの祈りを、祈るように招かれています。その中で、神さまが自分に委ねられている働きとは何か段々と見えてくるのではないのでしょうか。

先週の学びにおいて、ソロモンのまっすぐな信仰と、その心に宿った知恵の賜物の豊かさを見た。3～10章にかけて、そのような知恵に基づいた、彼のすばらしい支配と業績が記され、名君ソロモンの評価は確立される。しかし、この11章では一転して、「老境に入った」彼の晩年の負の側面が強調され、続く12章における王国分裂という悲劇の準備がされる。ダビデにおいてもバテ・シェバとの姦淫の罪が隠されることなく記録されたように、ソロモンの愚かな迷走もはっきりと「悪」だと指摘される。どれだけ偉大な人物であろうと決して美化することなく、そのありのままの罪を記録し、後の世代のための警告として差し出すところに、聖書の歴史記述の冷徹なりアリズムがある。神の裁きを告げる預言者の視点である（士師記や列王記といった歴史書は、ユダヤの伝統においては「預言書」として扱われている）。

今日のテキストでは、ソロモンが犯した偶像崇拜の過ちが記され、それが王国分裂を引き起こした最大の要因となったことが示されている（11節からの主の言葉）。政治的な観点からすれば、もともとダビデの王国というのは、ユダ族の王であるダビデのもとで、ペリシテ人への脅威への対抗という意識でもって12部族が集い、辛うじて一致を保っていただけというのが実態である。そこに、ソロモンの繁栄のもとでの部族間格差などの社会問題が顕在化するに従い、王国分裂は必然でもあった。しかし、列王記の記述によれば、そのような政治的問題よりも、宗教的な問題が、分裂の原因として重視されている。

それは申命記に基づく歴史理解であって、主なる神へのまっきたき信従こそがあらゆる祝福の源泉であり、その逆の道を行く者に、もろもろの悪と呪いがふりかかるという応報思想が反映している。思い出されるべきは申命記28章である。「あなたは、今日わたしが命じるすべての言葉から離

れて左右にそれ、他の神々に従い仕えてはならない」（申命記28:14）、この言葉に聞かない者への呪いは、「あなたの身から生まれた子の肉さえ食べるようになる」（28:53）とさえ言われる凄惨なものである。実際にイスラエルはこの後、南北両王国の滅亡と捕囚の悲劇の中で、これらの呪いを体験するが、その問題の根は、すでに分裂前のソロモンの背信にあったと示すのが、今日のテキストである。

ここに記されるソロモンの背信はことごとく、モーセ律法が禁じているものである。「ファラオの娘のほかにもモアブ人、アンモン人……など多くの外国の女を愛した」とあるが、これらは近隣諸国との同盟を結ぶための政略結婚であったであろう。しかし申命記17章の王に関する規定によれば、「王は大勢の妻をめぐって、心を迷わしてはならない」（17）とされている。さらに問題なのは、彼女たちが異国の女性であることである。2節に引用されているのは出エジプト記34章12～16節の戒めである。ここにはっきり警告されているように、外国人の妻は、必ずその郷土の宗教儀礼を持ち込む。王はその妻の歓心を得るために、それらの風習に対し寛容にふるまい、結果として国に偶像崇拜が入り込むことになる。まさにソロモンは、その警告通りの愚を犯したことになる。アシュトレト、ミルコムなどの偶像の名が挙げられるが、特に問題なのは、忌むべき人身御供をともなうモレク崇拜であろう。

こうしてソロモンの心は、律法の警告通りに迷わされ（2, 3, 4, 9）、他の神々に向かってしまい、主なる神と一つにならなかった（4）。「一つになる」は「平和（シャローム）」と同根語で、「完全な関係」ということである。神と一つになれない罪人に、神との和解と平和をもたらしてくれたのは、十字架の主イエスである。（坂井孝宏）

テキスト 列王記上 11章1～13節

参照カテキズム 子どもカテキズム 問1, 8, 9, 18, 29, 43-46, 55, 56

〔単元のねらい〕

ソロモンは不品行と偶像礼拝という二つの大きな罪を犯した。それは、神の知恵を捨て去ったことと関係している。イスラエル王国の繁栄を求めあまり、神を畏れ敬うことを忘れ、人間の知恵に依り頼んだのである。そして、自らの欲望の畏に陥ることになった。そして、人間の知恵によっては真実の繁栄は訪れない。イスラエルは滅びへの道をたどったのである。ここでは、人間の知恵の愚かさと罪に目を留める。また、もう一つとして、神がソロモンを悔い改めへと招いておられたことにも目を向けたい。ソロモンは悔い改めなかったのである。ダビデもまた大きな罪を犯したが、彼は悔い改めた。悔い改めるならば、神は豊かに赦しを与えたもう。悔い改めることができることは神の恵みである。

「神の怒りを心に刻む」

ソロモン王の二回目です。前回、ソロモン王が神さまに知恵を祈り求めたことを学びました。神さまの知恵を与えられて、ソロモン王はイスラエル王国を治めて、イスラエルはたいへん繁栄しました。とても豊かになりました。けれども、今日は、ソロモン王の失敗、神さまがソロモン王にお怒りになったことを話さなければなりません。

今日の聖書の御言葉に、とても考えられないこと、とても信じられないことが書いてありました。ソロモン王がとてもたくさんの女の人と結婚していたということです。その数は、全部で千人！とても信じられません。神さまは、一人の男の人と一人の女の人が結婚して、互いを大切にするように、と教えておられます。あわせて千人も奥さんがいるのでは、とてもとてもきちん大切にすることはできません。これは、どうてい神さまの喜ばれることではありません。これだけでも、十分に、神さまのお嫌いになることです。いったいどうしてソロモン王はそんなことをしたのでしょうか。神さまが結婚について大切に教えておられることを、当然、ソロモン王は知っていたはずで。それなのに、いったいなぜなのでしょう。

実は、このことは、イスラエルが豊かな国になったこと、大いに繁栄したことと関係しています。

イスラエル王国はたくさんの国々と貿易していました。物の取り引きによって繁栄したのです。その取り引きや交流がうまくいくために、外国の女の人を次々と自分の奥さんにしたのです。そうして、イスラエルをもっと繁栄させようと思いました。そして、それだけではなかったでしょう。ソロモン王自身も、もっと贅沢を楽しみたかったし、自分の欲望を満たしたかったのです。

こうして、ソロモン王は変わってしまいました。神さまを畏れ敬い、神さまの知恵を求めていたのに、そうでなくなりました。外国との貿易がうまくいくために次々と結婚してしまうなど、神さまの知恵ではありません。人間の愚かな知恵に過ぎません。神さまの知恵に頼るのではなく、自分の浅はかな知恵に頼るようになったのです。神さまにお祈りすること、礼拝することも忘れていたでしょう。そうして、自分の欲望を満たし、自分を楽ませることばかりになったのです。

だから、外国から来た奥さんたちが、自分の国の神々を拝みたいと言ったときに、ソロモン王は認めてしまいました。もちろん、それはまことの神さまの禁じておられる偶像礼拝です。そして、一人の奥さんに認めたら、ほかの奥さんにも認めなければなりません。ソロモン王の王宮には、こ

うして次々と外国の偶像礼拝が持ち込まれるようになりました。まことの神さまに仕える王様の王宮が、偶像礼拝の展覧会のように、いろいろな偶像であふれかえるようになってしまいました。そして、奥さんたちにせまられて、ついにソロモン王自身も偶像礼拝をするようになりました。

皆さん、大切に心に刻みましょう。まことの神さまを恐れ敬うことを忘れるとき、人は、恐るべき大きな罪を犯してしまうのです。神さまを愛して、神さまに仕えて生きることを止めて、自分を楽しませてしまうのです。自分の欲望のままに生きてしまうのです。そして、それは偶像礼拝なのです。礼拝すること、お祈りすることを忘れることが起こるでしょう。目に見える偶像を拝むことではなくても、偶像礼拝なのです。何が一番の偶像礼拝かという、自分が神さまになってしまうことです。自分の楽しみを追い求めてしまう。まことの神さまに聞き従うのではなく、自分の思いで良しとするところを行ってしまう。それが偶像礼拝なのです。

そして、もう一つ、大切なことを言います。それは、自分が偶像礼拝をしてしまっていた、自分を楽しませていた、神さまを恐れ敬うことを忘れていた、そう気づいたときに、神さまに立ち帰ればよいのです。「神さま、ごめんなさい。わたしが間違っていました。どうかお赦してください」。そう言ってお祈りすればよいのです。

ダビデ王のことを思い出しましょう。ダビデ王は神さまから愛された王さまでした。けれども、失敗がなかったわけではありません。神さまに背いてしまうことがありました。失敗があったのです。けれども、ダビデ王は、間違いを指摘されたときに、「神さま、ごめんなさい」と言って、神さまに赦しを求めました。神さまに立ち帰りました。

わたしたちも、「神さま、ごめんなさい」と言って、神さまに立ち帰ればよい。神さまは、愛と憐れみの大きなお方です。イエスさまの十字架の愛

によって、わたしたちを赦してくださいませ。

けれども、このときソロモン王は、自分の間違いを認めませんでした。神さまは、ソロモン王に現れて、「偶像礼拝をしてはならない。まことの神であるわたしを恐れ敬いなさい」と命じました。けれども、ソロモン王は聞き従いませんでした。奥さんはあいかわらず数え切れないほどだったですし、偶像礼拝もそのまま続けたのです。

そして、神さまは、ついにソロモン王に対して、あなたの王国を取り上げるとおっしゃいました。イスラエルの王国の大部分を、ソロモン王の息子ではなく、別の人に与えるとおっしゃいました。そのとおり、ソロモン王の死後、イスラエルの国は、北と南に分裂してしまい、その大きなほうは別の人が王さまになりました。北王国です。ソロモン王の息子は、残された小さな部分しか受け継ぐことができませんでした。南王国です。そして、やがて北王国も南王国も滅ばされてしまいました。ソロモン王は人間の知恵でイスラエルを繁栄させようとしたのですが、人間の知恵は、むしろ分裂と滅びを招くことに終わったのです。

ソロモン王の生涯は、神さまを恐れ敬うことの大切さを教えてくれます。人間の知恵は愚かなものであって、一時の繁栄を手に入れることはできるかもしれませんが、それは時の流れの中ではあっという間に過ぎ去るのであり、また、神さまの御前にむなしく、神さまの怒りを受けることにもなるのです。

そのような人間の知恵の愚かさを知っても、ソロモン王は悔い改めませんでした。ダビデ王の場合、罪を犯したのですが、ダビデ王は悔い改めました。人はその生涯の中で失敗することがあります。そのときには、神さまに立ち帰りましょう。神さまは、悔い改めて生きる者を赦してくださいませ。神さまを恐れ敬い、悔い改めて生きるところに、信仰者の人生があります。（望月 信）

[今週の暗唱聖句]

列王記上 11章6節

ソロモンは主の目に悪とされることを行い、
父ダビデのように主に従い通さなかった。

〈ねらい〉

神様は、ぼくたち私たちを心から愛してくださっています。悔い改めるならば、神様は、どんな罪をも赦してくださいます。その神様の愛について、御言葉に聞きましょう。

〈展開例〉

ソロモンは、神様に信頼して、神様を第一として、素晴らしい知恵を与えられました。そして、素晴らしい富とイスラエル王国を与えられました。しかし、人間は誰も完全ではありません。だんだんお爺さんになったソロモンは、聖書の神様以外の偽物の神様を拝むようになってしまいます。

「ソロモンが老境に入ったとき、彼女たちは王の心を迷わせ、他の神々に向かわせた。こうして彼の心は、父ダビデの心とは異なり、自分の神、主と一つではなかった。」(4)

これは、神の怒りを買うことでした。「ソロモンの心は迷い、イスラエルの神、主から離れたので、主は彼に対してお怒りになった。主は二度も彼に現れ、他の神々に従ってはならないと戒められたが、ソロモンは主の戒めを守らなかった。」(9-10)

偽物の神様を拝むことは神様が喜ばれることでは絶対にありません。偽物の神様を拝むことは小さなことではないのです。決してあってはならないのです。

そこで、主はおっしゃいました。「あなたがこのようにふるまい、わたしがあなたに授けた契約と掟を守らなかったゆえに、わたしはあなたから

王国を裂いて取り上げ、あなたの家臣に渡す。あなたが生きている間は父ダビデのゆえにそうしないでおくが、あなたの息子の時代にはその手から王国を裂いて取り上げる。」(11-12)

結局、イスラエル王国は、ソロモン王のこの偶像礼拝のゆえに、北と南の二つの王国に分裂してしまいます。本物の神様を礼拝しないということは、一つの国が二つに割れてしまうほどの、大きな罪なのです。

「父ダビデの心とは異なり、自分の神、主と一つではなかった。」(4)

神様から知恵をいただくほどの善い関係をソロモンはもっていたのに、偽物の神様を拝んでしまう罪のゆえに、心が神様と完全に一つにならなくなってしまったのです。

ダビデも罪を犯しました。けれども、彼は悔い改めました。ソロモンも罪を犯しました。しかし、彼は悔い改めなかったのです。

悔い改めるぼくたち私たちを神様は愛してくださいます。神様と一つになれない、ぼくたち私たちだけれど、主イエス・キリストの恵みによって、神様との完全な和解が与えられます。心から神様にごめんなさいと言って、心から悔い改めて歩んでいきましょう!!

〈お祈り〉

天の父なる神様。心から悔い改める者を、あなたは決して見捨てません。どんな罪も、心から悔い改めていくことができるようにしてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

神の守りのなかで生活する安心、神と共に歩むことを喜び、確かさを学ぶ。

〈展開例〉

イスラエルの民を正しく裁く知恵をもらったソロモンの王国はますます大きくなり、国は安定し、多くの国との交易も盛んになり、豊かになっていきました。

ソロモン王は神様を礼拝するために神殿建設を完成させたり、箴言（知恵のことば）を整えたり、詩編を残したりした、優れた王でした。けれども、おもに二つの間違いをしました。1000人の女性と結婚したこと、外国の神々を礼拝すること、偶像礼拝をゆるしたことです。

聖書に、ソロモンは「迷った」と書いてあります。

イスラエルの神様、主なる神様と外国の神々と、どちらを礼拝しようかと迷いました。主はソロモンを二度、戒められましたが、ソロモンは従いませんでした。こうして、主なる神様の導きを失った王国は、分裂し、衰退していきます。一つの国の運命をも左右なさる主なる神様の偉大さ、その主の前では、ソロモン王でさえ、とても小さく見えます。

主に守られて生きる安心、御言葉の近くで生きる生活は、礼拝から始まる生活です。

〈お祈り〉

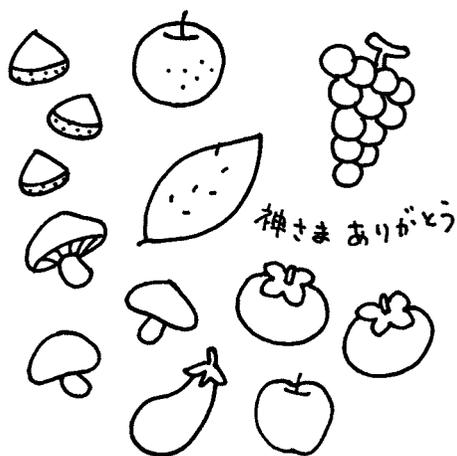
神様。ソロモン王に、とても及ばない私たち、そんな私たちを励まし、共に歩んでくださるイエスさま。自分勝手に生きるのをやめて、神様の言いつけを少しでも守れる子供にしてください。アーメン。

〈やってみよう〉

○宝物を作ろう

用意するもの……先週作った作品、アクリル絵の具、絵筆など

☆先週作った宝物に色を塗りましょう。



〈ねらい〉

あの神の知恵に絶大な信頼を置いていたソロモンでさえも、その晩年、高慢に陥り、自らの知恵を誇り、神様から心が離れてしまいました。そして、偶像崇拜というとんでもない罪を犯してしまったのです。この罪の恐ろしさを子供たちにしっかりと伝えたいと思います。また、それと同時に、悔い改めることの大切さも伝えましょう。

〈展開例〉

1. ソロモンは、一生涯、神様を畏れ敬い、神様に従い続けましたか？

いいえ。残念ながらソロモンは、その晩年、神様から心が離れてしまいました。

「ソロモンは主の目に悪とされることを行い、父ダビデのように主に従い通さなかった。」(列王記上11:6)「ソロモンの心は迷い、イスラエルの神、主から離れたので、主は彼に対してお怒りになった。」(列王記上11:9)

2. あんなに神様の知恵に信頼していたソロモンでさえも、簡単に罪に誘われてしまいました。この罪の恐ろしさについて、みんなで考えてみましょう。

ソロモンは、何もかも順調に進んでいる時に高慢になり、大きな罪を犯してしまいました。私たちにも、同じようなことが起こるのではないのでしょうか。どちらかと言えば、苦しい時、悲しい時、迷っている時には、自分の力ではどうすることもできませんから、「神様、助けてください」と素直に祈ることができるかもしれません。しかし、すべてが順調に進んでいる時には、なかなかそうはいきません。それがまるで自分の力で成し遂げたことであるかのように錯覚し、高慢に陥ってしまうのです。そして、やがて神様に祈ることさえ忘れてしまいます。

しかし、すべてが順調な時にも、神様がすべてを支えておられることを、しっかりと覚えておきたいと思います。ソロモンは、すべてが順調に進んでいる時に、自分の知恵と力によって、その繁

栄がもたらされたと思いついていました。しかし、それは神様が背後で支えておられたからこそ、味わうことができた繁栄でした。やがて神様がその支えておられた手を離された時に、そのことが明らかになりました。

私たちは、すべてが順調な時にも、その背後に神様の助けがあることをしっかりと見つけて、神様に感謝の祈りをささげましょう。

3. 神様の戒めに従わないソロモンに対して、神様はまず何をなさいましたか？

二度、ソロモンの前に現れ、「他の神様に従ってはならない」(列王記上3:10)と戒められました。即ち、「わたしのもとに帰ってきなさい」と悔い改めを迫られたのです。

4. それに対してソロモンはどう答えましたか？

ソロモンは、その戒めを守ろうとはしませんでした。即ち、悔い改めようとしなかったのです。これはソロモンにとって最大の過ちと言えるでしょう。どんなに大きな罪を犯したとしても、本当に心の底から自らの罪を悔い、神様に「ごめんなさい」と謝るならば(悔い改めるならば)、神様は必ず赦してくださいます。なぜならば、イエス様が、そういう私たちの罪を償うために十字架の上で死んでくださったからです。罪を犯しても、私たちが心から悔い改めるならば、神様は十字架のイエス様のゆえに赦してくださいます。本当に嬉しいことですね。このイエス様の赦しを信じて、間違ったことに気づいたならば、素直に「ごめんなさい」と神様に謝りましょう。きっと神様は赦してくださいます。

〈祈り〉

神様。私たちは、すべてが順調な時に、まるでそれが自分の力によって成し遂げられたことであるかのように思って、神様のことを忘れてしまうことがあります。お赦しください。どうか、その間違いに気づいた時には、素直に「ごめんなさい」と神様に謝ることができすように。

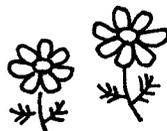
対話の手掛かりとして……。

①列王記上第3-10章には、神さまから与えられた知恵によって、ソロモンが活躍し、イスラエルに繁栄がもたらされていく様子が記されています。しかし、今回の第11章では対照的に、ソロモンの罪の姿が描かれます。ソロモンはどのような罪を犯したのでしょうか。ひとことで言えば、「偶像礼拝」です。ソロモンは、神さまが禁じられていた外国の女性と交際を繰り返しました(1-3節)。外国人と交際するという事は、彼女たちが信じている偶像の神々が、自分の中に入り込み、惑わされたのです(7-8節)。私たちも、偶像の神々を信じている人たちと関わるのがよくあり、心惑わされることも少なくありません。ですから、まことの神さまの信仰から離れることがないように、またそのような人たちと誠実に対話することができ、愛することができるように、日々、祈り求めていきましょう。

②ソロモンが罪を犯したもうひとつの原因は、「老境に入った」ということです。歳を重ね、老人になった時に、彼の心は迷い、異教の神々に心奪われてしまったのです(4節)。このことはとても興味深いことだと思います。歳を重ねるということは、それだけ若い人よりも、人生経験が豊富になり、この世を生き抜く術や知恵を蓄えているということです。歳を重ねた分だけ、人は強くなれるというところがあります。しかし、一方で、長く生きてきた分だけ、失敗や弱さ、悲しさを抱えています。また、これまでは簡単に出来ていたものが、段々と出来なくなるという惨めさを身に染みて覚えるようになるのです。そして、罪を犯すということにおいても、若い者より多く重ねて生きているのです(ヨハネ8:9)。それだけに、まことの神の知恵にますます依り頼み、支えを求めるべきです。

③ソロモンが犯した罪について、聖書は「主と一つでなかった」(4節)と記します。「一つ」というのは、「完全」「十分」という意味があり、神さまと人、人と人との関係において用いられるときは、「平和(完全に一つである)」というふうに訳されます。罪の本質は、誘惑に負けて失敗をすることではなく、私と神さまの間に平和が失われているということです。主と心が一つであり、平和な関係があるならば、たとえ罪を犯しても、神さま前に悔い改めることができます。ソロモンの父ダビデも、罪を犯しましたが、彼は主のもとに立ち帰り、悔い改めました(4節後半、サムエル記下11-12、詩編51)。神さまと私たちの間に平和があるというのは、いつでも立ち帰る場所があるということです。ですから、悔い改めをすることができることは大きな恵みなのです。しかしソロモンは神さまから過ちを指摘され、悔い改めを促されたにもかかわらず、自ら神の平和を捨て、まことの神さまから離れたのです。

④ソロモンの罪に対して、神さまはお怒りになり、その結果、神の民であるイスラエル王国が、南北2つに分かれることとなります(11節以下、12章)。しかし、憐れみ深い神さまは、ソロモンの子孫の王国が存続していくことが約束されます。ダビデの子孫から救い主を誕生させるという約束を、ソロモンの罪の中にも貫かれるのです。やがて救い主としてお生まれになったイエス・キリストの御業において、神さまと私たちの間にまことの平和がもたらされました(ローマ5:1)。たとえ私たちがあゆみですが、目の前にいつも神さまの前に立ち帰る平和の道が用意されていることに感謝をし、神さまと共にある自分を喜びましょう!



テキスト 列王記上 18章16～45節

〈ただ一人、主の預言者として残った〉

エリヤの時代、王妃イゼベルは主の預言者を切り殺す一方で、偶像の預言者たちを自分の食卓に着かせていました(18:4, 19)。そのような中で、エリヤの目には、自分が生き残った最後の預言者のように見えました。「わたしはただ一人、主の預言者として残った」(18:22)。もし、状況によって判断するなら、主が生きて働いておられるようには見えなかったでしょう。しかし、エリヤが迷うことはありませんでした。

〈どっちつかずに迷って〉

「もし主が神であるなら神に従え。もしバアルが神であるなら、バアルに従え」(21)。このように問いかけるエリヤに対して、民はひと言も答えませんでした。民は「どっちつかずに迷って」いたのです(18:21)。とはいえ、迷いつつも実際の生活では、信仰を捨てたかのような状態になっていたことでしょう。まさに「神に逆らう者が興ると人は身を隠す」という状態になっていたのです(箴言28:12)。主よりもバアルに味方する者のように歩んでいました(19:10, 14)。

主がイスラエルの歴史を導かれたことは否定することができません。しかし今は、神に逆らう者が世を治めています。そして、主の預言者は次々と殺されていきました。状況は、主が生きて働いておられるとは思えないようなものでした。民は迷っていました。そこで、エリヤは提案しました。ささげられた犠牲の雄牛に「火をもって答える神こそ神であるはずだ」。しるしによって確かめてみようというのです。この言葉を聞いた民は皆「それがいい」と答えました(18:24)。

〈大声で呼ぶがいい〉

バアルの預言者は大勢で、熱心に「朝から真昼までバアルの名を呼び」続けました(18:26)。そして、ついには狂ったようになって祈りました。しかし、エリヤはバアルの預言者たちの熱心に

してまったく冷淡でした。「大声で呼ぶがいい。バアルは神なのだから。神は不満なのか、それとも人目を避けているのか、旅にでも出ているのか。恐らく眠っていて、起こしてもらわなければならないのだろう」(18:27)。バアルがまるで生きておられるかのように、バアルに対して祈ることを嘲ったのです。すなわち、偶像がいかにも勢よく仕えられようとも、「耳があっても聞こえず、……手があってもつかめず、足があっても歩けず」死んだものにすぎないことを決して見失わなかったのです(詩編115:6-7を参照)。

〈主の祭壇を修復した〉

エリヤは、迷っているすべての民を自分の近くにさせました。そして、壊された主の祭壇を修復しました(18:30)。その祭壇は、民によって破壊されたものだったでしょう(19:10, 14)。エリヤは、時が良くても悪くても主を礼拝していましたが、民はそうではなかったのです。彼は、主への礼拝を、その時、その場で立て直しました。そして、律法の規定どおりに雄牛を切り裂き、薪の上に乗せました。さらに、四つの瓶に水を満たして三度にわたって、その雄牛と薪の上にかけてさせました。あたかも、どんなに水をかけられても、主への礼拝は妨げられないことを示すかのようでした。そして、これまた律法の規定どおり、「献げ物をささげる時刻に」エリヤは祈って言いました。「これらすべてのことをあなたの御言葉によって行ったことが、今日明らかになりますように」(18:30-37)。「すると、主の火が降って、焼き尽くす献げ物と薪、石、塵を焼き、溝にあった水をもなめ尽くした」(18:38)。これを見た民は、バアルへの迷いを捨てて、主のみを礼拝して言いました。「主こそ神です。主こそ神です」(18:39)。

時が良くても悪くても、変わることなく主を礼拝し続けた一人の人を通して、主がご自身への礼拝を立て直してくださったのです。(貫洞賢次) ※第26号(7月8日聖書研究)からの再掲載です。

9月18日 「バアルと対決するエリヤ」 説教展開例

テキスト 列王記上 18章16～45節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問41, 42

〔単元のねらい〕

今朝は、エリヤ物語の中でも最も劇的場面、カルメル山上でのバアルの預言者との対決の物語を通して、契約の神の真実と信仰の大胆さについて学びます。イスラエルには、干ばつが三年間続きました。それは、イスラエルの偶像礼拝に対する裁きであると同時に、バアル神を礼拝する者たちへの裁きでした。バアルとは雷と雨を支配して、大地に実りをもたらず農耕の神として信じられていました。預言者エリヤは、偶像とその信仰者たちと対決します。生ける神は、ご自身の栄光をエリヤの信仰を通して、現されます。生けるまことの神とその偉大な力を共に賛美しましょう。また、まことの神を信じる者は少数者ですが、神の勝利は、人数や武力によらず、信仰によることを学びましょう。(蛇足ですが、信仰とは、徹頭徹尾、神の恵み、賜物であることを忘れないために、第19章の疲れ果て、信仰が萎えてしまうエリヤの現実を、添えて語ることも大切でしょう。)

「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられる」

今、エリヤという預言者のものすごい活躍のお話を聴きました。この当時、まことの神さまの御言葉を伝える預言者は、わずかでした。それというのも、アハブという最悪といってもよいほどの王さまが、預言者を迫害していたからです。アハブは、イスラエルのまことの神さま、僕たち私たちの信じる聖書の神さまではなく、偶像、偽物の神を信じる人だったのです。

偶像礼拝というと、すぐに思い出すのは、「金の子牛のお話」かもしれません。あのときの偶像礼拝は、少なくとも自分たちは、エジプトから脱出させてくださった神さまを神さまとして礼拝しているのだというものでした。けれども、今、このアハブ王がしたことは、バアルというまったく「異教」のカミだったのです。

たとえば、僕たち私たちのこの礼拝堂には、像が一つもありませんね。大きな十字架のしるしすら、かざっていません。でも、もしも来週の日曜日、この礼拝堂に大きな仏像がおいてあったとしたらどうですか。とんでもないことですね。そんなことは、決して、あり得ないことですよね。

ところが、アハブは、エルサレムの神殿に、なんと、バアルの像を置いてしまう……。何よりも、

この悪い王は、バアル信仰、バアル宗教をイスラエルの信仰、国の宗教にして、全員に信じることを強制したのです。

バアルというのは、畑に豊かな作物を实らせることが出来るというカミでした。実は、そのようなカミガミは、今も世界中のいろいろなところで信じられ、拝まれています。僕たち私たちのまわりにも、実は、そのようなカミガミがたくさんあるのです。そのカミを信じると、雨を降らせ、太陽を昇らせ、たくさんの収穫が得られるというわけです。反対に、雨が降らないとか降りすぎるとかという災いは、このカミを信じるのが足りないからなのだというのです。

さあ、そんなイスラエルの危機のとき、神さまは、ひとりのすばらしい預言者を立ててくださいました。それがエリヤです。エリヤは、神さまから受けた御言葉を恐れることなく、あのアハブ王に宣言しました。「わたしの仕えているイスラエルの神さまこそ、まことの神さまだぞ、主は生きておられるのだ。わたしが告げるまで、数年の間、雨は降らない！」

すると、なんと三年間、雨が降らなかったのです。神さまは、アハブに命じられるまま偶像礼拝をしたイスラエルの人々を裁かれました。また、バアルなどが偽物のカミ、偶像に過ぎないことを、明らかにされたのです。

そして、ついに、最後の勝負の時、決着をつける時が来ました。エリヤは、たったひとりで、異教の宗教者たち、450人のバアルの預言者、400人のアシェラの預言者—このアシェラというのは、女神です—たちと対決するのです。

どんな勝負をするのでしょうか。カルメル山の上で、エリヤは、イスラエルの人々に呼びかけました。「いつまで、どっちつかずに迷っているのですか。もし主が神であるなら、ただ主のみ仕えるべきでしょう。もし、バアルが神なら、よろしい、バアルに従いなさい！」まるで、けんかで、たんかを切るような言い方です。エリヤは確信に満ちています。バアルが神であるはずなど決してないからこそ、こんな言い方をしたのです。

次に、エリヤは、それぞれに、薪の上に一頭の雄牛を置いて火をつけずにおいておかせます。エリヤは、挑戦して言います。「バアルは雨を降らせることができるし、そのために雷をとどろかせることなど、簡単なはずでしょう」。

バアルの預言者たちは、懸命に、「バアルさま、わたしたちにこたえて、天から火を下してください。雷を起こしてください」と祈ります。だんだん、飛び跳ね、剣で体を傷つけ、血を流す者もです。しかし、火は降りません。

そして今度は、エリヤの番です。イスラエルの十二部族を覚えるために、十二の石で祭壇を造ります。そして、その雄牛に三度も大量の水を注ぎ

かけさせます。雄牛も祭壇も、びしょびしょです。そして、エリヤがイスラエルのまことの神さま、アブラハム、イサク、ヤコブの神の御名を唱えて祈ると、どうでしょう。ただちに、天から火が降りました。そして、全部を燃やしつくしてしまいました。

これを見た、イスラエルの人々は、ひれ伏して、神を礼拝しました。つまり、僕たち私たちの神さまだけが、まことの神さま、生ける神さまなのです。力ある神さまです。何よりも、約束をかわしたイスラエルを、彼らがどんなにおそろしい罪を犯してもなお、お捨てにならないのです。

生きておられる神さまは、今も僕たち私たちと一緒にいてくださいます。学校で、クラスで教会に来ている友だちは、ひとりもないかもしれません。でも、エリヤさんのことを思い起こしましょう。たとい、まことの神さまを信じる人が少なくても、偶像の死んだ神や、それを信じる人たちに、神さまが負けてしまうことはないのです。

「おい、キリスト教の神がいるなら、見せてごらんよ」なんて、悪口を言われたことのあるお友だちはいませんか。エリヤのように火を下すことができたら、なんて、思ってしまうこともあるかもしれません。けれども、神さまは、既に、僕たち私たちの一番深い祈り、願いに答えてくださいました。つまり、天から、救い主のイエスさまが来られました。これこそ、僕たち私たちに、すべての人たちに対する神さまの愛の証拠、答えです。主なる神さまは生きておられます。イエスさまは、僕たち私たちといつもいっしょにいてくださいます。
(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] 列王記上 17章1節後半

わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。

わたしが告げるまで、数年の間、露も降りず、雨も降らないであろう。



〈ねらい〉

神様は、ぼくたち私たちが心から愛してくださっています。どんなときも変わることなく神様を礼拝していくことについて、御言葉に聞きましょう。

〈展開例〉

ぼくたち私たちが教会に行こうとするけれども、お友だちから遊ぼうと誘われたことはないかな？（皆に聞いてみる……）そういう中で、ぼくたち私たちは、いつも神様を選んでいく、神様に従っていく、そのような歩みをしていきたいと思えます。

「エリヤはすべての民に近づいて言った。『あなたたちは、いつまでどっちつかずに迷っているのか。もし主が神であるなら、主に従え。もしバアルが神であるなら、バアルに従え。』民はひと言も答えなかった。』」（21）

バアルの預言者との戦いの中で、エリヤはイスラエルの民を励ましました。しかし、イスラエルの民は、どっちつかずに迷っていました。しかも、エリヤが「わたしはただ一人、主の預言者として残った。バアルの預言者は四百五十人もいる」（22）と言ったように、エリヤはたった一人残された預言者でした。それに対して、バアルの預言者は450人もいました。本当に神様が生きておられるのか、この現実を見たら、皆心が意気消沈してしまっただけだと思うのです。でも、エリヤには自分が神様から遣わされた預言者だという強い確信がありました。そこで、神の御名を呼び、天から火を降していただいて一頭の雄牛を焼き尽くすという戦いを、バアルの預言者たちとするのです。

バアルの預言者たちは、一生懸命にバアルの神を呼び、火を降してくださるように祈ります。でも、何の答えもありませんでした（25-29）。それはそうです。神は、偽物の神と本物の神がおられるのではなくて、本物の神様しかおられないのです。

「『そこであなたたちはあなたたちの神の名を呼び、わたしは主の御名を呼ぶことにしよう。火をもって答える神こそ神であるはずだ。』民は皆、『それがいい』と答えた」（24）。エリヤには、主なる神がまことの神様であり、祈りに答えてくださるという確信があったのです。

「献げ物をささげる時刻に、預言者エリヤは近くに来て言った。『アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ、あなたがイスラエルにおいて神であられること、またわたしがあなたのぼくであって、これらすべてのことをあなたの御言葉によって行ったことが、今日明らかになりますように。』」（36）「すると、主の火が降って、焼き尽くす献げ物と薪、石、塵を焼き、溝にあった水をもなめ尽くした。」（38）

神様は、こうして、エリヤを通して、聖書の神様こそ、本物の神様であることを明らかにされました。ぼくたち私たちが信じている神様は真の神様なのです。どんなときも、この神様だけを礼拝していきましょう！！

〈お祈り〉

天の父なる神様。ぼくたち私たちが、どんなときも真の神様だけを礼拝できるように導いてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

預言者エリアが偽りの神バアルの預言者たちにいどみ、勝利する物語を通して、生ける真の神の働きを学ぶ。

〈展開例〉

ソロモン王のあと、北イスラエルと南ユダ王国にわかれてきました。これは北の王国の4代目のアハブ王の時のお話です。アハブ王は、北イスラエル王国の多くの王の中で、もっとも悪く、本当の神を離れて、バアルという異教の神を信じ、その神殿まで作ったほどのひどい王様でした。民にバアルを信じさせようとまでしました。真実の神、主は、民が立ち帰るようにエリアを遣わしました。

エリヤは言います。「わたしの仕えている神こそ、本当の神」「主に従うのか、バアルに従うのか？」

エリヤはたったひとりで850人を相手に、カルメル山で戦い、雄牛を祭壇ごと焼き尽くす勝負に勝つことができました。イスラエルの民は「主こそ神です。主こそ神です」と言い、主を礼拝しました。

主なる神は、迷う人々にいつも正しい道を示されます。今日は、エリヤさんの信仰を通して示されている、神さまの確かさを学びました。御言葉を通して示される神の道は、明るく照らされ、歩むに楽しく、はっきりと目的地まで続いています。

〈お祈り〉

神様。たとえ一人になっても、どんなに敵が多くてもわたしは安心です。いつもイエスさまが一緒だからです。今日もみんなで元気に過ごします。アーメン。

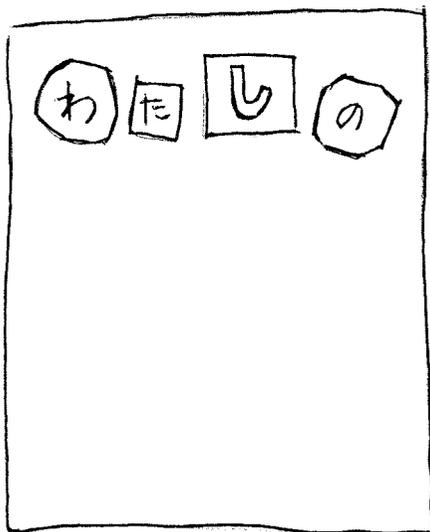
〈やってみよう〉

○暗唱聖句を作るう

用意するもの……新聞紙、貼るための台紙、ハサミ、のり

☆今日の暗唱聖句

「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられる」(列王上17:1)。



〈ねらい〉

信じる人がどんなに少なくても、主なる神様は御自分を信じる者を通して御自身の栄光を現わされることを学ぶ。

〈展開例〉

みんなは普段学校に行っていると思いますが、学校に教会に行っているお友達はいるかな？ ほとんどいないですね。日本でのクリスチャン人口は1%未満、つまり100人に1人よりも少ないと言われています。そういう中でなぜ自分だけ教会に行っているのだろうと寂しい気持ちになることがあるかもしれません。

実は、今日のお話に出てくる預言者エリヤも、私たちと似たような状況でした。いや、私たちよりも厳しい状況だったと言えるでしょう。今日のお話に出てくるバアルの預言者は何人だったでしょうか？ そう、450人ですね。それに対して本当の神様の預言者は何人でしたか。そうたった一人、エリヤだけでした。もし自分がエリヤだったらどうでしょうか。たった一人で孤独で、心細くて、逃げ出したくなるかもしれません。

しかし、エリヤはバアルの預言者たちに立ち向かっていき、彼らの対決することになります。それは、どのような対決だったのでしょうか？

そう、バアルの預言者とエリヤはそれぞれ雄牛を薪の上に載せ、それぞれ自分の神様の名前を呼んで、どちらの神様が火をもって答えてくれるかで、どちらが本当の神様かをはっきりさせようとしたんですね。しかも、エリヤはこの対決を自分から提案し、バアルの神を呼ぶ預言者たちの姿を見てあざけています。人数的には自分一人で相手が大勢であるにもかかわらず、エリヤはとても強気ですね。なぜでしょうか？

なぜなら、エリヤは自分の信じている神様こそ本当の神様であり、偽物の神であるバアルには何もできないと知っていたからです。

そして、実際、バアルの預言者たちがいくらバアルの名を呼んでも何も起こりませんでした。けれども、エリヤが主の名を呼ぶと、主の火が降りてきて、雄牛、薪、石すべてを焼き尽くしたのでした。

いくら信じている人が多くとも、偽物の神には何の力もなく、いくら呼んでも答えてはくれません。逆に、いくら信じる人が少なくても、たとえエリヤのようにたった一人になろうとも、真の神様は信じて求める者に答えてくださり、御自身の栄光を現わしてくださるのです。

私たちの住む日本には、お寺や神社がたくさんあり、様々な神様があります。多くの人がその神様を拝んでいます。初詣には毎年何千万人の人が訪れるそうです。しかし、人間の作った偽物の神様には、所詮何の力もないのです。

日本においてクリスチャンは少数かもしれませんが、私たちが信じている神様こそ、雄牛を載せた薪に火をつけることができる、力ある真の神様です。そして、主なる神様は今も生きており、信じて祈る私たちに答えてくださいます。信じて祈る私たちを通して御自身の栄光を現わしてくださるお方なのです。ただお一人の、主なる神様だけを信じ、礼拝していきたいと思います。

〈祈り〉

神様。あなたこそ信じる者に答えてくださる、力ある真の神様であること学ぶことができました。感謝いたします。どうぞこの日本の中にあっても私たちがただあなただけを信じ、あなただけを礼拝していくことができますように。



対話の手掛かりとして……。

- ①エリヤはイスラエルの人々の「いつまでどっちつかずに迷っているのか」と、彼らの不信仰を指摘しました(21節)。「どっちつかず」ということは、普段の生活の中だけではなく、信仰生活においてもよくあることではないでしょうか。しかも「どっちつかず」ということを、「どっちでもいい」という否定的な意味ではなく、「どっちにも賛成」というふうに肯定的に理解してしまうことも少なくありません。なぜなら、どっちかにつくことによって起こるトラブルよりも、どっちつかずによって何も起こらない平穏な方がいいからです。
- ②信仰生活においても、「どっちつかず」になってしまうことがあります。しかし、このことは優柔不断や決断力のなさといった性格の問題ではなく、信仰の問題です。イスラエルの人々は、イゼベルによる迫害を恐れるがゆえに、まことの主なる神に従うことができませんでした。心の中では、バアルなどの異教の神々が偽りの神であることが分かっていたとしても、恐れゆえに、信仰を告白できず、「主に従う」(21節)ことのできない罪があったのです。
- ③しかし、そこで「あなたたちは、どっちつかずでダメなやつだ」と言い切ってしまうと、問題は解決されないと思います。信仰告白をしていない子どもたちの中にも、心の中ではまことの神を信じている者、信じたいと願っている者は、実はとても多いのです。そのことをまず積極的に見つめる必要があるのではないのでしょうか。まず、信仰の芽が子どもたちの心に既に与えられていることに気付かせてあげましょう。そのうえで、ひとことも答えることができなかったイスラエルの民のような悩みや弱さ、また罪を抱えているのも事実です。

④しかし、そのような私たちに對して、神さまは何をしてくださったのかということ、今回のテキストに従って、確認し、発見へと導いてあげることが大切です。エリヤがバアルに仕える預言者たちに勝利したというこの出来事は、まことの神に対する信仰告白を妨げていたバアルの偽りの神に打ち勝ってくださったということです。そのことによって、イスラエルの民が、「まこそ神です」ことを知るようになるためでした。そして、事実どっちつかずの不信仰が、まことの信仰へと変えられたのです(39節)。

⑤この奇跡が、今の時代に生きる私たちの間にも起こるのだと、神さまは約束して下さいます。私たちの周りには、具体的な宗教の神々だけではなく、信仰告白を妨げる様々な障壁があると思います。でもそこで、もうダメだと諦めてしまうのか、カルメル山上での奇跡がこの子の中にも起こるのだと信じて、子どもたちに接するかでは大きな違いがあります。エリヤはどんな妨げがあっても、神を礼拝することをやめませんでした。人間の目からすれば不可能なことも、神さまは可能として下さることを信じて行動し、祈り続けました。

⑥私たちもエリヤの祈りを、教会の祈りとしていたのです。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ、あなたがイスラエルにおいて神であられること、またわたしがあなたの僕であって、これらすべてのことをあなたの御言葉によって行ったことが、今日明らかになりますように。わたしに答えてください。主よ、わたしに答えてください。そうすればこの民は、主よ、あなたが神であり、彼らの心を元に返したのは、あなたであることを知るでしょう。」(36、37節)



バビロン捕囚はイスラエルの歴史上最大の悲劇である。その概要は以下の通り。

「紀元前6世紀にユダの住民の一部がバビロンに連れ去られた出来事。イスラエル王国の滅亡後（前722－1年）、北王国の住民はアッシリアに連れ去られたが（列王下18:11－12）、それから百数十年後、今度はユダの住民が三度にわたりバビロニアに連行された。ユダの王ヨヤキンがエルサレムを攻撃していたネブカドネツアルに降伏した結果、前598年に第一次捕囚が起こった（列王下24:12－16）。征服者が新しいエルサレムの統治者として立てたゼデキヤもまたバビロン王に背いた。またもやエルサレムは攻撃を受け、前587～6年に都は陥落し、神殿は破壊され第二次捕囚が起こった（列王下25:8－21、エレ39－8－10、52:12－34）。神殿破壊後しばらくして総督に任命されたゲダルヤに対する反抗が起こり、前583年に再び捕囚が行われ、前538年帰還を承認するキュロスの勅令にいたるまでバビロニアに留まった」（『聖書辞典』、新教出版より）。

今日のテキストに記されるのは第二次捕囚である。その出来事の悲惨さは、17～20節を読めば明瞭である。民族の誇りでもあった神殿を破壊され、宝物は略奪され、老若男女問わず虐殺される。そして貴族、知識階級など、国の中心を担っていた者たちが根こそぎ異郷の地へ連行され、力なき貧しい民だけが後に残された（列王下25:12）。

この悲劇は、イスラエルの背きに対する「主の怒りが燃え上がり、もはや手の施しようがなくなった」（16）ゆえの裁きの刑罰である。それは申命記において警告されていた呪いの実現である。申命記28章15節からを必ずお読みください。そこに示された地獄絵図のような光景が、現実起こったという体験がバビロン捕囚である。

神は民を憐れんで、「御使い（この場合、メッ

センジャーの意）、預言者」を「繰り返し」遣わして、イスラエルの偶像礼拝や倫理的墮落の罪を繰り返し指摘し、主の審判が近づいていることを幾たびも警告してきた。とりわけ、エレミヤ5章、9章、11章、エゼキエル5章、6章、12章などには、捕囚の悲劇がまもなく実現するとの預言をもって、最後の悔い改めが迫られた。「彼らは、そのかたくなな心に従い、また先祖が彼らに教え込んだようにバアルに従って歩んだ。それゆえ、イスラエルの神、万軍の主は言われる。『見よ、わたしはこの民に苦よもぎを食べさせ、毒の水を飲ませる。彼らを、彼ら自身も先祖も知らなかった国々の中に散らし、その後から剣を送って彼らを滅ぼし尽くす』（エレミヤ11:13－15）。

しかし、民は決して聞こうとしなかった。「祭司長たちのすべて」も一緒になって「諸国の民のあらゆる忌むべき行い」にならった。すなわち人身御供さえともなう異教儀礼の数々を取り入れ、「神殿を汚した」のである（エゼキ8:5－18など）。そして、「御使いを嘲笑い、その言葉を蔑み、預言者を愚弄」して、聞く耳と心を持つとはしなかった。

このような民の背信の罪は、捕囚直前に限ったことではない。イスラエルはその始まりから頑なであり、反逆の歴史を刻んできた。民族の始まりからの背きの記憶を、一つの信仰告白としてまとめた詩編106編にはこう歌われる「主は幾度も彼らを助け出そうとされたが、彼らは反抗し、思うままにふるまい、自分たちの罪によって墮落した」（詩編106:43）。神はその民を罰せずにはおかない。しかし、その神が、なおも憐れまずにはおられない。自らの契約にどこまでも誠実であろうとしてくださる主なる神の、民への愛は深い（詩編106:44－46を参照）。この神が、イエスを与えてくださった。（坂井孝宏）

テキスト 歴代誌下 36章11～23節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問24

〔単元のねらい〕

聖書は、約束の民である十二部族が北イスラエル王国と南ユダ王国に分裂したことも、今朝、取り扱うユダ王国のバビロンへの捕囚も、神への背信への裁きとして告げています。神の民であるにもかかわらず、聖なるイスラエルの神殿において異教の神を拝み、はては、神の律法の書そのものの存在すら忘れるほどでした。神の契約を徹底的に破る、驚くべき不信仰です。しかし、さらに驚くべきことは、神は、そのような不信の民を繰り返し神の民と呼び続け、悔い改めへと招き、預言者を遣わし、善き王すらお立てくださいます。今朝は、先祖の罪が重なり、ついに時至り、神の怒りが峻厳に下ったことを物語ります。しかし、ここでこそ、神の究極の怒りは、神の独り子に峻厳にくだされ、私たちのような異邦人にすら恵みが波及したこの驚くべき絶大な神の恵みを、子らの心に刻みつけたいと思います。

「約束を破る民、守る神」

僕たち私たちは、これまで旧約聖書の中からたくさんのお話を聴いて、礼拝を捧げて来ました。いろいろなことを学べたと思います。どんな感想を持ちましたか。イエスさまのことがあんまり出てこなくて、少し寂しいなど思っているお友だちもいるかもしれません。

確かにイエスさまのことは、直接には、出て来ませんね。しかし、旧約聖書も新約聖書と同じように、まことの主人公はイエスさまなのだと言っています。イエスさまのことは、隠されているだけです。

正直に言うと、先生も、旧約聖書のどこを読んでも、すぐに、神さまの愛や恵みの素晴らしさに感動できるわけではありません。ちょっと戸惑ったり、ちょっとどころか、びっくりしたりということもあるのです。神さまって、厳しいな。怖い感じもするなあと、思ったりします。

でも、このイエスさまのことをちゃんと信じていると、だんだん、旧約聖書に書いてある、神さまの愛の御心を悟ることができるようになります。皆さんも、焦ることはありません。神さまは、御子なる神さま、イエスさまを僕たち私たちに与えてくださった神さまだということをちゃんと信じていれば、だんだん、旧約聖書を、きちんと理

解して行くことができるようになります。イエスさまこそ、旧約聖書のまことの主人公なのです。

さて、でも、今朝の聖書は、とても悲しく、厳しい思いをもって、朗読しました。つらい思いを持たないでは、読めませんでした。

なぜなら、神さまの民、南ユダ王国に住んでいた人々が、異邦人の王さまカルデア人の王、ネブカデネザル二世によって、攻撃されてしまったからです。

若者たちだけではなく、少女たちも、老人たちも容赦なく殺されてしまいました。そして、イスラエルの誇り、神さまの聖なるエルサレム神殿は、焼き払われてしまいました。石で積み上げられた壮大な城壁も崩されてしまいました。王の宮殿も、跡形もなく燃やされてしまいました。

神殿の宝物も、宮殿の宝物も、皆、バビロンに持ち運ばれ、奪い取られました。何よりも、殺されずに残った人たちも、バビロンに連れ去られ、奴隷とされたのです。

いったい何故、そのような恐ろしいことが、起こってしまったのでしょうか。歴代誌下第33章7～8節にこうあります。「神はその神殿について、

かつてダビデとその子ソロモンにこう仰せになった。『わたしはこの神殿に、イスラエルの全部族の中から選んだエルサレムに、どこしえにわたしの名を置く。もし彼らがわたしの命じるすべてのこと、モーセによるすべての律法、掟、法を行うよう努めるなら、わたしはあなたたちの先祖のもと定めたこの土地から、二度とイスラエルを移さない』。

エジプトの奴隷であったイスラエルの人々を救い出して、約束の地に導かれたのは、神さまでした。そして、この国に、王さまを与え、何よりもまことの王さまであられる神さまを礼拝する神殿をエルサレムの都に、ダビデの子、ソロモンに建築させることを許してくださったのも神さまです。しかも、この土地からイスラエルの人々がどこかに追い出されたり、連れて行かれたりすることはないと、神さまが誓ってくださったのです。それなのに、どうしてなのでしょう。

神さまの約束の言葉を注意して聴きましょう。神さまは、神の民に、もし、あなたがたがわたしの命じるすべてのこと、つまり、神さまがモーセを通して、ご自身の民に与えてくださったすべての律法を守り、行うように努めるならとおっしゃいました。神さまの掟、戒めを守り行うことが求められていたのです。

ところが、モーセの時代からおよそ600年の後、聖なる神さまの神殿の中に、まったく異教のカミの祭壇が築かれていました。また、なんとモーセの掟、律法の書そのものの存在すら、忘れられてしまったときもあったほどです。もう、まったくでたらめな生き方をしていたわけです。神さまは、そんな不信仰な御自身の民に向かって、何度も預言者を遣わして、悔い改めるようにと呼びかけました。たとえば、エレミヤという預言者は、いのちをかけて、悪い王さまの政治を批判しました。また、神さまは、善い王さまや祭司たちも協力して、まことの礼拝へと立ち戻らせてくださったこ

ともありました。

けれども、神さまは、ついに、頑なに神さまを無視し、背いて、しかも偶像を拝んだイスラエルの人々を見逃されません。それは、神さまは、ご自身の御言葉の約束を守られる神さまだからです。神さまはどこまでも正義の神さまで、正しい神さまなのです。

僕たち私たちは今朝、罪を憎み、嫌われる神さまの厳しいお姿をしっかりと見つめたいと思います。イスラエルの人たちは、自分たちは神の民、特別なことから、自分の国を減ばされ、外国に奴隷として連れて行かれることなどあり得ないと考えていました。その自分勝手な考えを持ち続けたイスラエルの人たちの愚かさをもしっかりと見つめたいと思います。

けれども、神さまは、どうしようもなく罪深く、反抗的で、愚かで、ちっとも神の民らしくないこのイスラエルの人々を、もうダメだと見捨てられませんでした。エレミヤを通して語られた通り、70年後にエルサレムの都に連れ帰らせてくださったのです。

さらに言うと、実は、その人たちもまた、そのままずっと反省し、悔い改めを続けたのではありませんでした。やがて、神さまの御子、救い主イエスさまが地上に来られた時、ついに反抗していきます。

けれども、新約聖書は言います。「神さまは、イエスさまを通して、信じるすべての人々をお救いになられる」。神さまの厳しい裁きが十字架の上でイエスさまにくださったことによって、旧約聖書の時代の人々のあの罪も、イエスさまの時代の人々の罪も、今生きている僕たち私たちの罪も、これから生まれてくる人々の罪も赦されるのです。イエスさまが代わりに苦しみ、死んでくださったおかげです。すばらしい神さま！ と賛美あるのみですね。 (相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句]

ローマの信徒への手紙11章22節前半

だから、神の慈しみと厳しさを考えなさい。

〈ねらい〉

ほくたち私たちがどんなに神様に背を向けてしまっても、主イエス・キリストをお与えくださるほどに、神様はほくたち私たちを愛してくださっています。その神様の愛について、御言葉に聴きましましょう。

〈展開例〉

イスラエルには、ダビデとかソロモンのような素晴らしい王様もいました。しかし、次から次へと神様を否定するような、神様に背を向けるような王様もまた立てられるようになりました。それでも神様は、「先祖の神、主は御自分の民と御住まいを憐れみ、繰り返し御使いを彼らに遣わされた」(15) のでした。「神様に立ち帰りなさい」と預言する預言者を遣わされたのでした。

しかし、「彼らは神の御使いを嘲笑い、その言葉を蔑み、預言者を愚弄した。それゆえ、ついにその民に向かって主の怒りが燃え上がり、もはや手の施しようがなくなった。」(16)

神様の愛に背き続ける、神様の愛に背を向け続けた人間に、とうとう、神の怒りが燃え上がったのです。そして、あのバビロン捕囚というイスラエルの歴史上最大の、一番の悲劇的な出来事が起こったのでした。

「主はカルデア人の王を彼らに向かって攻め上らせられた。彼は若者たちを聖所の中で剣にかけて殺し、若者のみならず、おとめも、白髪の老人も容赦しなかった。主はすべての者を彼の手に渡された。彼は神殿の大小の祭具のすべて、主の神殿の宝物も、王とその高官たちの宝物も残らずバビロンに持ち去った。神殿には火が放たれ、エルサレムの城壁は崩され、宮殿はすべて灰燼に帰し、貴重な品々はことごとく破壊された。」(16-19)

元氣な男の人は、皆殺されてしまうか、バビロ

ンに連れて行かれました。残ったのは、一部のお女の人や子供、老人たちだけでした。金、銀、財宝すべてが、バビロンに持って行かれてしまいました。

このような悲惨な、怖い出来事を引き起こしてしまったのは、神様に従わなかった、イスラエルの王様たちの罪のゆえでした。けれども、このバビロン捕囚の直前の王様だけが罪を犯したのではありません。神様によって多くの預言者が遣わされたにもかかわらず、それらの預言者によって神様の御言葉を聞くチャンスが与えられ続けたにもかかわらず、イスラエルの王様は、何人にも何人も、次から次へと、神に背き続けて、とうとうバビロン捕囚にあってしまったのでした。

この出来事とおして、神様は、ほくたち私たちに神様に立ち帰ることの大切さを教えてくださっています。神様の御言葉を聞いて、神様に聞き従う生き方を始めることが大切です。

そして、このバビロン捕囚がありました。神様は、イスラエルの人々を見捨てたのではありません。神様は、70年後に、バビロン捕囚にあった人々をイスラエルに戻して下さったのです。

ほくたち私たちが、どんなに神様に背を向けてしまっても、神様は決して見捨てられることはありません。ですから、主イエス・キリストがお生まれになりました。救い主イエス・キリストをお与えくださるほどにほくたち私たちを愛してくださるのです。神様を愛していきましょう！！

〈お祈り〉

天の父なる神様。私たちを、どんなときにも愛して下さり感謝します。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

ユダ王国のバビロン捕囚は、約束を破り続ける民の背信の結果であるが、それでも恵み、慈しみを与え続けられる神の愛を学びたい。

〈展開例〉

南ユダ王国の国民は、三度にわたりバビロンに連行されました。今日の聖書は、二度目の捕囚のことで、「聖所で多くの国民は殺され、神殿は焼かれ、宮殿は破壊され、宝物は奪われ、殺されなかったものはバビロンに連れ去られた」と書いてあります。ペルシア王キュロスによって帰還が許されるまで、70年間も帰れなかったのです。

背き続ける民に、神はもはや手の施しようもないくらい怒っておられました。捕囚は神の懲らしめでした。それでも、神は預言者を送り続け、励まされます。

捕囚はとても悲しいできごとでしたが、それで

も民は反省しません。人間の罪のためでした。自分勝手に、自分の力だけで生きていけると思い、神様をすぐに忘れ、一緒に生きている友だちや家族を大切にしない。そんな私たちとよく似ています。

弱さや悪いところ、汚れたところ、そんな私たちの欠点をみんなきよめ、赦して、神様の前に立たせてくださる方がいます。みんなのよく知っているイエス様です。このイエス様を遣わしてくださったのは神様です。私たちを愛し続けてくださる神様に、今日も感謝します。

〈お祈り〉

神様、イエス様を遣わして下さって感謝します。いつもイエス様が一緒なので楽しく過ごせます。困ったときもお祈りしますから助けてください。アーメン。

〈ワーク〉**○聖書を開きましょう**

次の○をうめて、御言葉を完成させましょう。(歴代志下38章23節)

「天にいます○、○は、○○の○○の○を○○^{たまわ}に賜った。」



〈ねらい〉

神様に背き続けたイスラエルの民はバビロン捕囚に連れて行かれたが、偶像礼拝を続けていた彼らさえも真の神様は滅ぼされることなく、捕囚からの帰還の道を備えてくださった。今を生きる私たちが神様に従わない罪が赦されるのも、イエス様が代わって罪を背負って死んでくださったおかげです。神様の恵みの素晴らしさを賛美しましょう。

〈展開例〉

イエス様が生まれるずっと以前に、イスラエルの王国は北イスラエルと南ユダに分裂していました。そして、やがて北イスラエルはアッシリアという国に滅ぼされました。

また、南ユダも、ゼデキヤという王様が神様の目に悪とされることを行って、心をかたくなにして神様に立ち帰りませんでした。すべての民たちも人間の手で造った偶像を神々として拝んでいました。それを見られた神様は、神の御使いや預言者を繰り返し彼らのところに送られました。しかし、彼らは預言者たちの言葉を聞こうともせず、偶像礼拝をやめませんでした。そして、ついに神様の怒りが燃え上がって、神様は南ユダを滅ぼすことにされました。南ユダはバビロンという強大国に攻められて、神殿が破壊され、北イスラエルと同じように滅ぼされてしまいました。たくさんの方が殺され、宝物も奪われてしまいました。そして、生き残った人々はバビロンに奴隷として連れて行かれました。このことはエレミヤという預言者を通して告げられていた御言葉が実現したのです。このときになって、イスラエルの人々は、自分たちが神様との契約に従っていなかったことを思い起こしたのです。

この当時よりまだ数百年も前に、エジプトの国で奴隷であったイスラエルの民たちを救い出して、神様が約束の土地に導かれました。その後、ダビデとソロモンによってエルサレムに神殿を建

ててくださったのも神様でした。神様はアブラハムとモーセとダビデに対して約束の土地をイスラエルの民に与えると契約されたのに、どうして、イスラエルはバビロンに滅ぼされ、国を亡くして奴隷として他の国に連れていかれなければならなかったのでしょうか。

みなさんは、今まで旧約聖書のお話をたくさん聞きました。覚えているでしょうか。

神様がイスラエルの民に求められていたことは、神様がモーセを通して与えてくださった律法、掟、法を守るように努めるなら、神様が祝福してくださるという約束でした。

神様はご自分の言葉を必ず守られる真実なお方です。神様は真実で正しいお方です。私たちは、神様が不正なことに対しては必ず罰せられる方であることを覚えたいと思います。しかし、神様は同時に愛のお方でもあります。罪を犯し続けたイスラエルの民を憐れまれて、見捨てることなく、救い出す方法として、70年後、バビロンからエルサレムへの帰還の道を備えてくださいました。

そして、神様はバビロン捕囚から数百年後、信じるすべての人々を救うために、イエス様を私たちにお遣わしくくださいました。神様の厳しいさばきは、十字架の上でのイエス様に下されるという仕方で行われ、神様はイエス様によって私たちの罪を赦してくださいました。イエス様が私たちの身代わりとして神様の罰を受けられて、十字架で死なれました。そして、復活されました。これは、私たちが死んでもまた生き返るといふ保証でもあります。

私たちは、このような素晴らしい神様の恵みのうちに生かされているのです。

〈祈り〉

神様。私たちの罪がイエス様によって赦されていますことを感謝します。いつも私たちと共に歩んでくださってありがとうございます。

対話の手掛かりとして……。

①今、私たちは「神の救いの歴史」について学び続けています。これまで、神さまがこの世界をお造りになった喜ばしい出来事から順に、1ページずつ見てきました。次に、神さまは何をしてくださるのだろうかという期待を抱きながら……。しかし、どれもが素晴らしいと思えることばかりではありませんでした。神さまが備えてくださった喜ばしい道を、自ら踏み外した人間の姿が語られていたからです。その度に、神さまを悲しませ、激しい怒りを与えてしまったのです（詩編106:43）。

②今回学びます「バビロン捕囚」という出来事は、神の民イスラエルの歴史上最大の悲劇と言われます。17～20節には、目を塞ぎたくなるような忌わしい様子が記されています。バビロンという敵国に攻め込まれ、若者も女性も老人も容赦なく殺されました。生き残った者もバビロンに連行され、家族もばらばらになったのです。エルサレムの神殿も破壊され、彼らの信仰の拠り所も失われました。そして外国の支配の下、長い暗黒時代を生きなければならなくなったのです。もしバビロン捕囚という出来事を人間の視点だけから見れば、まさに悲劇としか言いようがありません。また今日の私たちから見ても、「昔イスラエルという国で、こんなことあったんだ。大変だったなあ」と過去の歴史の1ページで終わってしまうこととなります。

③しかし、歴史というのは、世界や人間の歴史だけがすべてではないのです。歴史と時間をすべてにおいて支配しておられるのは神さまです。聖書に記されている神の救いの歴史は、私たち人間の歴史を支配し、今を生きる私たちをも巻き込みます。そこに、神さまとの出会いが生まれ、あなたの本当の姿が見えてくるのです。事実、これまでに多くの人たちが聖書をとおして

語られる神の言葉を聞いて、救いに導かれてきました。昔に生きた民の物語を聞きながら、「これはわたしのことだ」と聖霊が気付かせてくださったのです。ですから、バビロン捕囚は、昔の話と退けるのではなく、神の救いの歴史の中で起こったことであり、この悲劇をとおして、私たちに会おうとおられる神さまに心を向けなければいけません。その時に気付かされるのです。この私の罪が、神さまの怒りを燃え上がらせ、「もはや手の施しようがない」（16節）と言わせてしまうほどの失望を与えてしまったのだと……。

④神の救い歴史は、バビロン捕囚で幕を閉じたものではありませんでした。歴代誌は、捕囚からの解放という約束をもって締めくくられています。そして、預言者エレミヤをとおして語られた約束が成就するというのです。「わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。」（エレミヤ29:11）やがて、神さまの救いのご計画にしたがって、神の独り子イエス・キリストがこの世に到来します。人間に対して、「もはや手の施しようがない」とおっしゃった神さまは、何の罪もないキリストを、私たちの代わりに十字架につけて、裁かれたのです。キリストの十字架によって、あなたに新しい人生の1ページをプレゼントするためです。「歴史の1ページ」という言葉があるように、世界や個人の歴史を1冊の大きな本にたとえることができます。神さまは聖書の中に、救いの歴史を記されました。そこには、神さまとあなたの出会いが記されています。あなたとの出会いを忘れることができないと喜んでくださるのは神さまです。神の救いの歴史の1ページにあなたの名もしっかりと刻まれているのです。

2011年度カリキュラム (2011年10～12月分)

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月 日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
10月2日	回復の約束	イザヤ35章	マタイ11:5, 6
	キリスト預言 (35:5-6)。神が来られる。神の約束に希望をおいて生きよう		
10月9日	解放の告知	イザヤ61:1-4	ルカ4:21
	キリスト預言 (61:1)。神がキリストにおいて語られる福音の慰めに生きよう		
10月16日	新しい契約	エレミヤ31:31-34	エレミヤ31:31
	新しい契約がキリストにおいて成就した。キリストの内住の喜びに生きよう		
10月23日	主の日が来る	マラキ3:19-24	黙示録22:20, 21
	義の太陽として来られたキリストによる完成の日を待ち望もう		
10月30日 宗教改革記念	旧約の歴史を振り返る	詩編106編	ローマ3:24, 25
	旧約の歴史を振り返る。罪の歴史の中に神の憐れみの支配を見て賛美しよう		
11月6日	弟子の派遣	マタイ9:35-10:4	マタイ9:36
	主イエスの教えを聞き、主イエスと共に仕えて生きる弟子たちにならおう		
11月13日	主イエスによる平安	マタイ11:25-30	マタイ11:28
	主イエスのもとにある平安に安らぎ、主イエスの使命を共に担おう		
11月20日	「天の国」のたとえ	マタイ13:44-52	マタイ6:20a
	天の国の価値を知り、それを喜び、それに満ち足りる生き方をしよう		
11月27日 アドベント	五千人の給食	マタイ14:13-21	ヨハネ6:35
	天の国の成就がここにある。主イエスによってもてなされていることを知ろう		
12月4日 アドベント	カナンの女の信仰	マタイ15:21-28	マタイ15:27
	神の愛とありあまる恵みを信じて疑わない信仰の姿を学ぼう		
12月11日 アドベント	わたしたちの間に宿られた神	ヨハネ1:14-18	ヨハネ1:14
	わたしたちの間に宿られた神。当時も今もいつまでも。神をほめたたえよう		
12月18日 アドベント	ヨセフへの告知	マタイ1:18-25	マタイ1:23
	ヨセフの信仰の姿勢に学び、インマヌエルの実現を喜ぼう		
12月25日 降誕祭	東方の学者たち	マタイ2:1-12	ヨハネ3:16
	神に導かれた学者たち。偶像礼拝から離れ、キリストに導かれて旅をしよう		

2011年度 年間カリキュラム

(2011年4月～2012年3月)

二年サイクル聖書物語の第二年

	月 日	教会暦・行事	主題	
2011年 第41号	4月3日	レント・進級式	悪霊を追い出すメシア	マタイ8:28-34
	4月10日	レント	罪を赦すメシア	マタイ9:1-8
	4月17日	受難週主日	十字架のキリスト	マタイ27:45-56
	4月24日	復活祭	キリストの復活	マタイ28:1-10
	5月1日		ギデオンの召命	士師6章
	5月8日	母の日	ギデオンの精鋭	士師7章
	5月15日		ささげられるサムソン	士師13章
	5月22日		サムソンの祈り	士師16章
	5月29日		ナオミとルツ	ルツ1章
	6月5日		ルツとボアズ	ルツ2章(～3章)
	6月12日	聖霊降臨・花の日	聖霊の降臨	ヨエル3章
	6月19日	父の日	サムエルの召命	サムエル上3章
	6月26日		サウルの召命	サムエル上9・10章
第42号	7月3日		ダビデの召命	サムエル上16章
	7月10日		ダビデとゴリアト	サムエル上17章
	7月17日		ダビデとヨナタン	サムエル上20章
	7月24日		ダビデへの契約	サムエル下7章
	7月31日	(平和)	平和があるように	詩編122編
	8月7日		逃げ出したヨナ	ヨナ1章
	8月14日		魚の腹の中のヨナ	ヨナ2章
	8月21日		ニネベで宣べ伝えるヨナ	ヨナ3章
	8月28日		とうごまの木とヨナ	ヨナ4章
	9月4日		ソロモンの知恵	列王上3:4-15
	9月11日		ソロモンの偶像礼拝	列王上11:1-13
	9月18日	(19敬老の日)	バアルと対決するエリヤ	列王上18:16-45
	9月25日		バビロン捕囚	歴代下36:11-23

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	
第43号	10月2日		回復の約束	イザヤ35章
	10月9日		解放の告知	イザヤ61:1-4
	10月16日		新しい契約	エレミヤ31:31-34
	10月23日		主の日が来る	マラキ3:19-24
	10月30日	宗教改革記念日	旧約の歴史を振り返る	詩編106編
	11月6日		弟子の派遣	マタイ9:35-10:4
	11月13日		主イエスによる平安	マタイ11:25-30
	11月20日		「天の国」のたとえ	マタイ13:44-52
	11月27日	アドベント	五千人の給食	マタイ14:13-21
	12月4日	アドベント	カナンの女の信仰	マタイ15:21-28
	12月11日	アドベント	わたしたちの間に宿られた神	ヨハネ1:14-18
	12月18日	アドベント	ヨセフへの告知	マタイ1:18-25
	12月25日	クリスマス	東方の学者たち	マタイ2:1-12
2012年	1月1日	新年	ベト口の信仰告白	マタイ16:13-20
第44号	1月8日		死と復活の予告	マタイ16:21-28
	1月15日		天の国でいちばん偉い者	マタイ18:1-5
	1月22日		「ぶどう園の労働者」のたとえ	マタイ20:1-16
	1月29日		エルサレムのために嘆く	マタイ23:29-39
	2月5日	(11信教の自由)	神殿の崩壊の予告	マタイ24:1-14
	2月12日		目を覚ましていなさい	マタイ24:36-44
	2月19日	(22-レント)	「十人のおとめ」のたとえ	マタイ25:1-13
	2月26日	レント	タラントンのたとえ	マタイ25:14-30
	3月4日	レント	過ぎ越しの食事・主の晩餐	マタイ26:17-30
	3月11日	レント	ゲツセマネの祈り	マタイ26:36-46
	3月18日	レント	ベト口の裏切り	マタイ26:69-75
	3月25日	レント	死刑判決	マタイ27:15-26

〈執筆者よりひとこと〉

- 震災で怖い思いをしたお友だちもきつといたことでしょう。いつも共にいてくださる神様を見上げて歩みましょう!! (いずみ教会教会学校)
- 教会学校の教師たちが悪戦苦闘しながら、みんなですれずつ分担して執筆いたしました。用いられることを祈ります。(千里摂理教会教会学校)
- 子どもたちがイエスさまの恵みの中で強くなれますように。(藤井 真)
- 四日市教会に併設されている「まきば幼稚園」の紹介の機会をお与えくださり、心から感謝いたします。幼稚園の礼拝は月曜日です。3~5歳児向けの聖書のお話はなかなか大変ですが、恵みでもあります。月曜礼拝が終わったら、やっと個人的な安息日(?)です。(長谷川潤)
- 主のみ言葉を学ぶことが、そのまま主の弟子となって従う歩みとなりますように。(木下裕也)

〈購読の申し込み〉

- 『教会学校教案誌』をぜひご購入ください。また、別冊『子どもカテキズム』(300円)をぜひお買い求めください。バックナンバーもあります。第36号までは一部500円で販売しています(品切れの号もあり)。
- 教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。副読本『主は羊飼』(800円)のお買い求めも下記までお願いします。

大垣伝道所 辻幸宏まで

〒503-0996 大垣市島町283

Tel/Fax. 0584-91-3538

E-mail: yukihito.tsuji@nifty.ne.jp

〈あとがき〉

- 東日本大震災の被災者・被災教会の皆様に、心からのお見舞いを申し上げます。
- 被災地において、活動の困難な教会、教会学校・日曜学校があることと思います。子どもたちが教会に来ることの難しい状況もあるかもしれません。子どもたちが守られるよう、また、皆が共に礼拝をささげる教会学校・日曜学校の営みの回復のために、心よりお祈りいたします。
- 救援と復興のためにいろいろな活動、さまざまな方法が考えられるでしょう。その中で、わたしたちキリスト者の何よりの活動は、主なる神の助けを求めて祈ることです。そして、救援や復興に直接かかわることの困難な子どもたちにも、祈ることは与えられています。子どもたちが、祈ることによって、執り成し手として用いられることを学んでいます。子どもたちと共に、被災者と被災教会のために祈りをささげて参りましょう。
- 「信仰の証」を募集しています。受洗・信仰告白の証を分かち合うことにより、互いに励まし合うことを目指しています。教会で受洗者・信仰告白者がおられましたら、ぜひご連絡ください。
- 日本キリスト改革派教会の聖書日課『リジョイス』の「いのちのパン」についても、ご意見をお寄せください。教案誌編集部より提供させていただいています。それぞれの家庭で、また教会で、祈りの場が祝福されるよう願っています。
- 様々なご意見、情報をお気軽に編集部までお寄せください。弊誌は、皆さまのものです。皆さまに奉仕することこそ、その使命、目標です。今後とも宜しくお祈りいたします。
- Soli Deo Gloria!

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき	説教展開例
岩崎 謙 (神港教会牧師)	長谷川潤 (四日市教会牧師)
巻頭説教	橋谷英徳 (関キリスト教会牧師)
大西良嗣 (滋賀摂理伝道所宣教教師)	相馬伸郎 (名古屋岩の上传道所宣教教師)
教会学校・日曜学校訪問	木下裕也 (名古屋教会牧師)
藤澤徳治 (まきば幼稚園理事長・園長)	二宮 創 (太田伝道所宣教教師)
講演	望月 信 (高蔵寺教会牧師)
二宮 創 (太田伝道所宣教教師)	分級展開例
聖書研究	幼稚科 いずみ教会教会学校
後藤公子 (元インドネシア派遣女性宣教教師)	小学科下級 多治見教会日曜学校
鳥井一夫 (八事伝道所宣教教師)	小学科上級 千里摂理教会教会学校
宮武輝彦 (芸陽教会牧師)	中学科 藤井 真 (堺みくに教会牧師)
潮田 祐 (花見川キリスト教会牧師)	イラスト作画
坂井孝宏 (熊本伝道所宣教教師)	表紙 田口裕美 (尾張旭教会)
貫洞賢次 (札幌伝道所宣教教師)	本文 岡野美佳 (青葉台教会)

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上传道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
長谷川潤	四日市教会牧師
望月 信	高蔵寺教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』
2011年7・8・9月号 (季刊)
第42号
2011年5月29日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上传道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
頒価	900円 (本体価格)
